

# すぐも山遺跡

—城郭、中世墓、古墳の発掘調査報告—

1998年3月

岡山市教育委員会

題簽 水内昌康先生(岡山市文化財保護審議会会長)

『すくも山遺跡』 正誤表

項	行	誤	正
挿入図 目 次	14	図14墓1実測図 … 20	図14墓1実測図 … 21
3	3	対称的	対照的
3	7	「備中国大税負死亡人帳」	『備中国大税負死亡人帳』
31	図46	22.02m	22.0m
32	1	長さ約3.4m、幅2.2m	長さ約0.96m、幅0.39m
32	2	約2.2m	約0.66m
45	2	摩滅	摩滅
65～66	IV期	丸底糸 平底糸	丸底系 平底系
70	29	立てられいた	立てられていた
71	1	19、25、32	19、20、25、32
86	1	糖山遺跡	すくも山遺跡

## 序

岡山市は近年の広域合併の結果、わが国の古代社会において中核地域の一つでありました吉備国の中核を占めるようになり、古墳を始めとしました多種多様な遺跡が多数所在しており、その密度は全国的にも有数地の一つと思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として文化財保護行政の中心的な施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発や地域発展が増加の一途を辿る今日的状況の中で、埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るため、この数年米各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでいます。

此度報告致しますくも山遺跡は、農地改良の土木工事に伴って記録保存の発掘調査を実施致しましたものです。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、古墳時代と中世の墓や城郭遺構を検出いたしまして、足守の歴史的意味を考える上で大変貴重な成果を上げております。

発掘調査の成果は発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当者各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の古代史および中世史の研究に寄与できるならば幸に存じます。

平成10年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 戸 村 彰 孝

## 例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が、平成9年5月27日から平成9年8月6日にかけて実施した農地改良の土木工事に伴う岡山市足守1578、1580、1580-1の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆と編集は草原が担当した。
3. 遺物の実測は山元尚子、トレースは木村真紀、写真撮影は草原がおこなった。
4. 報告書の作成にあたって、人骨鑑定は岡山理科大学総合情報学部の川中健二氏と岡山大学文学部のマーク・ハドソン氏にお願いし、玉稿をいただき掲載させていただいた。
5. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
6. この報告書に用いている方位は磁北である。
7. 図1は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「総社東部」を複製し、加筆したものである。
8. 遺物・実測図・写真等は、岡山市教育委員会にて保管している。

## 目 次

第一章 位置と歴史的環境 .....	1
第二章 調査の経過 .....	6
第三章 遺構と遺物 .....	10
第四章 結 語 .....	55
附章1 すくも山遺跡出土人骨 .....	80
附章2 すくも山遺跡出土中世女性人骨 .....	83
図 版 .....	第1～9

## 挿入図目次

図1 すくも山遺跡の位置	1	図45 墓21出土遺物	31
図2 周辺遺跡分布図	2	図46 墓22実測図	31
図3 調査区位置	7	図47 墓23・24実測図	32
図4 すくも山地形測量図	11	図48 墓24出土遺物	32
図5 発掘区域図	12	図49 墓25実測図	32
図6 城郭遺構配置図	13	図50 墓26実測図	32
図7 断面図	13	図51 墓27実測図	32
図8 北側トレンチ土層図	15	図52 墓28実測図	33
図9 南側トレンチ土層図	15	図53 墓28出土遺物(1)	33
図10 石積1実測図	15	図54 墓28出土遺物(2)	33
図11 石積2実測図	16	図55 墓29・30実測図	34
図12 郡3断面図	18	図56 墓31実測図	35
図13 中世墓遺構配置図	19	図57 墓32実測図	35
図14 墓1実測図	20	図58 墓33実測図	35
図15 墓2実測図	21	図59 南側斜面五輪塔	36
図16 墓2-出土遺物	21	図60 北側斜面出土遺物(1)	37
図17 墓3・4実測図	22	図61 北側斜面出土遺物(2)	38
図18 墓3出土遺物	22	図62 南側斜面出土遺物(1)	38
図19 墓4出土遺物(1)	22	図63 南側斜面出土遺物(2)	39
図20 墓4出土遺物(2)	23	図64 南側斜面出土遺物(3)	40
図21 墓5実測図	24	図65 東側斜面出土遺物	40
図22 墓6実測図	24	図66 縮切周辺出土遺物(1)	41
図23 墓6出土遺物(1)	24	図67 縮切周辺出土遺物(2)	42
図24 墓6出土遺物(2)	24	図68 斜面出土鉄製品	45
図25 墓6出土遺物(3)	25	図69 斜面出土銅錢	45
図26 墓7実測図	26	図70 石造物(1)	46
図27 墓8実測図	26	図71 石造物(2)	47
図28 墓9実測図	26	図72 石造物(3)	48
図29 墓10実測図	26	図73 古墳時代 遺構配置図	51
図30 墓10出土遺物	27	図74 箱式石棺墓実測図	53
図31 墓11実測図	27	図75 土壇墓1実測図	53
図32 墓12実測図	27	図76 周辺出土物	54
図33 墓12出土遺物	28	図77 すくも山城周囲の景観	56
図34 墓13実測図	28	図78 「中国兵乱記」による冠山城攻城ルート略図	61
図35 墓14実測図	28	図79 日畠城略測図	62
図36 墓14出土遺物	28	図80 宮路山城略測図	62
図37 墓15実測図	29	図81 中世後半土器・陶磁器分類	65
図38 墓16実測図	29	図82 無高台橈法量分布	67
図39 墓17実測図	29	図83 梶変遷図	68
図40 墓18実測図	30	図84 土壇墓平面・断面比較	69
図41 墓19実測図	30	図85 すくも山中世墓の墓群構成	71
図42 墓20実測図	30	図86 足守莊園縫図(トレース)	75
図43 墓20出土遺物	31	図87 足守庄南半の景観	77
図44 墓21実測図	31		

# 第一章 位置と歴史的環境

すくも山遺跡は、備中南部の平野を南北に貫流する足守川が、山間部から平野部へ流れでた最初の単位平野に位置する。

この辺りは現在岡山市域に含まれているが、明治22年上足守、下足守、上土田の3村が合併して足守村、そして昭和31年大井、日近、岩田、福谷の4村を合併し、さらに昭和46年岡山市へ編入合併されたものである。古くは岡山加茂川津山線のバイパス（現国道429号）の開通にはじまり、最近は新岡山空港や山陽自動車道などの交通網の整備が周囲の開発に拍車を掛け、水田の広がっていた牧歌的景観は急速に変貌しつつある。

すくも山遺跡の位置する足守は、西側を足守川が流れ、東側と北側は吉備高原へと続く山稜部により両されており、足守川流域の平野の一部ではあるが、そのなかの小単位平野ということができる。そのため、遺跡の分布もまとまる傾向があり、歴史的にも小地域を形成していたと考えられる<sup>(1)</sup>。

足守地域で現在確認できる最も古い遺跡は、余町遺跡で、縄文時代後期の土器が採集されている。採集された土器はほとんど摩滅しておらず、付近の河岸段丘上に生活圏が存在していたものと思われる<sup>(2)</sup>。弥生期の遺構は、平野部に位置する足守庄（足守幼稚園）関連遺跡で検出されており<sup>(3)</sup>、平野部の開発はこの時期には確実におこなわれている。ただし、足守川中流以南域のように、平野部に大規模な集落遺跡は形成されておらず、河岸段丘上もしくは扇状地地形上に形成されている。足守川の流路傾斜が急なため、平野部の安定度が中流部より低かったためと思われる。弥生時代の遺跡は、平野部にある鶴兔遺跡などで後期後半の遺構が検出されており、丘陵部では後期前葉の遺物が採集されている上土田門前遺跡<sup>(4)</sup>などが認められる。しかし、当地域における中核的な集落遺跡は扇状地上に位置する南坂遺跡である。南坂遺跡では中期の遺物も採集されており<sup>(5)</sup>、足守地域では中期において撿点集落が形成されていたと考えられる。また、外縁付軒I式の銅鏃の出土も伝わっており<sup>(6)</sup>、弥生時代には一定レベルの地域社会が形成されていたと考えられる。そして、南北約12m、東西約7.8mの長方形を呈する經塙墳丘墓、長さ20m、幅10mの長方形を呈する浦尾5号墳丘墓<sup>(7)</sup>などの特殊器台を伴う墳丘墓が存在しており、後期までその地域社会は維持されている。しかし、古墳時代になると全長20~30mの規模をもつ前方後方墳は存在するものの、その規模以上の古墳は出現していない。ただし、10~20m前後の規模の古墳は多数築かれており、大古墳に集約されるとは別の構造をもった地域社会が形成されていたものと思われる。最近発掘調査をされた長坂古墳群は<sup>(8)</sup>、一辺が10mほどの方墳3基で構成されており、そのなかの1号墳には特殊器台が棺に転用されていた。この特殊器台の一部には立坂型の文様パターンがみられる。古墳築造時期とこの特殊器台とは年代的にかなりへだ



図1 すくも山遺跡の位置



図2 周辺遺跡分布図

たりがあり、古墳時代における足守地域の特殊性を示す事例ではないかと思われる。

後期古墳も数多く存在するが、その大半は三井谷周辺に集中している。前半期の古墳が標高100m前後の平野部に面した丘陵上に築かれているのは対称的で、巨視的にみると墓域が移動したといえる。石室全長が10mを越える規模のものもいくつかあり、内容のわかっている数少ない古墳の1つである冠山古墳からは多くの副葬品が出土している。

三井谷周辺の古墳群は、県南地域の他の大規模な古墳群と比べても遜色のない古墳群を形成しているといえる。しかし三井谷を含めた足守地域には、古代寺院の存在が確認されていない。ただし、足守地域に南接する生石地域を正倉院文書の「備中国大税負死亡人帳」(天平11年)には、賀陽郡のなかに生石郷が記載されていないが、「倭名類聚抄」(高山寺本)には記載されていることから、律令制の施行期には郷として確立しておらず、足守郷の一部であったという考えもある<sup>(1)</sup>。それにしたがうと、生石地域にある大崎廃寺は足守地域の古代寺院ということになる。大崎廃寺は「水切り瓦」といわれる特徴的な形態をした白鳳期の軒丸瓦が用いられている。この軒丸瓦は、備中國、備後国、安芸国、出雲国の氏寺に分布しており、それぞれの寺の建立主体者である在地首長層間の強固なつながりを示している。また、大崎廃寺では、飛鳥期の軒丸瓦が出土しており、吉備地域全体でも最古の部類に入る<sup>(2)</sup>。これらのこととは、足守地域が古墳時代からの政治的な位置を継続して保持しているということを示していると思われる。

足守地域は古代には、備中國賀陽郡足守郷に属し、いわゆる吉備の五国造の1つである加夜氏の本拠地の1つとされる。加夜氏は『日本書紀』では香屋臣、蚊屋、『国造本紀』では加夜、『備中國風土記逸文』には賀夜、『続日本書紀』には賀陽と表記されている。『続日本書紀』の天平神護元年の条で朝臣の姓を受けており、それ以降一族は賀陽臣豊年などに代表されるような中央官人になるものが多く輩出している。そして、三善清行の記した『善家秘記』にでている備前の少目を錢であがなった貨殖の人である賀陽良藤や、その兄で賀陽郡の大領である賀陽豊仲、その弟で統領である賀陽豊蔵、同じく吉備津神社の禪宣である賀陽豊恒らにみられるように、在地の要職を一族で独占していた様子がうかがわれる。

平安時代以降、備中地域はこの賀陽氏の手によって莊園化がなされていったものと思われる。足守も足守庄として立庄されている。京都神護寺所蔵「備中國足守庄絵図」の裏書によると、嘉応元年(1169)十二月に荘の案主散位賀陽氏・下司散位藤原氏・国使の田所橘氏・案主散位弓削氏・院の御使左辨官史生紀氏が立会の上で四至を確定し、絵図を作成していることから、この時に後白河院に寄進され足守庄が立庄されたのであろう。その後神護寺を復興した僧文賞の訴申により、寿永三年(1184)には、散位安倍資良の足守庄での私得分が神護寺護摩堂に寄進され、それを契機に後白河院が足守庄一円を神護寺に寄進し、神護寺領足守庄は成立した。

「備中國足守庄絵図」は莊園内の景観を的確に描いており、現在の地形とも対比ができる。このなかにはすぐも山も描かれており、莊園内の景観を構成する重要な事物の1つとなっている。現在の足守には、絵図当時の景観が良好に保存されており、足守は全国的にみても有数の莊園遺跡であるといえる。足守庄における発掘調査は、まず1976年から1979年度にかけて庄城南半にある延寿寺に対してと、勝示の可能性の高い遺構に対しておこなわれた<sup>(3)</sup>。その後1992年度には岡山市立足守幼稚園の園舎建築事業に伴い条里水田内を発掘調査し、庄城内の条里水田の成立過程を明らかにした<sup>(4)</sup>。いずれの発掘調査でも足守庄の莊園遺跡としての重要性が認識できる成果を上げている。

戦国時代になると足守付近は、東の織田氏と結んだ宇喜多氏と、西の毛利氏との勢力圏の接点、いわ

ゆる「境目」地域となる。備中地域は、戦国大名の出現はみられない。備中国の守護大名であった細川勝久は、延徳三年（1491）から翌明応元年にかけておこった守護代莊元資による反乱以降、勢力は急速に衰える。そして、それにかわって備中の国人領主である石川氏、三村氏、新見氏、多治部氏、庄氏などの勢力が台頭してくる。そのうち備中松山城を掌中におさめた莊元資の子である為資が、備中最大の国人領主となる。しかし、その後山陰の尼子氏や、西の毛利氏の進出により在地勢力が求心的に成長することはなく、在地国人領主層と外的な大名勢力とが交互に結びついた複雑な様相を呈するようになる。そして、最終的には毛利氏と織田氏の大名勢力間の直接衝突の場となる。

足守が戦場となった最も著名な戦いは「冠山城の戦い」である。「冠山城の戦い」は、天正十年（1582）の「高松城の戦い」直前の戦いのことをさすが、『中国兵乱記』によると天正八年（1580）にも宇喜多直家が冠山城を攻めている。しかし、この戦いは『備前軍記』や『陰徳太平記』などにはみられない。天正十年の「冠山城の戦い」とは、毛利方の境目の城の1つである冠山城の攻防戦のことで、軍記物語によって内容に多少の違いがあるが、複数の在地領主が冠山城に立て籠ったが、宇喜多勢を主力とした織田方によって落城したというものである。「冠山城の戦い」に関する記録を記した書簡の1つである児島郡の年寄中に宛てた羽柴秀吉の書簡（第III章参照）には、冠山城のかわりに「すくも塚の城」という城名が記されている。従来、この「すくも塚の城」は冠山城の別名とされてきたが<sup>(10)</sup>、足守のなかで「すくも」の地名が存在するのはすくも山だけであり、再検討する余地がある。

足守で確認できる城郭は、北から宮地山城、鍛冶山城、冠山城で、ほかに清水城や生石城が文献にはでているが所在地は不明である。また、東側の丘陵上の稜線には土壘が残存しており、部分的に砦状の形態に囲っている箇所がある。年代的な根拠はないが「高松城の戦い」前後の戦いに用いられた織田方の陣城ではないかと推定される。宮地山城は、標高160.5mの丘陵上にある連郭式の山城で、足守川西岸の足守地域の中心的な城郭といえる。鍛冶山城は、標高170mの丘陵上にある連郭式の山城で、20を越える数の郭や堀切りをもち、本丸周辺には石垣が認められる。宮地山城と対峙する位置にこれから、当初は足守川東岸の足守の中心的な城郭であったと思われるが、石垣を用いた近世的な城郭構造であることから、「高松城の戦い」以降は足守全体の中心的な城郭として機能していたことが推定される。冠山城は標高45mの小丘陵を利用して構築されている。頂部から3段に造成された郭が認められるが、それ以下の郭については開墾等により明瞭でない。北と西斜面には堅堀が9条認められる。

近世になると足守は足守藩となる。足守藩は、豊臣秀吉の正室高台院（北政所）の兄であり、秀吉の側近であった木下家定が姫路城主2万5千石から、備中國賀陽、上房両郡のうち同じく2万5千石に移封された慶長6年（1601）に立藩された。同年に家定の実子である小早川秀秋が備前・美作51万石で岡山城に入城している。備中から備前へ向かうルートには大別して3つのルートがある。1つは瀬戸内海から児島を経て旭川を北上するルートである。2つめは山陽道。3つめは足守から御津町の金川を経て旭川を南流するルートである。1つめのルート上では「八浜合戦」（天正8年）、2つめのルート上では「辛川合戦」（天正7年）、3つめのルート上では「忍山城の戦い」（天正6年）および「冠山城の戦い」などの毛利対宇喜多の主要な合戦がおこなわれている。木下家定の足守移封も小早川秀秋の岡山城入城と連動したものであり、岡山の北の防衛拠点としての位置づけが足守にはなされていたものと推測される。足守藩は、家定の長男の勝俊の代で所領を没収されるものの、家定の次男である利房が元和元年（1615）に、2万2千石を受封して足守藩を再興し、その後明治まで木下氏は足守藩主として続いている。

ところで、すくも山の「すくも」の漢字であるが、「糖」と「稼」の字が現在残っている。「糖」は、すくも山の南側にある「糖塚橋」にあり、「稼」はすくも山の小字名として「稼塚」あるいは「稼塚山」としてある。江戸時代末ごろの地誌である『備中誌』では「宿面塚」となっている。すくも山のことを探していると思われる羽柴秀吉の書簡（第三章参照）では、平仮名で表記されている。地元でもすくも山の漢字については明確なものは知られておらず、おそらく漢字の「すくも」は当て字であると考えられる。

すくも山の「すくも」とは初穀のこと、これは全国的に分布する地名であり、長者伝説と結び付く可能性が古くから指摘されている<sup>(14)</sup>。長者伝説とは平安時代ごろに発生したもので、『今昔物語』などにその例がみられる。一代で多くの田地を獲得した長者は、開発領主としての側面が強い。足守の平野部における水田は、用水の水利系統からすると、北半と南半の2つに分けられる。北半は大井との境付近で足守川から取水された植川用水の灌漑域で、南半は上土田用水の灌漑域である。上土田用水はすくも山の北側で足守川から取水される。足守南半の水田開発は、上土田用水の開削と不可分の関係にあるといえる。このことから、上土田用水の開削による水田開発と、すくも山の地名とがただちに結び付くとはいえないが、かつて足守にも開発領主に関する長者伝説が存在した可能性はあるように思われる。『備中誌』では、足守を本拠地とした賀殖の人である賀陽良藤の屋敷地跡というものが記されており、これも長者伝説の断片である可能性が推測される。

#### 注

- (1) 出宮徳尚『吉備地方の前半期古墳の地域的形成と展開』『古文化談叢』第7集 1980年
  - (2) 小郷利幸ほか『足守地域の地域史研究』『古代吉備』第12集 1990年
  - (3) 草原孝典『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994年
  - (4) 間壁忠彦『岡山市上土田採集の弥生式土器』『倉敷考古館研究集報』第8集 1973年
  - (5) 小野雅明ほか『足守地域の地域史研究（2）』『古代吉備』第16集 1994年
- 南坂遺跡の発掘調査は、1984年に岡山市教育委員会でおこなっている。
- (6) 春成秀爾『九州の銅鐸』『考古学雑誌』76-2 1990年
  - (7) 近藤義郎『弥生墳丘墓の実態』『岡山県史』原始・古代1 1991年
  - (8) 草原孝典『長坂古墳群』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平成7）年度 1996年
  - (9) 永山卯三郎『吉備郡誌』 吉備郡教育会 1937年
  - (10) 岡本寛久『木切り瓦』の起源と伝播の意義』『吉備の考古学的研究』（下） 山陽新聞社 1992年
  - (11) 出宮徳尚・根木修『足守庄莊園遺構緊急調査・延寿寺跡第2次発掘調査概報』岡山市教育委員会 1979年  
出宮徳尚・神谷正義『足守庄莊園遺構緊急調査・榜示比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会 1980年
  - (12) 注2
  - (13) 注9
  - (14) 柳田國男『増補 山島民譜集』平凡社 1969年

## 第二章 調査の経過

足守川中流左岸の岡山市足守・下足守・上土田地区は、地形が嘉応元年（1169）に製作されて現存する「備中國足守庄図」の描写に著しく即応しており、古代の地形と水田形状を今日まで良好に伝える地区として注目されていた。この地区に、足守川右岸堤防上を道路敷としていた県道岡山加茂川津山線のバイパスが平野部分を縱断する状態で建設され、歴史的景観がスプロール現象的に破壊されるようになつた。このバイパス（現国道429号線）は、昭和44年頃に岡山県土木部が立案し、昭和45年頃から着工されだしたもので、建設計画に際して歴史的景観や文化財保護に対する行政的考慮がほとんど図られることなく路線決定と施工に至っている。この時期はまだ岡山市に合併以前の旧足守町の時代で、当時の町教育委員会の文化財担当職員の話では、県の路線決定に際して足守庄図に指標的に描かれている八幡山、冠山、すくも山の三丘陵の保存を要請するのが精一杯であったとのことであり、庄図に中心的に描かれている「延寿寺跡」対応地については路線が縱断し、しかも事前の発掘調査すら図られることなく施工されてしまっている。

庄図の南に描かれているすくも山の東側をバイパスが通過したことにより、すくも山—庄図対応地であるとともに1582年（天正10）の中国の役（所謂備中高松城水攻めの戦役）の出城である遺跡地へは格好の開発対象地となった。昭和50年に全線開通してからはすくも山の宅地造成の話題が浮き沈みをしだし、岡山市教育委員会文化課（昭和46年に岡山市が足守町を合併）にも非公式な照会が入って来るようになった。今日の発掘調査の実施に至るまでの約15年間に数度も開発の話が持ち込まれ、現地立会のうえ保存の要望をすることもあったが、所有者が転々としたこともあって結果として開発計画が消滅するに至っていた。

平成7年に至って、現在の所有者の秋山江美子氏（総社市在中）からは市教育委員会文化課にすくも山の開発に対する相談が持込まれた。秋山氏にとってすくも山が家業可動可能な唯一の土地であり農地に再開発したいとのことであり、文化課ではすくも山の遺跡としての重要性から現状保存を要請したいが、個人としての家業を断念する結果となる現状保存を強く要請できる状況なく、同氏と保存についての協議を重ねた結果、庄図に描かれているすくも山の山自体の存在が認識できる形状での農地開発に止めることで合意に達した。このため、文化課は農地開発に先立ってすくも山遺跡の発掘調査を実施する方針を立てたが、同氏に原因者負担による発掘調査費を負担できる状況にないことから国庫補助事業として対応することとし、平成9年度に補助金を得て発掘調査を実施するに至った。

総経費は6,375,000円で、そのうち国庫補助が6,000,000円、市費が375,000円である。発掘調査の着手に伴い平成9年5月27日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯のもとにすくも山遺跡の発掘調査は平成9年5月27日から同年8月6日にかけて実施された。調査期間中は、多くの見学者があり、まとまった現地説明会は実施できなかつたが、その都度遺跡の説明をおこなつた。

## 発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長

発掘調査対策委員  
 稲田孝司（岡山大学教授）  
 狩野 久（岡山大学教授）  
 西川 宏（山陽学園教諭）  
 間壁忠彦（倉敷考古館館長）  
 水内昌康（岡山市文化財保護審議会委員長）（五十音順）

発掘調査担当者  
 富岡博司（岡山市教育委員会文化課長）  
 出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課専門監）  
 根木 修（岡山市教育委員会文化課長補佐）  
 神谷正義（岡山市教育委員会文化課文化財保護主査）  
 乗岡 実（岡山市教育委員会文化課文化財保護主任）  
 （調査員） 草原孝典（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）  
 （経理） 羅久井和恵（岡山市教育委員会文化課主事）

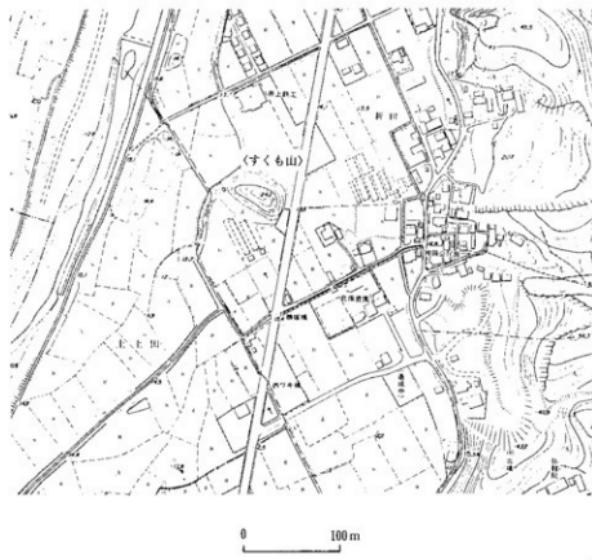


図3 調査区位置

発掘現場作業員 青木敏夫  
 佐々木龍彦  
 中山政太郎  
 難波象一  
 蜂谷由太郎  
 横田順一  
 藩本元典  
 赤木悦子  
 安藤一江  
 岩佐ます

発掘現場補助員 木村真紀

発掘現場事務員 戸田三枝子  
 山元尚子

出土物整理事務員 山元尚子  
 矢部桃子

調査にあたり、文化庁の岸本直文氏には現地視察のうえ、多大なご指導・ご助言をいただいた。また、加原耕作、千田嘉博、鈴木景二、鈴木茂之、的場勇の諸氏には、諸々のご教示・ご助言を頂いた。さらに、報告書の作成にあたって、遺物の接合については高安真智子氏の、本製品の実測は藤井裕之氏の協力を得た。

諸々にご助勢下さった方々に深謝する次第である。

### 経過と概要

調査地は国道429号に接しており、東西の長さ約67m、南北の長さ約48mの小規模な独立丘陵である。果樹園に開墾された際の段造成により、山周囲はかなり削平を受けている。ただし、山頂付近には果樹園よりも古い段が残っており備前焼の破片や石造物（五輪塔）の部品が認められていることから遺構が比較的良好に残存していると思われ、山頂付近から調査をおこなった。

遺構は、城郭、中世墓、古墳の3時期確認された。

城郭は、3つの小規模な郭と堀切で構成されている。城郭の時期を示す遺物はほとんどないものの、規模的にも長い間使用された城郭とは思われず、北にある冠山城の出城のような、いわば砦的な城郭であったと考えられる。

中世墓は、33基が検出された。土壙墓、骨蔵器、土器棺などの埋葬形式があり、14世紀から16世紀にかけてつくられた共同墓地である。斜面部から多くの備前焼片や土師器片などが出土しており、城郭や果樹園により削平を受ける以前は、より多くの墓が存在していたと思われる。

古墳時代の墓は2基あり、箱式石棺と土壙墓である。副葬品は残存していないが、付近から鉄劍

などの鉄製品が出土している。

#### 発掘日誌（抄）

- 平成9年5月27日 発掘器材の搬入、草刈り、基準クイ設定  
28日 発掘開始、表土層掘り下げ  
30日 北側の石積を検出  
6月3日 土壌墓検出、掘り下げ、写真撮影・実測  
10日 南側の石積を検出、郭2を精査  
12日 東側の堀切を検出、一部掘り下げる  
16日 郭2南側の中世墓群を検出、掘り下げる  
19日 郭2南側の中世墓群の写真撮影・実測  
27日 北側と南側の石積の写真撮影・実測  
7月1日 西側の表土層掘り下げ  
14日 南側と北側斜面にトレンチ設定、掘り下げる  
18日 発掘調査対策委員会を開催  
24日 文化庁より岸本直文氏が現地指導にこられる  
29日 東側斜面表土層掘り下げ  
30日 東側斜面部より中世墓を検出、掘り下げる  
8月1日 東側斜面部の中世墓の写真撮影・実測  
4日 空撮をおこなう  
6日 発掘器材撤去、発掘調査終了

### 第三章 遺構と遺物

#### I 地形(図4・5)

発掘調査と平行して、すくも山の地形測量をおこなった。測量は、トラバース測量でおこない、基本的に、50cm間隔の等高線で、頂部付近は、25cm間隔とした。発掘調査をおこなう以前は、雜木と竹林に覆われていた。

すくも山は、東西方向の長さが約67m、南北方向の長さが約48mの台形気味の形状である。周囲の水田からの比高差は、約12mである。現在は工場用地や資材置き場となっている部分も旧来は水田であり、水田の中に突然盛り上がった小丘陵といった景観であった。現況のすくも山の地形は、三段に開墾されており、最下段は南側の広いところで幅8mあり、背後斜面には高さ約2.5mの石垣が積まれている。中段は幅約3mであるが、北側の斜面が急なためか、この段は南側にしかめぐっていない。これらの段は、昭和22、3年頃に、すくも山を果樹園にするためにつくられたもので、とくに下段については、最近まで畑として利用されていた。上段についても、ぶどう畑のコンクリート支柱の基部が4本たっており、果樹園として利用されていたものと思われる。ただ、上段の頂部には、幅11m、長さ10mの方形の平坦面があり、それより東側には比高差が約0.75mの緩やかな傾斜の段差に続いて、幅14m、長さ10mの舌状の平坦面があり、さらにその東側には約1mの段差に続いて幅8m、長さ4mのやや台形気味の平坦面が認められる。これらの段は、果樹園の段とは明らかに異なっており、果樹園造成以前の段であると思われた。江戸時代末の備中地域の地誌である『備中誌』によると、すくも山(『備中誌』では宿面塚となっている)の頂部には段があり、それは天正10年(1582)におこなわれた「冠山城の戦い」の際に使われた陣の跡であるとしている。果樹園造成以前にすくも山が開墾されて畑に利用されていた可能性はあるものの、上段で認められる段は畑としては不自然な形状であり、『備中誌』が示す段である可能性も高いと思われる。

上段の西側については、不整形の掘削痕が認められる。これは、果樹園造成時前後頃に乱掘した跡である。この乱掘は、上段頂部を南と北の方向から掘っており、深いところでは地表から約1.5mの深さまで掘削しており、西側頂部の旧地形はかなり改変されている。本来、頂部平坦面は、この乱掘部分へものびていたものと思われ、頂部平坦面は、長さ10m以上の規模はあったと考えられる。乱掘部の断面には岩盤が露出しており、すくも山西半は岩盤で構成されているようである。東半は段斜面部を観察する限り、花崗岩バイラン土で構成されているようだが、部分的には岩盤も認められる。

西側の乱掘部では、表面観察では遺物を採集することはできなかったが、頂部平坦面には組合式五輪塔の火輪や水輪の部分が1ヶ所に集められており、南側の斜面部では、備前焼の破片と土師器の破片が採集できた。土師器の破片は壺の胴部で、古墳時代に属するものと思われた。遺物は頂部付近だけで、中段、下段の周囲では採集することができず、果樹園の造成により掘削された段斜面も精査したが遺構らしきものは認められなかった。中、下段についても本来は遺構遺物が存在していたかもしれないが、開墾により削平されたものと思われる。

したがってすくも山上には、城郭に関する可能性のある段と、中世の墓、古墳などが埋没している可能性が推測された。そこで、発掘調査は、上段の全てと、部分的にトレントを入れ、上段以下の状況も確認することとした。

図4 すくも山地形測量図





図5 発掘区域図

## II 城郭(図6・7)

羽柴秀吉が天正10年(1582)五月三日付けで児島郡、郡村年寄中に対して送った書状の中に「すくも塚の城」が記載されている。この「すくも塚の城」については、すくも山の北約1kmのところにある冠山城の別名とされてきた。しかし、足守地区のなかで、「すくも」の地名があるのは、現すくも山だけであることや、小規模ではあるがすくも山頂部に果樹園造成とは別の段状に整形された部分が認められることから、城郭遺構が埋没している可能性が想定された。発掘調査の結果、頂部から東側にかけて、3面の郭が明らかとなった。頂部の最高所に位置するものを郭1、以下郭2、郭3とした。郭3の周囲や、それ以下の部分については、果樹園造成の際の削平が著しく、これら以外に郭が存在したかどうかはよくわからない。そのため、すくも山の北側と南側斜面部にトレンチを設定した。

北側トレンチによると(図8)、すくも山自体の傾斜が急であり、基盤は岩盤となっている。すくも山の北側は南側と異なり、果樹園の段造成が明確でない。日あたりも関係したことだと思われるが、本来の地形の傾斜が急であったため、果樹園として積極的な地形の変化はおこなわなかつたのだと思われる。したがってすくも山の北側斜面部の形状は、本来の地形に近いと考えられ、しかも表土層も厚くないことから、郭などは形成されていなかったと考えられる。

南側トレンチは(図9)、果樹園の造成による段を立ち割る位置に設定した。果樹園の中段は、郭3の西側からはじまり、すくも山の西側までついている。郭3の西側をみると、19.75mの高さぐらいからかなり急角度に削平しており、下段が地山整形であることから、中段以下は、旧地形を全く残していないことが予想された。南側トレンチの土層観察では、4層認められたが、最下層からは、現代の陶磁器片や針金が出土しており、果樹園造成時の造成土と判断された。したがって、すくも山の南側斜面部は、旧状を残していないと考えられる。郭の有無については不明だが、郭3西側の地形や、郭1南側の傾斜から考えて、犬走り状の郭は存在したかもしれないが、大きな郭は存在しなかつた可能性が高い。

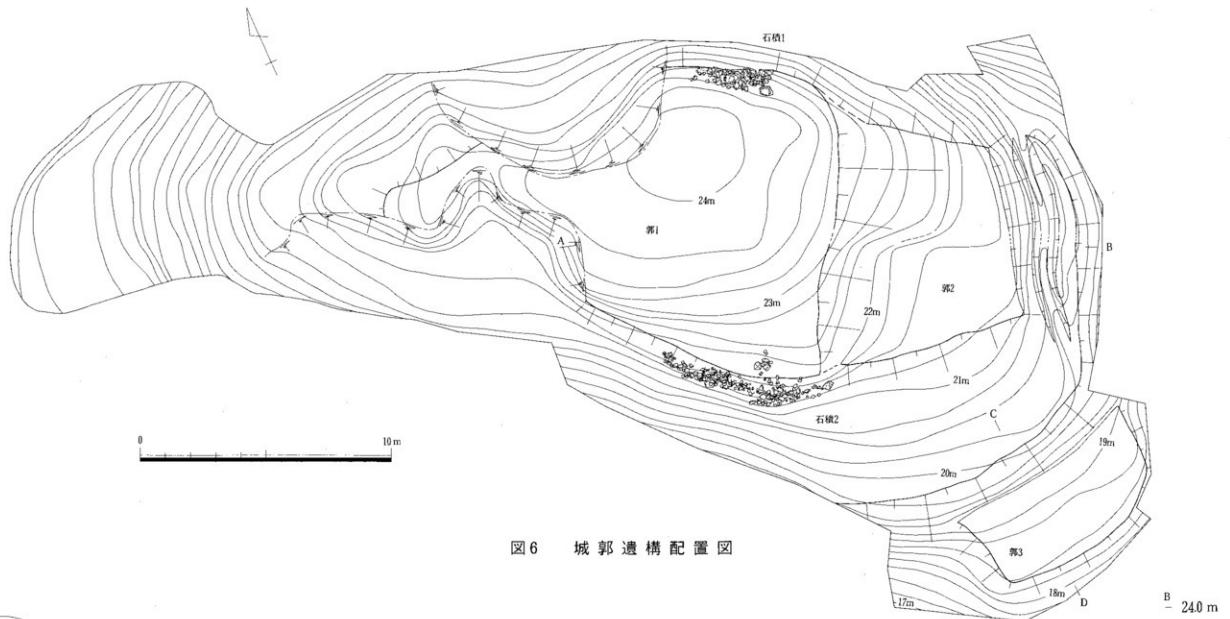


図6 城郭遺構配置図

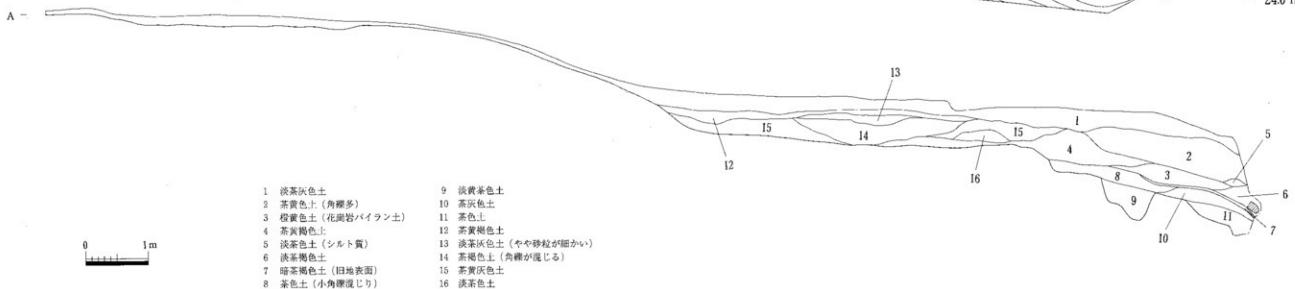
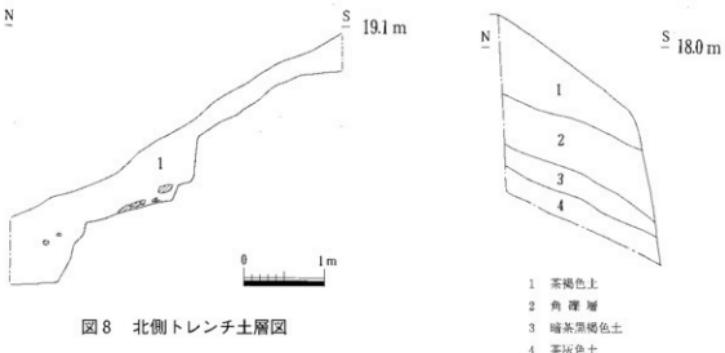


図7 断面図



### (1) 郭1(図6)

郭1は、すくも山頂部を平坦に整形したもので、現状では地山を削り出して形成されている。南北幅は12m、東西幅は18mで、西側は後の乱掘により、大半が損なわれているが、残存部から西へとがる三角形をした平面形が復元される。検出した郭のなかで最も広いといえ、面積は108m<sup>2</sup>ほどである。建物等の遺構は検出されなかったが、北側（石積1）と南側（石積2）の側面に石積が検出された。開墾による削平などの影響のため、それぞれ一部しか残っていなかった。



図9 南側トレンチ土層図

### 石積1(図10)

石積1は、郭1の北側で検出されたものである。すくも山上の転石を用いており、30~40cm大の長方形の角砾を横方向に並べて積んでおり、2段目まで遺存している。石垣状に積んだ石と地山面との間に

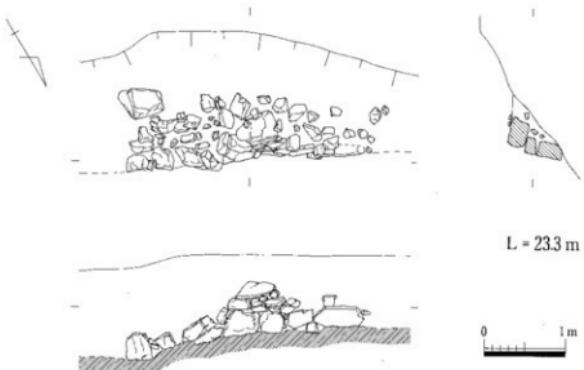


図10 石積1実測図

は、角礫を入れている。石垣状の積み石がずり落ちたと考えられる石が、石積1の東側の斜面部でみつかっており、本来はより東側へ続いているものと考えられる。

遺物は、中世の土器が出土したが、それらは中世墓に伴うものと思われるものばかりである。石積1の西側は、乱掘により削平されていることから、少なくともこの石積は、果樹園造成時以前のものということができ、上限は中世ということになる。現況の郭1は、頂部最高所から緩やかに傾斜しており、石積の存在する地点は急傾斜に変わる傾斜変換点にある。現況の郭1を平坦にしようとするならば、石積1の位置に土止めを設定し、土盛りをおこなわなければならない。郭1の東側にある郭2は、深いところで現地表面から60cmも埋没しており、郭2を埋めた土砂は本来郭1の造成土であった可能性も高いと思われる。厳密には、時期は決められないものの、この石積1は郭1に伴う可能性があると考えておきたい。

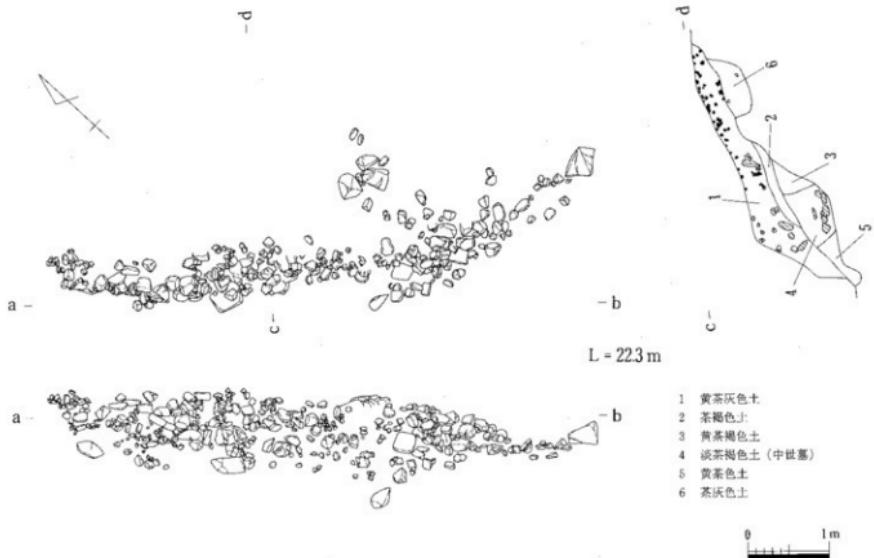


図11 石積2実測図

### 石積2（図11）

郭1の南側斜面部で検出されたものである。石積1とは異なり、不整形な角礫が斜面に貼り付くような状態で並んでいる。なかには、組合式五輪塔の空風輪が含まれているが、角礫の石材は、周辺の転石である。傾斜面を保護するための捨石状造構とも考えられるが、本来の地山傾斜よりも石積の傾斜の方が急であることから、石積1のように、前面に石垣上の積み石があったことが推測される。そして、石垣状の石垣は、石を抜かれたか、もしくはすり落ちて背後の石だけが残ったのだと思われる。石材の形が不整形であるのも、石積1の石垣状の石積の内側の角礫と共通する。

遺物は、中世墓に伴うと思われる土器しか出土しておらず、時期を決めるには難しいが、石積1と同様に郭1に伴う土止め状の石積である可能性が推測される。

### (2) 郭2(図6)

郭1の東側に設けられたもので、東西5.5m、南北7.5mであるが、北側の平坦面は狭く、幅1.5mほどである。平坦面は逆L字形をしている。北側の平坦面が狭くなっていることは、郭1からの通路とする見方もあるが、このような小規模な城郭にそのような施設が必要とは思われない。広い平坦面を形成している部分の基盤土は、花崗岩バイラン土で、比較的加工しやすいが、狭い部分は貫入した岩盤で構成されており、掘削がやや困難である。郭2がこのような不整形な平坦面になったのは、基盤のちがいに起因している可能性が高いように思われる。もちろん、少し手間をかけなければ岩盤部分も掘削することは可能で、かなり急造的に郭をつくったことを反映しているように思われる。

郭1との比高差は約1mで、面積は22m<sup>2</sup>である。建物等の遺構は検出されなかったが、郭の東端には堀切が検出された。

### 堀切(図6・7)

郭2の東側端部を画す位置に掘られている。堀切西岸は郭2の東端であるが、東側については、埋土との関係から、地山面よりも20cmほど上になる(図7)。堀切東側に堆積している10層と11層は堀切を掘る以前の堆積で、堀切はその上から掘っているということになる。そうすると、堀切の幅は2.3m、深さは郭2の平坦面から1.4mである。堀切東側は、かなり急傾斜の地形になっており、このくらいの規模の堀切でもある程度の防御機能を期待することができたと思われる。堀切の埋土は2層で、この中に火葬骨が入ったままの備前焼骨蔵器や鉄釘が含まれていた。それらは、ほとんど城郭以前にすぐも山上につくられていた中世墓に属するもので、郭1を削って郭2を埋めるような開墾をおこなった際に入ったものと思われる。これら以外に遺物はないため開墾の時期は明らかでないが、郭1から郭2にかけて、ぶどう畑のコンクリート支柱がならんでいることから、果樹園造成時である可能性もある。この堀切を平面的にみると、郭2で岩盤が貫入しているために掘削が不十分となった部分も掘り切っていることになる。しかし、堀切の掘られた部分は第三紀末におこった安山岩の貫入している部分と一致している。この安山岩はかなり風化がすんでおり、岩盤部分や、花崗岩バイラン土よりも掘りやすい状態であった。おそらく、この部分は堀切を掘る以前からくほみ状になっていたと思われ、この堀切はその部分を利用したのである。郭2の造成のありようといい、このような小規模な堀切でも地形を利用していることといい、かなり急いでおこなうことを目指した構築であったことがうかがわれる。

### (3) 郭3(図12)

郭2の南側に設けられたもので、長さ7.5m、幅3.5mの長方形の平面形を呈している。基本的には、地山を削り出して平坦面を整形しているが、平坦面上が若干傾斜しており、本来は南側を造成土などで盛り上げていた可能性がある。

郭2から南へ5mほどまでは緩やかな傾斜となっているが、そこから郭3への傾斜は急になる。この傾斜は、郭3の西側で果樹園造成の際の段と判別がつかなくなるが、郭3との関係から城郭構築の際に削り出された傾斜と推測される。

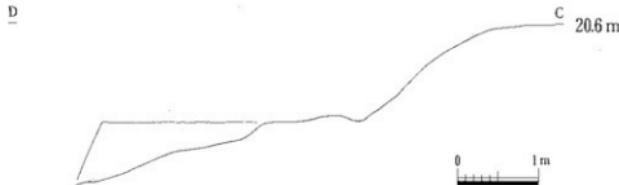


図12 郭3断面図

郭3の面積は $27\text{m}^2$ ほどである。

### III 中世墓

城郭により削平されていない斜面部から中世墓が検出された。南側斜面部の方が数は多いが、北側斜面部からも骨蔵器と思われる備前焼片や土師器片が多数出土しており、北側にもある程度の数の中世墓が存在していたことが推測される。西側については、乱堀が著しく、そのため明確な中世墓は残存していないなかつたが、円窓が認められる箇所や、人骨片が分布している部分や、火葬骨が入った土師器が出土した地点があることから、この地点にも中世墓が存在したものと思われる。

中世墓は、土壙墓、骨蔵器、土器棺などがあるが、火葬骨だけが分布する地点もあり、腐朽しやすい骨蔵器や散骨のような埋葬形態もあったものと思われる。このほか、組合式五輪塔や宝篋印塔が出土している。いざれも15世紀ぐらいのもので、大半が中世墓の上にたっていたものと思われる。1点だけであるが、五輪塔の基部が造立当初のままで埋没していたものがあった。

これら中世墓の時期幅については、骨蔵器やわずかに出土した副葬品の土師器から、14世紀前半を上限とし、16世紀後半には造墓活動は終焉、もしくは縮小していたものと考えられる。副葬品や埋葬形態に特に突出したものは認められず、一般的な村の共同墓地と考えてよいと思われる。

斜面から出土した遺物については、北側斜面、東側斜面、南側斜面に大別して取り上げた。北側斜面出土の土器とは、墓1、墓2、墓11、墓31周辺のすぐも山北側につくられた墓群に属し、東側斜面とは、墓21～30周辺で出土した土器で、南側斜面出土の土器は、東側斜面部をのぞく南側斜面の墓群に属すると思われる土器と一応考えられる。南側斜面から出土した土器が最も多いが、出土した土器の組み合わせにはほとんど差がなく、石造物もそれぞれの斜面部から出土している。

#### 墓1（図14）

墓1は北側の傾斜変換地点で検出した土壙墓である。

基盤が岩盤であるため、岩盤を割り貫いてつくられている。長径約0.9m、短径約0.6mの小判形をした平面形を呈する。断面形は台形で、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は1層で、底部付近から人骨が出土した。副葬品等は認められない。

#### 墓2（図15・16）

すくも山頂部最高所で検出した骨蔵器である。A、B 2つの骨蔵器がならんでいるが、AはBの埋納

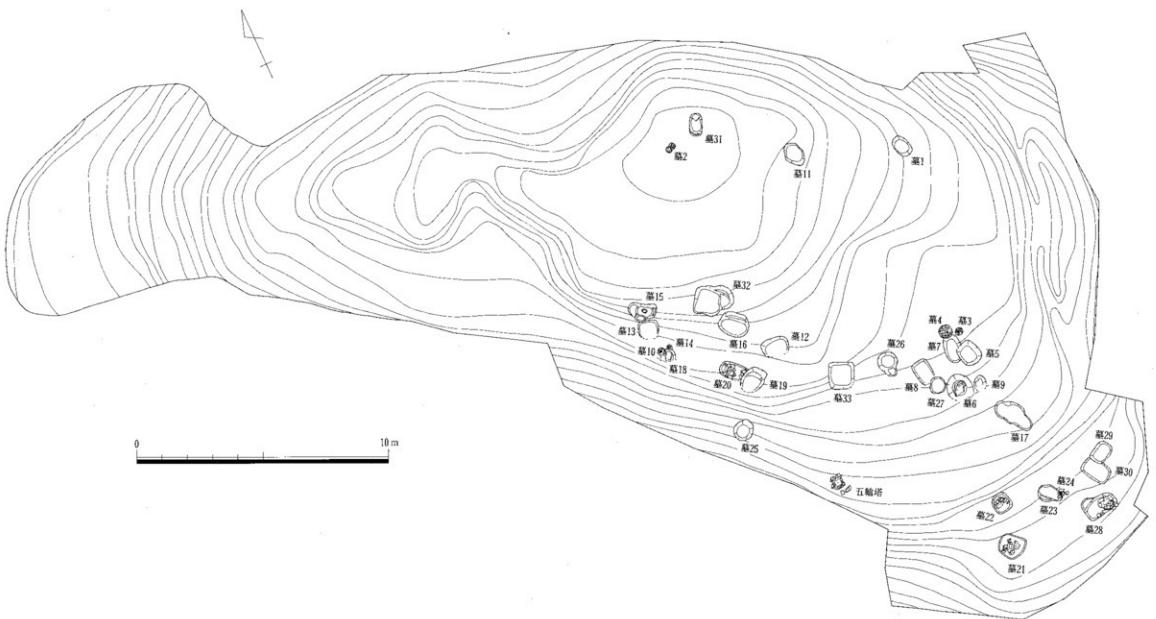


図13 中世墓遺構配置図

により一部破損しており、両骨蔵器の埋納には時期差があるようである。両骨蔵器とも径約0.2mほどの掘り方に備前焼の壺を埋納しており、壺内には火葬骨が残存していた。

骨蔵器Aは、備前焼の壺で、上半部は残存していないかった。底径15.1cmで、内外面ともナデ調整をおこなっている。色調は光沢のない茶褐色で部分的に灰色のところがある。径0.2cmほどの砂粒が比較的多く認められる。

骨蔵器Bは、口縁部の一部を欠損している以外

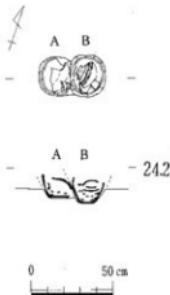


図15 墓2 実測図

は完形である。口径13.4cm、底径14.4cm、器高24cm、胴部最大径21.2cmである。外面はタテ方向のハケメの後ヨコナデをおこない、内面はヨコナデである。肩部に3条を単位とする拂目文を2条めぐらしている。色調は光沢のある茶褐色である。砂粒はあまり認められない。

### 墓3(図17・18)

すくも山南東部で検出した骨蔵器で、城郭の郭によって上面を削平されているため下部しか残存していなかった。径約0.3mの円形の掘り方に、土師質の羽釜形土器が埋納されている。

骨蔵器である土師質の羽釜形土器は、上半部を欠損しているが、下半部はほぼ完形である。外面はタテハケの後、底部付近は不整方向のハケ、内

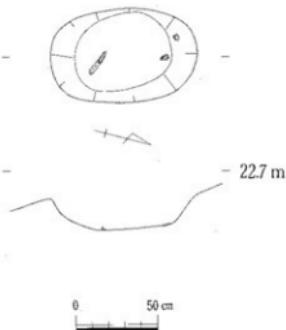


図14 墓1 実測図

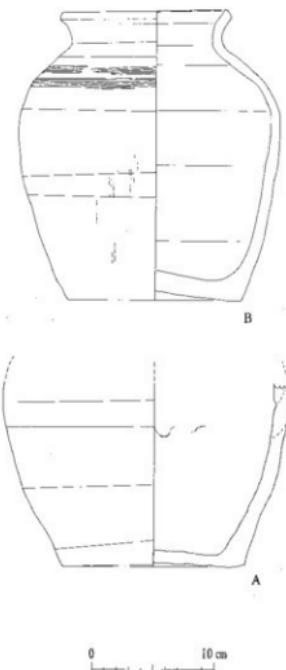


図16 墓2-出土遺物

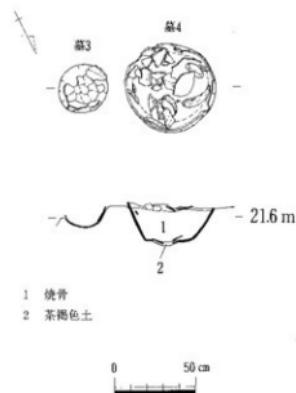


図17 墓3・4 実測図

面はヨコ方向のハケである。色調は淡橙灰色で、外面下半にはススが付着している。胎土には微細な砂粒が含まれている。

## 墓4（図17・19・20）

墓3の西側で検出された骨蔵器で、墓3とならんだような位置関係にある。また、土壙墓である墓7の北端部を削平しており、墓7よりも後につくられたことがわかる。径約0.51mの円形の平面形で、検出面から約0.2mの台形の断面形である掘り方に骨蔵器を埋納している。骨蔵器を置く前に「元豊通宝」を一枚掘り方中央部に入れていた。副葬品と思われるものはこれ以外なく、骨蔵器の内部には、人骨が残存していた。人骨は、頭骨の数から少なくとも3体分は入っていたようである（附章1参照）。

骨蔵器は焼前焼の甕で、胴部中ほどは欠損しているが、これは城郭造成時に削平されたためで、口縁部付近が内部に落ち込んで検出されたことから、本来は完形であったと思われる。この甕は、口縁部を外反させ、先端を玉縁に作っており、灰色の須恵質の焼き上がりである。口縁部径57cm、底径28cmである。外面下半は、底部付近をヨコ方向のケズリの後タテ方向のケズリ、上半はハケの後ナメ方向のケズリが部分的に認められる。内面下半はヨコ方向のハケ、上半は胴部付近ナメ方向の板状工具によるナデで、頸部付近はヨコ方向になる。口縁部内面はナデ。

## 墓5（図21）

すぐも山南東部で検出された土壙墓で、隣接する墓7を一部削平している。長さ約1m、幅約0.8mの長方形をした平面形を呈する。埋土は1層で、北端部には頭骨と腕の一部が遺存していた。また、底部付近には、角礫が3点認められたが、副葬品は検出されなかった。埋土からも遺物は出土しなかった。

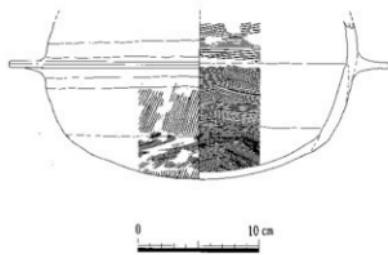


図18 墓3 出土遺物



図19 墓4 出土遺物(1)

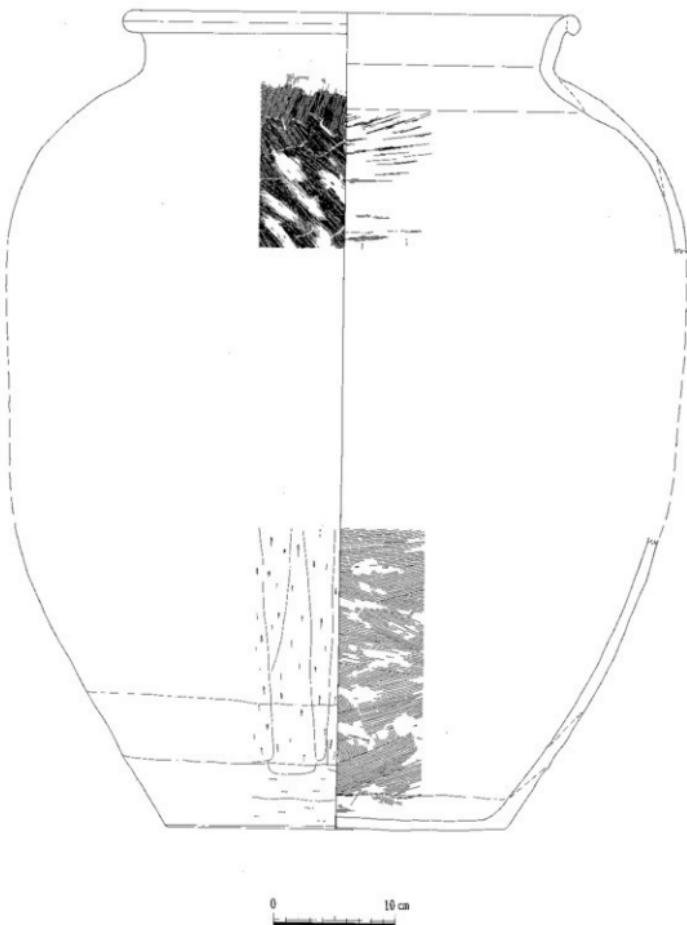


図20 墓4 出土遺物(2)

## 墓6（図22・23・24・25）

すくも山南東部付近で検出した土器棺墓である。径約1mの円形の平面形で、断面形は台形の掘り方に、備前焼の大甕をすえている。長さ約0.4mの方形の角礫で蓋をしている。角礫の上面は、ほぼ水平にしており、石造物の墓壇にもなり得そうである。大甕の中には成人女性一体分の人骨が残っており（附章2参照）、手足を折り曲げた座葬の形態で埋葬されていた。頭骨東側には折敷と推定される木片が出土しているが、この墓から出土した副葬品はこれと土師質土器の小皿の破片が1点だけである。

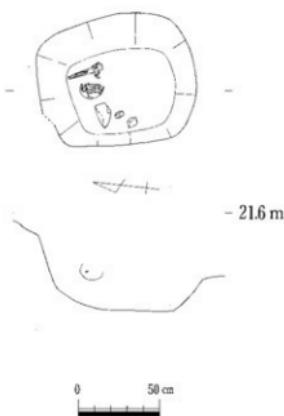
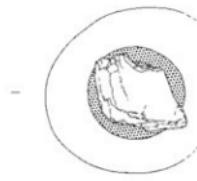


図21 墓5 実測図



— 215 m —



図23 墓6 出土遺物(1)



— 215 m —  
図22 墓6 実測図

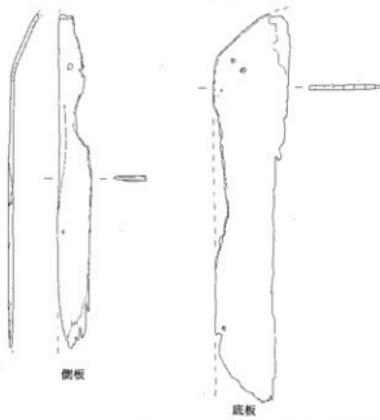


図24 墓6 出土遺物(2)

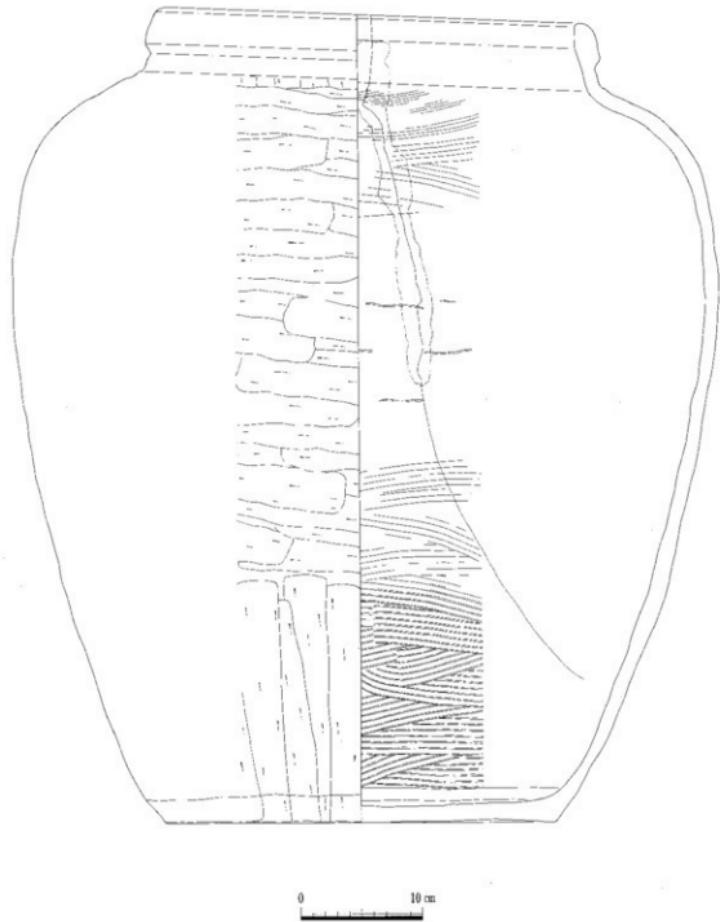


図25 墓6 出土遺物 (3)

備前焼大甕は、口縁端部を外に折り曲げてやや稜のある帯状突唇となった玉縁となっており、頸部は内傾している。胴部最大径は上半にある。外面はヨコ方向にヘラケズリ後、胴部下半はタテ方向にヘラケズリしている。内面はヨコ方向に板状工具によるナデをおこなっている。胎土には0.5cmほどの砂粒が認められ、色調は光沢のある茶褐色である。肩部付近には淡黄色のゴマ状自然釉が認められる。口径は34.0cmで、底径は32.0cm、器高は66.6cm、胴部最大径は57.2cmである。内面に、膠を塗布した補修痕が認められる。

小皿は、口径は6.8cm、器高1.2cmで、口縁部外面には帯状にススが付着しており、灯明皿に用いられ

たと考えられる。

## 墓7（図26）

すくも山南東部で検出した土壌墓で、北端部を墓4に、東端部を墓5によって削平されている。長さ約1.1m、幅0.69mの小判形をした平面形である。埋土土面では、最も大きなもので長さ0.4mの角礫が検出された。角礫は、土壌内に落ち込んでいるものの、本来は墓の標示物として墓の上面にならんでいた可能性がある。土壌底部付近から頭骨と腕、足の骨の一部が出土した。頭骨の位置から頭を北に向けて埋葬されたと考えられる。副葬品等は認められなかった。

## 墓8（図27）

すくも山南東部で検出した土壌墓で、墓5、墓7と軸方向がほとんど平行している。長さ約1m、幅0.7mの長方形をした平面形を呈する。南側の大半は墓27によって削平されている。埋土は1層で、検出面からの深さは約0.3mである。土壌底部北端から頭骨の一部と、漆の被膜が出土した。漆の被膜は副葬してあつた漆塗り製品の一部と思われる。頭骨の位置から、この墓は頭を北にして埋葬されたと考えられる。

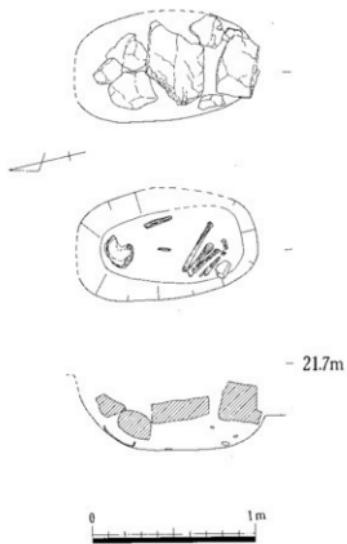


図26 墓7 実測図

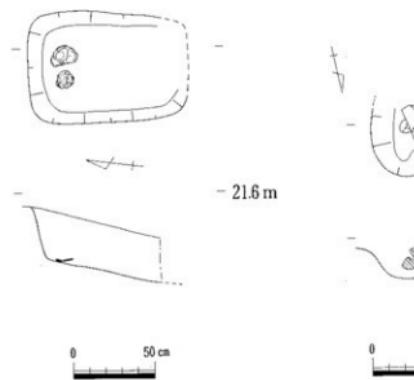


図27 墓8 実測図

図28 墓9 実測図

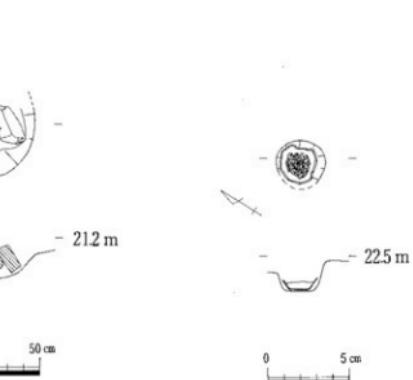


図29 墓10 実測図

**墓9（図28）**

すぐも山南東部で検出された土壙墓で、長さ0.4m以上、幅0.45mの小判形をした平面形を呈しており、角礫が2点、埋土に落ち込んでいた。副葬品等は認められなかった。

**墓10（図29・30）**

すぐも山南部で検出した骨蔵器で、径0.3mの円形の掘り方に、備前焼の壺を埋納している。壺内部には、火葬骨が残存していた。この墓は石積2と重なっており、石積の中から出土した備前焼片と、出土した備前焼骨蔵器とは接合するものが多くあり、ほぼ完形に復元することができた。

骨蔵器の備前焼壺は、口縁部が短く直立し、端部を折り曲げて玉縁にしている。肩部最大径は、上半にある。外面底部付近はヨコ方向のヘラケズリが認められるが、基本的にヨコナデで、内面はヨコナデである。肩部付近に3条を単位とする櫛目文が2条めぐる。胎土には、0.5cm程の砂粒が認められる。色調は底部付近は光沢のない茶褐色で、上半は灰色である。口径は、13.1cmで底径は13.4cm、器高は28cm、肩部最大径は25.2cmである。

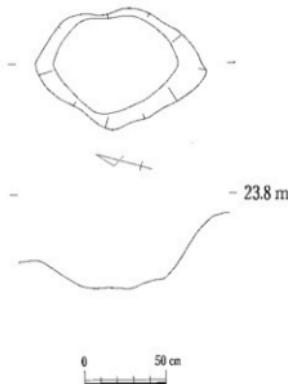
**墓11（図31）**

図31 墓11 実測図



図30 墓10 出土遺物

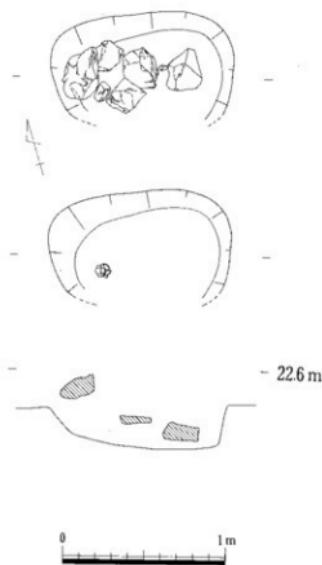


図32 墓12 実測図

すくも山北部で検出された土塙墓で、岩盤を削り貫いている。長さ1.02m、幅約0.7mの長楕円形をした平面形で、深さは検出面から0.4mで台形の断面形である。埋土は1層で、副葬品等は認められなかった。

## 墓12（図32・33）

すくも山南側で検出した土塙墓で、長さ約1.1m、幅約0.6mの小判形をした平面形を呈する。埋土上面には、最も大きいもので長さ0.35mの角櫛が検出された。西端部で検出された角櫛は、検出面よりもレベル高が上であり、本来は墓の上面にならんでいた可能性がある。

出土遺物は、底部西側から無高台の土師質土器椀と、埋土中から高台付椀の小片が出土した。無高台の椀は、口縁部が欠損しているが、おそらく端部付近と推定され、口径は9.6cm、器高は3.8cmの数値が予想される。高台付椀については、小片のため法量はよくわからないが、高台消失直前の椀であると考えられる。

## 墓13（図34）

すくも山南側で検出した土塙墓で、南側は崩落して残存していない。長さ0.7m以上、幅約0.8mの方形、もしくは長方形の平面形と推定される。断面形は残存状態の良好な北側を見る限り、方形のようである。北側底部の傾斜変換点付近から頭骨の一部が出土した。このことから、北へ頭を向けて埋葬されたようである。副葬品等は出土しなかった。

## 墓14（図35・36）

すくも山南側で検出した骨蔵器で、墓18の北端部を一部削平している。流土と掘り方埋土とが明確でなく、掘り方を上面で検出することができなかった。骨蔵器内には火葬骨が残存していた。

骨蔵器の備前焼壺は、短く頸部が直立し、端部を折り曲げて玉縁をしている。胴部最大径は、胴部上半にあるが、ナデ肩気味である。口径は13.0cm、底径は12.8cm、器高



図33 墓12 出土遺物

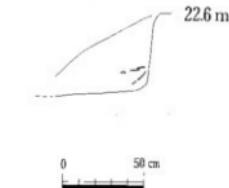


図34 墓13 実測図



図35 墓14 実測図

は28.0cm、胸部最大径は22.6cmである。外面は、底部付近にヨコ方向のヘラケズリが認められ、上半にはタテハケがおこなわれ、その上からヨコナデをおこなっている。肩部には、緑白色の自然釉が一部で流れるようにかかっている。内面はヨコナデである。頭部内面には粘土紐の接合痕が認められる。胎土には、0.3cmほどの砂粒が若干認められ、色調は光沢のない茶褐色である。底部中央付近には、径約1.8cmの焼成後穿孔が外側からおこなわれている。

墓15(図37)

すくも山南側で検出した土壤墓である。長さ約1.1m、幅約5.2mの長方形の平面形を呈する。断面形は、中央付近が長さ0.7m、幅0.4mの方形に窪む凸形をしている。西側の傾斜変換点付近で骨片が認められた以外は、副葬品等は検出されなかった。

墓16(図38)

すくも山南側で検出した土壤墓で、長さ約1.2m、幅約0.9mの小判形の平面形を呈する。深さは検出面から0.4mで、台形の断面形である。底部北端付近から頭骨の一部と、南側には大脛骨の一部が検出された。頭骨の位置から、頭を北へ向けて埋葬されたと考えられる。副葬品等は検出されなかった。

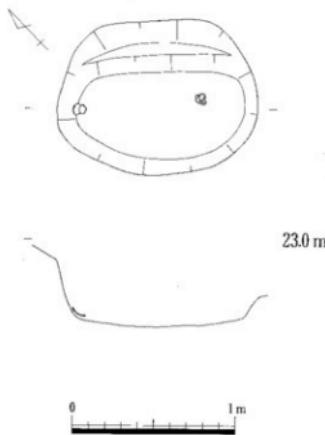


図38 墓16 実測図

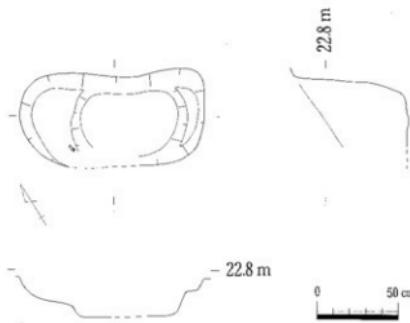


図37 墓15 実測図

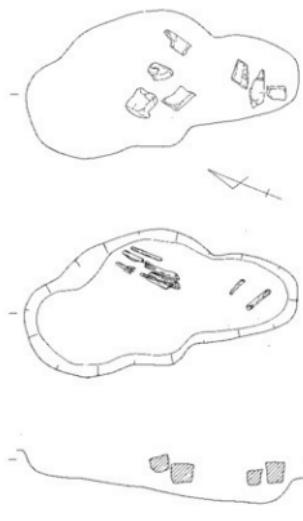
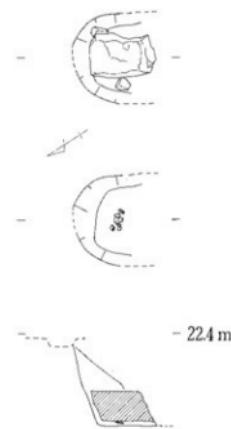


図39 墓17 実測図

## 墓17（図39）

すぐも山南東部付近で検出された土壙墓で、埋土上面には犬頭大の角礫が認められた。長さ約1.7m、幅約0.8mの不整形な平面形をしている。底部付近には人骨の一部が認められた。



## 墓18（図40）

すぐも山南側で検出された土壙墓で、南半は崩落して残存していない。北端部と西側の一部は、墓14、墓10により削平されている。長さ0.5m以上、幅0.52mで、長楕円形の平面形が推定される。埋土は1層で、長さ0.3m、幅0.24m、厚さ0.2mの大きな角礫が検出された。角礫の下からは頭骨の一部が出土しており、埋葬者の腐朽に伴い墳内へ落ち込んだのである。したがって、当初は角礫の上面は地表面に露出していた可能性があると思われる。頭骨の出土位置から、埋葬頭位方向は北であると推定される。副葬品等は認められなかった。



図40 墓18 実測図

## 墓19（図41）

すぐも山南側で検出された土壙墓で、墓20を一部削平している。長さ1.0m以上、幅0.9mで、隅丸方形の平面形と推定される。断面形はU字形で、底は平らではない。埋土下半に角礫が2個出土した。北側では頭骨の一部と、南西部には足の骨の一部が残存していた。埋葬頭位方向は北と推測される。副葬品等は認められなかった。

## 墓20（図42・43）

すぐも山南側で検出された土壙墓で、墓19により東側上面を一部削平されている。長さ1.1m、幅0.6mの小判形をした平面形をし、検出面からの深さは0.25mで、断面形は台形である。埋土中上半からは、0.1~0.2mの大きさの角礫が出土している。

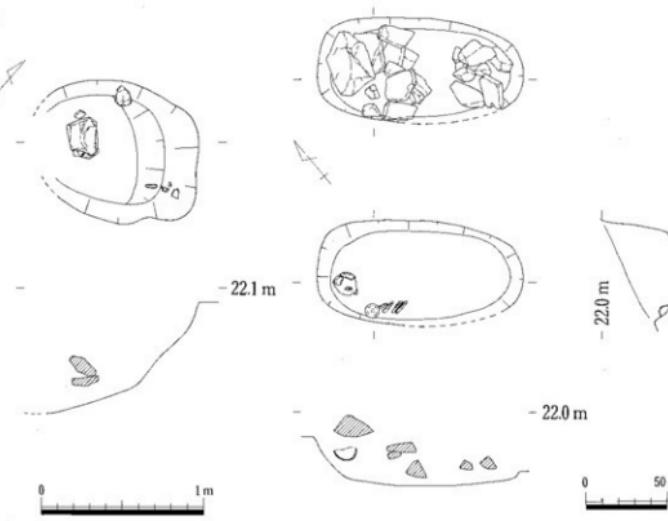


図41 墓19 実測図

図42 墓20 実測図

が、北端の角礫は検出面よりレベル高が上であり、当初は上面にならんでいた可能性も推測される。北端部の斜面から頭骨が、西側からは肋骨の一部が出土した。これから埋葬頭位方向は北と考えられる。副葬品としては、北西底部付近で無高台の土師質椀が、伏せた状態で出土した。

土師質椀は口径9.5cm、器高は3.2cmで、口縁部外面と内面はナデである。外面下半には、半乾き時にできたひび割れが底部中央を中心とした同心円状に認められ、底部を押し出した痕跡とも考えられる。胎土は緻密で、色調は淡黄灰色である。

図43 墓20 出土遺物

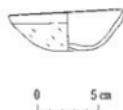


図43 墓20 出土遺物

図44 墓21 実測図



すくも山南東部で検出された土壙墓である。一辺約1mの隅丸方形の平面形を呈し、深さは検出面から0.1mで台形の断面形である。中央付近に長さ0.2~0.4mほどの角礫がまとまって検出された。北東部からは、土師質土器小皿が4枚出土しており、3枚ならべて中央には2枚重ねてあった。角礫の下からは人骨の一部が出土したが、頭骨は残存しておらず、埋葬頭位方向は不明である。ただ、小皿を枕元に副葬していたとすると、北頭位であった可能性がある。

出土した小皿は口径6.4~6.5cm、底径5.0cm、器高1.4~1.5cmで、底部はヘラ切り後中央付近に板状工具による圧痕、内面はヨコナデの後に中央付近を不整方向にナデしている。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。



図44 墓21 実測図

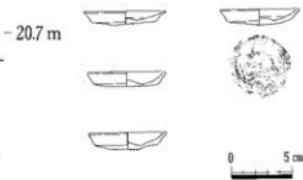


図45 墓21 出土遺物

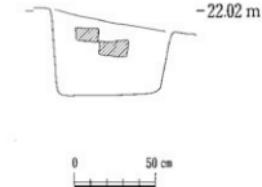


図46 墓22 実測図

図46 墓22 実測図

すくも山南東部で検出された土壙墓である。長さ約0.75m、幅約0.7mの隅丸方形の平面形で、深さは検出面から0.5mの箱形の断面形を呈する。埋土は1層で、上面に角礫が検出された。角礫は大きいもので長さが0.3mほどある。同様に角礫が検出された墓21と比べると、墓22の方が深い。両者には埋葬形態に相違のある可能性が推測される。

副葬品等は検出されなかった。

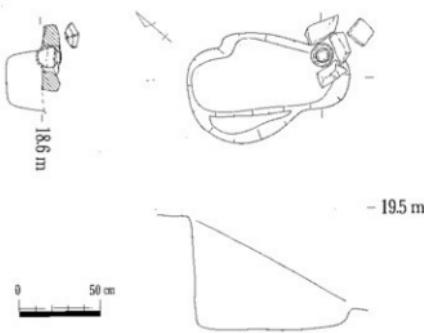


図47 墓23・24 実測図



図48 墓24 出土遺物

## 墓23・24 (図47・48)

すぐも山南東部で検出された土壙墓と骨蔵器である。土壙墓である墓23は、長さ約3.4m、幅2.2mの長楕円形の平面形で、深さは検出面から約2.2mの箱形の断面形を呈する。南側の埋土上面には、墓24が存在する。

骨蔵器である墓24は、長さ約0.1mの角碟3点が周囲で検出され、石凹状に配置されている。南東部の角碟の背後には、逆転した状態で五輪塔の火輪が出土した。他の部分は出土しなかったが、墓24の上部に五輪塔がたっていた可能性がある。五輪塔の石材はコゴメ石である。

骨蔵器は備前焼の壺で、口径8.5cm、底径8.5cm、器高13.1cm、胴部最大径は上半にあり、径13.2cmである。口縁部は「く」字形で短く外反する。色調は光沢のある茶褐色である。この骨蔵器の時期は、16世紀前半で、当遺跡のなかでは最も新しい部類に入る。

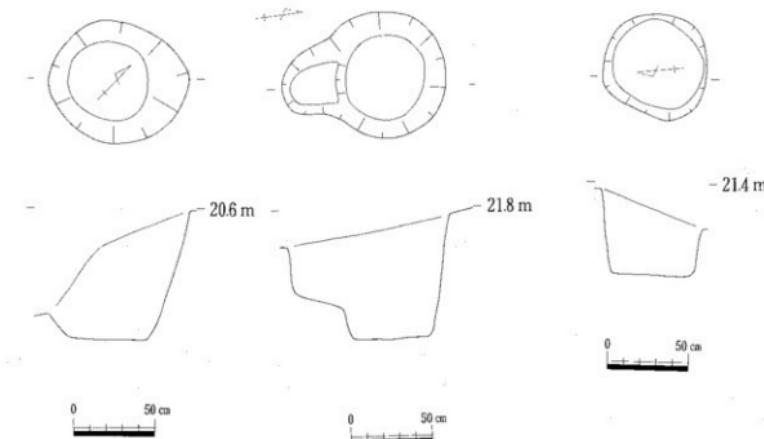


図49 墓25 実測図

図50 墓26 実測図

図51 墓27 実測図

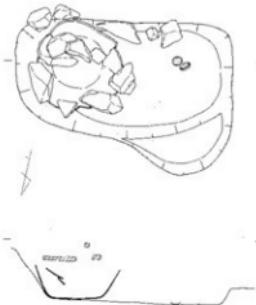


図 52 墓28 実測図

## 墓25(図49)

すくも山南側で検出された土壙墓で、径約0.87mの円形の平面形である。底は平坦で、径0.5mの円形を呈する。深さは検出面から0.8mで、断面形は台形である。副葬品等は認められなかった。

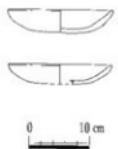


図 53 墓28出土遺物(1)



図 54 墓28 出土遺物(2)

## 墓26（図50）

すぐも山南東部で検出された土壙墓で、径約0.7mの円形に幅約0.4m、長さ約0.4mの張り出しが付く。深さは検出面から約0.7m、張り出し部は約0.3mである。埋土は1層で、副葬品等は検出されなかった。

## 墓27（図51）

すぐも山南東部で検出された土壙墓で、墓8の南半を削平している。径約0.6mの円形の平面形を呈し、深さは検出面から約0.5mである。埋土は1層で、副葬品等は検出されなかった。

## 墓28（図52・53・54）

すぐも山南東部で検出された土器棺墓で、長さ1.3m、幅0.7mの長方形の掘り方の東側に備前焼の大甕をすえている。埋土は1層で、上半に角礫が認められた。西側底部では、土師質土器小皿が2枚出土した。土器棺に対する供獻の可能性がある。

備前焼大甕は、上半は欠損しているが周辺からよく似た胎土をした大甕の口縁部片が出土しており、本来は完形であったのかもしれない。底径35cmで外面胴部上半をヨコハケ後、下半をタテハケ、内面ヨコハケ、底部付近はヘラ状工具によるナデである。胎土には0.5cmほどの砂粒が認められ、色調は光沢のある茶灰色である。墓6の土器棺とほぼ同じ大きさで、時期についてもほぼ同じと考えられる。

土師質小皿は、口径9.2cm、器高0.8cm、底径5.1cm、胎土は緻密、色調は黄橙色である。調整は残存状態がよくないため詳細はよくわからないが、底部はヘラ切りをおこなっている。

## 墓29・30（図55）

すぐも山南東部で検出された土壙墓で、墓30の北側は墓29により削平されている。墓29は長さ0.9m、幅0.65mの小判形の平面形で、深さは検出面から0.28mである。断面形は箱形である。墓30は長さ1.1m、幅0.8mの小判形の平面形で、深さは検出面から0.34mである。断面形は箱形である。墓30の南側には人骨の一部が残存していた。両土壙とも副葬品等は認められなかった。

## 墓31（図56）

すぐも山頂部北側で検出された土壙墓で、長さ約0.9m、幅約0.5mの小判形をした平面形を呈する。深さは検出面から0.4mで、箱形の断面形である。北側の上面には、長さ0.2mほどの板石が検出された。埋土中ほどからは、鉄器が1点出土している。

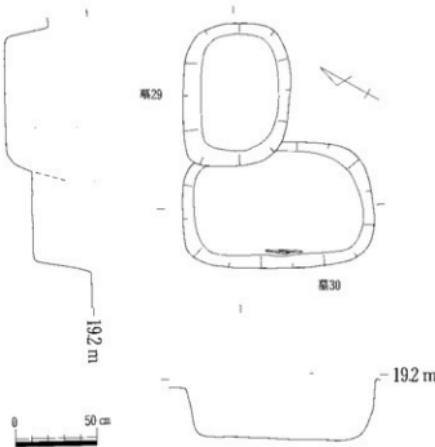


図 55 墓29・30 実測図

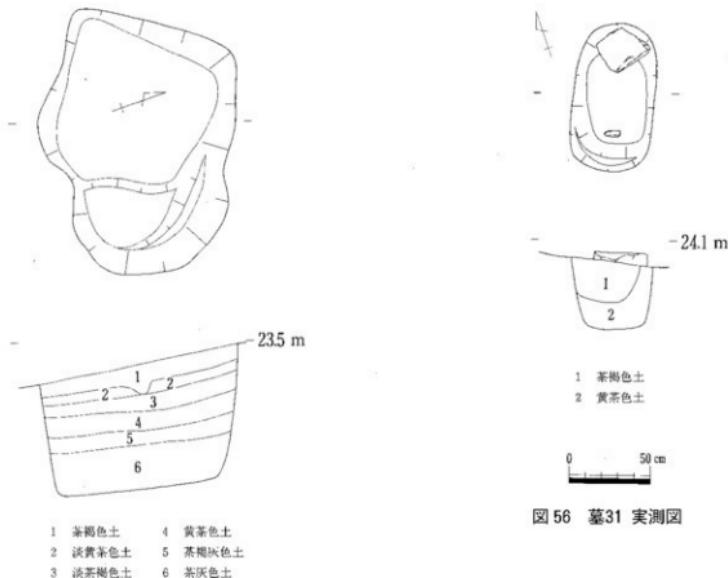


図 56 墓31 実測図



図 57 墓32 実測図

**墓32（図57）**

すくも山南側で検出された土壌墓で、一辺約1.0mの方形の平面形の東側に、幅約1.0m、長さ0.5mの舌状の張り出し部がつく。張り出し部の底は、底部から約0.2m上の位置にある。副葬品等は認められなかった。埋土は6層で、序々に埋没していったとも考えられ、墓域でない可能性もあるが中世墓群のなかに位置していることから一応土壌墓と考えた。

**墓33（図58）**

すくも山南側で検出された土壌墓で、一辺約1.0mの方形の平面形を呈する。深さは検出面から0.4mで、箱形の断面形である。埋土は3層で、間層に薄い炭層が認められる。土師質小皿の小片が出土した以外は遺物は認められなかった。

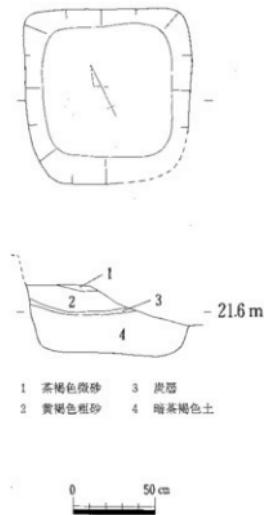


図 58 墓33 実測図

## 五輪塔（図59）

すくも山南側斜面で検出されたもので、検出当初は斜面堆積と思われた。しかし、五輪塔の地輪がほぼ水平であることから周辺を精査した結果、まず、斜面部を一辺約30cmの方形に削り出し、その上に盛土をおこなって長さ約40cm、幅約40cm、高さ約16cmの土壇をつくっている。そして、土壇の中央に長さ25cm、幅20cmの板石を置きその上に火葬骨をのせ、さらに、五輪塔の地輪を重ねている。五輪塔の周辺には角礫がかたまって検出されており、土壇の周間に貼られていた可能性もある。

すくも山では火葬骨がかなり出土しており、その大半は斜面部における2次の堆積であったが、いくつか塊状にかたまつて出土した箇所もあった。それらは、腐朽しやすい材料でできた骨蔵器のものである場合と、散骨をおこなった場合とがあったと思われる。とくに後者の場合、今回検出したような埋葬形態、あるいは供養形態がその上部に存在した可能性もある。

## 斜面出土土器

すくも山の周囲の斜面部からは、多くの土器が出土している。それらは、北側斜面、南側斜面、東側斜面、堀切周辺とに分けて取り上げた。

## 〈北側斜面〉（図60・61）

1は備前焼の壺で、底部は欠損している。口径11.0cm、底径14.0cm、器高26.4cm、胴部最大径は上半にあり、径20.2cmである。肩部に6条を単位とした波状の櫛目文がめぐる。胎土には、0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

2は備前焼の壺で、口径10.4cmである。肩部に黄灰色のゴマ状の自然釉が認められ、色調は光沢のある茶灰色、胎土には、0.8cmの砂粒が若干含まれる。

3は備前焼の壺の底部で、底径14.0cm、外面は一部ヘラケズリが認められるが、ほかは内外面ともヨコナデ。胎土は緻密で、色調は光沢のある茶褐色。

4は備前焼の壺の胴部の破片である。最大径は上半にあり、径26.0cmで須恵質の焼き上がりである。胎土は緻密で、肩部に3条のヘラがき沈線がめぐる。

5は備前焼の壺で、内外面ヨコナデ、底径13.2cm、胴部最大径は23.0cmである。胎土には、0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色で、一部灰色のところがある。

6は備前焼のすり鉢で、底部以外は完形である。口径21.4cm、器高8.8cm、底径11.0cmである。内面には7条の櫛状条縞が7単位ある。胎土には、0.6cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

7は小形の壺で、雀口が認められる。口径4.9cm、底径5.0cm、器高12.0cmである。底部外面には糸切り痕があり、胎土は緻密で、色調は茶褐色である。肩部に緑灰色をした自然釉が付着している。

8は羽釜形の瓦質土器で、外面ハケの後、ヨコナデ、内面はヨコハケである。外面下半には部分的にススが付着する。

9は羽釜形の土師質土器で、外面下半はタテハケの後底部付近はヨコハケ、上半はタテハケ後ナデ。

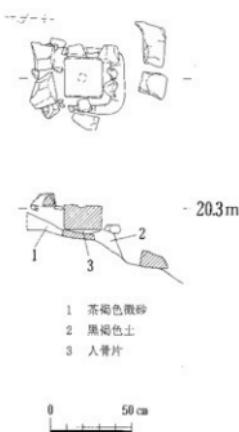


図59 南側斜面 五輪塔

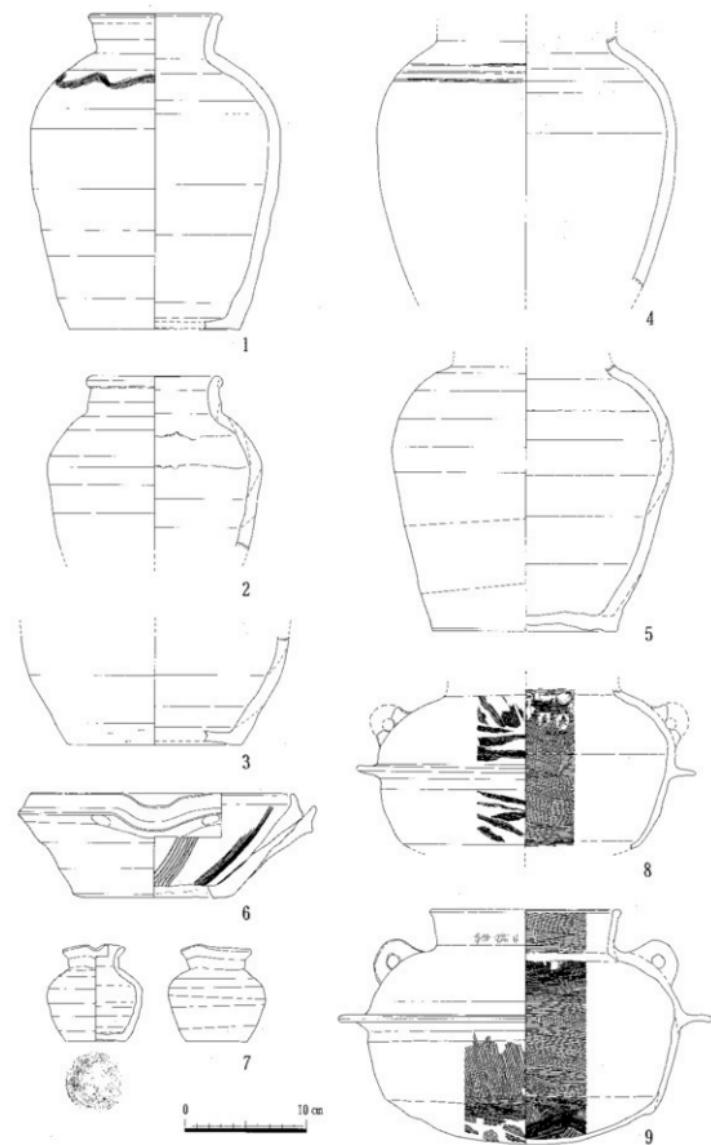


図 60 北側斜面出土遺物 (1)

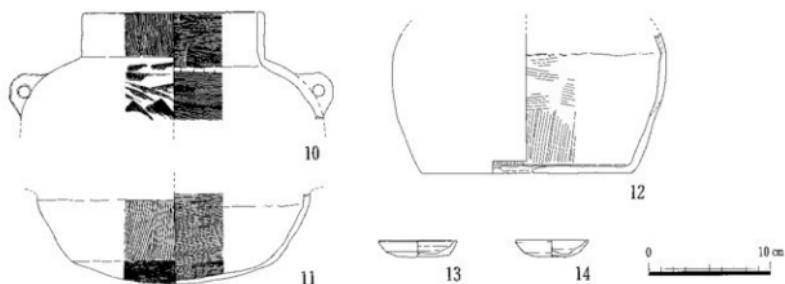


図 61 北側斜面出土遺物 (2)

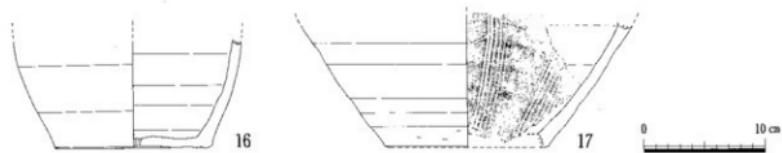


図 62 南側斜面出土遺物 (1)

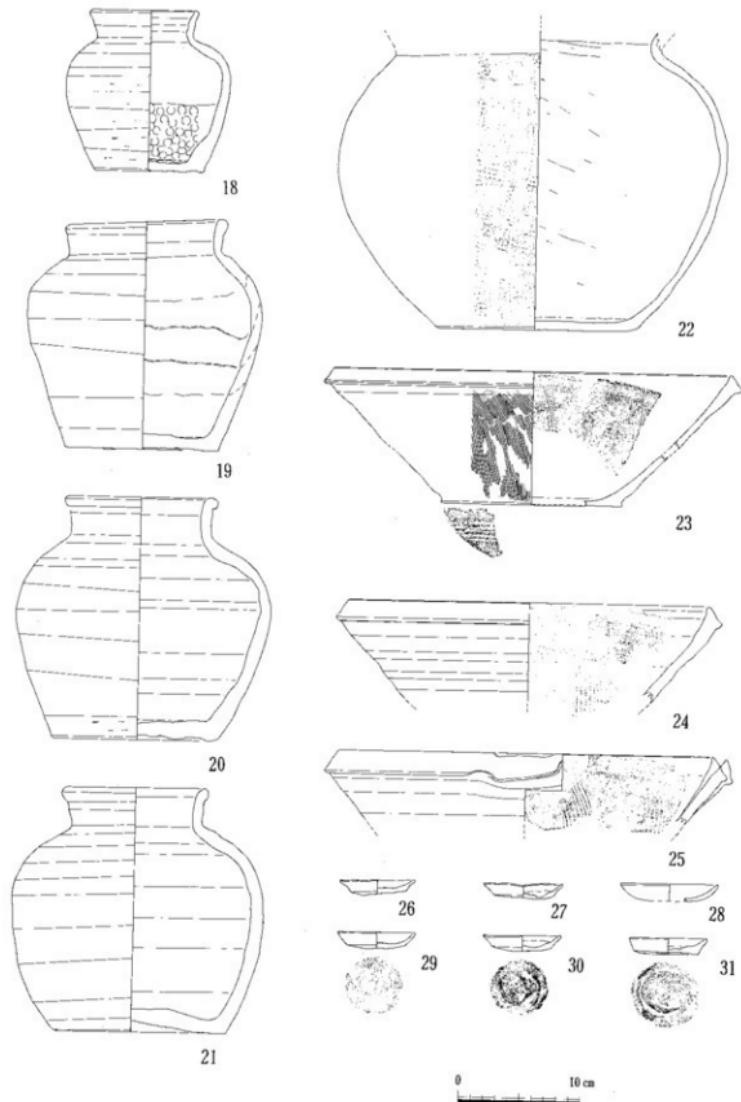


図63 南側斜面出土遺物(2)

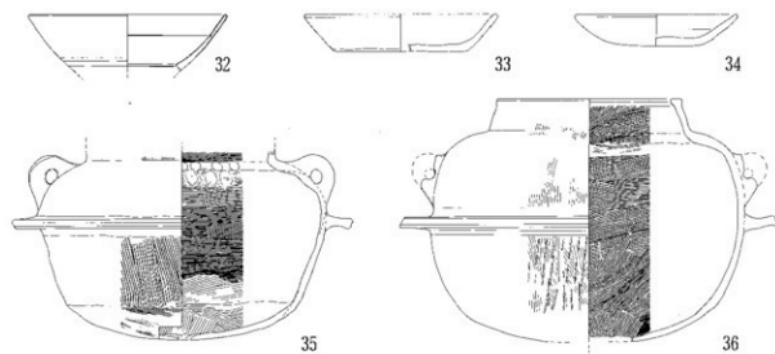


図 64 南側斜面出土遺物 (3)

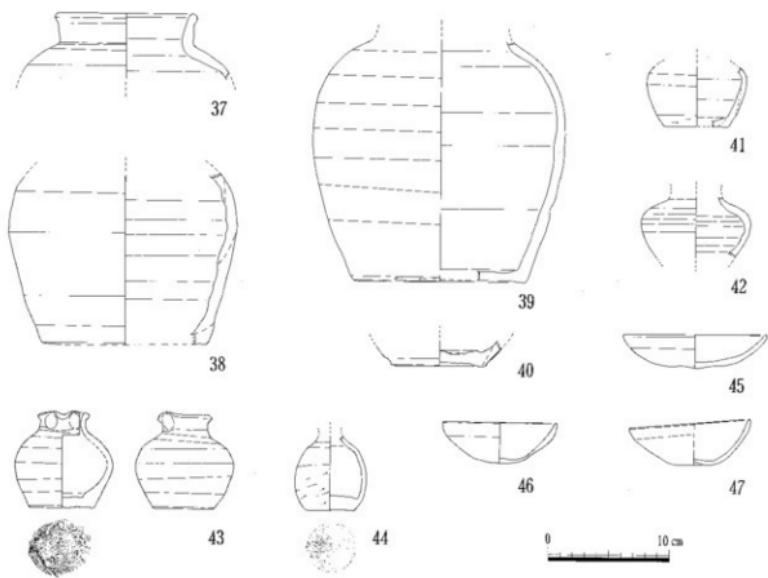


図 65 東側斜面出土遺物

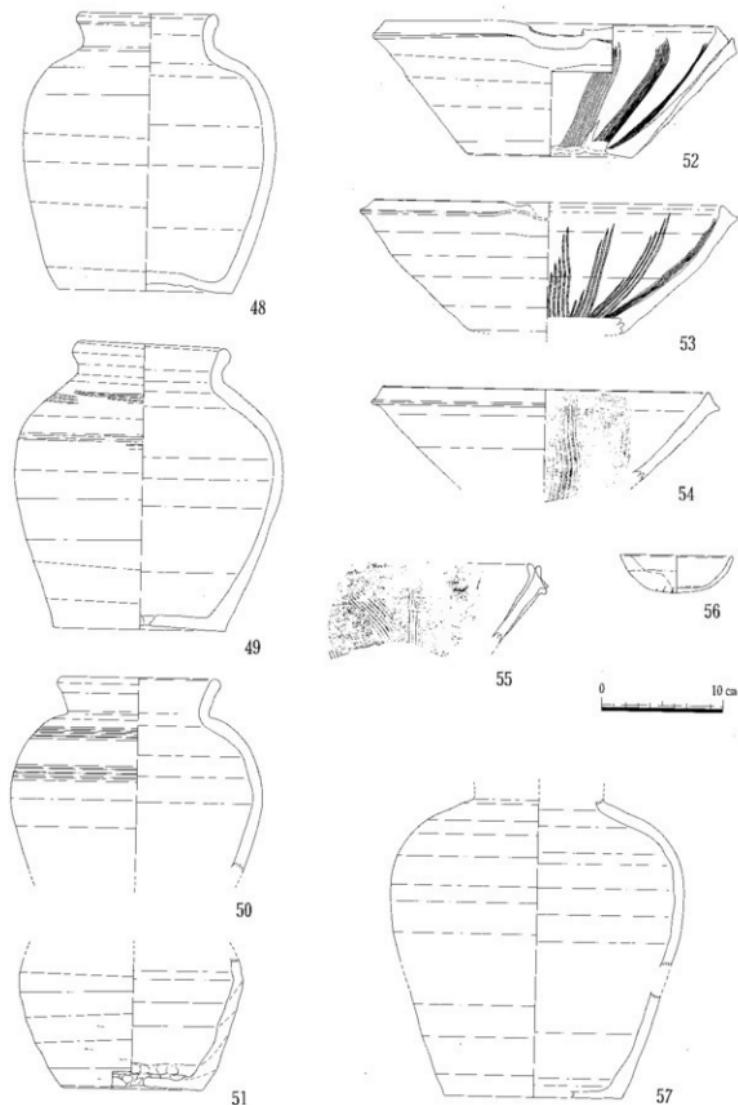


図66 塙切周辺出土遺物(1)

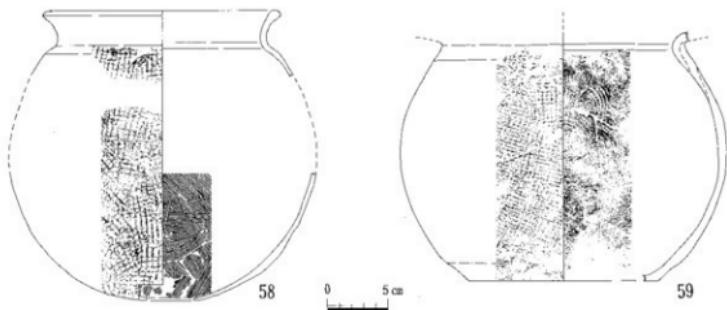


図 67 堀切周辺出土遺物 (2)

内面はヨコハケ後、頸部付近はヘラナデ。胎土は緻密で、色調は橙灰色、外面下半にはススが付着する。10は羽釜形の瓦質土器で、外面口径部タテハケ、胴部ヨコハケの後ナデ。内面ヨコハケで、頸部付近ナデ。

11は羽釜形の瓦質土器で、外面タテハケの後、底部付近ヨコハケで、内面はヨコハケ。外面下半にはススが付着している。

12は土師質土器で、外面の調整は不明で、内面はタテハケの後ナデ。底部外面にはススが付着しており、中央には径2.0cmの焼成後穿孔が認められる。

13は土師質の小皿で、口径6.3cm、底径5.4cm、器高1.35cmである。胎土は緻密で、色調は橙灰色、底部はヘラ切りである。

14は土師質土器の小皿で、口径5.9cm、底径3.8cm、器高1.38cmである。胎土は緻密で、色調は橙色、底部はヘラ切りである。

15は備前焼の大壺で上半1/3ほどの破片である。外面はヨコハケの後、下半はタテハケ、内面はナナメハケ。胎土には0.8cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

#### 〈南側斜面〉(図62・63・64)

16は備前焼の壺で、底径13.0cmである。外面下半ヘラケズリ後、上半までヨコナデ、内面はヨコナデで、底部付近はナデ。底部中央付近には焼成後穿孔が認められる。胎土には0.5cmの砂粒が認められ、色調は茶褐色。

17は備前焼のすり鉢で、内面には6条の櫛目状条線がある。胎土には0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶灰色である。

18は備前焼の壺で、底径8.75cm、器高13.25cm、胴部最大径は13.55cmである。外面はヨコ方向のケズリの後ヨコナデ、内面はヨコナデで、下半に指頭圧痕が残る。胎土には1.0cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

19は備前焼の壺で、口径12.0cm、底径12.55cm、器高19.1cm、胴部最大径は19.25cmである。内外面ヨコナデで、内面底部付近はナデである。片面に黄灰色の自然釉が付着している。胎土には1.0cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

20は備前焼の壺で、口径11.6cm、底径13.8cm、胴部最大径は15.95cmである。外面は底部付近にヨコ方向へのヘラケズりがあり、ほかはヨコナデ、内面は底部付近がナデで、ほかはヨコナデである。胎土には0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

21は備前焼の壺で、口径11.2cm、底径14.0cm、器高20.2cm、胴部最大径は20.5cmである。内外面はヨコナデで、片面には緑灰色の自然釉が付着する。胎土には0.3cmほどの砂粒が若干認められ、色調は光沢のある茶色である。

22は龜山焼の壺で、底径16.6cmである。外面は格子目タタキ、内面はヘラ状工具によるナデである。

23は龜山焼のすり鉢で、口径32.6cm、底径14.8cmである。外面はタテハケ、内面はヨコハケの後、5条の櫛目状条線が施される。底部外面にはハケが認められる。

24は備前焼のすり鉢で、口径29.5cm、内面には8条の櫛目状条線が施される。胎土には0.6cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

25は備前焼のすり鉢で、口径30.8cm、内面には8条の櫛目状条線が施される。胎土には0.6cmほどの砂粒が若干含まれ、色調は茶褐色である。

26は土師質小皿で、口径6.4cm、底径4.95cm、器高1.25cmである。底部外面ヘラ切り後板目压痕、内面ヨコナデの後中央付近ナデ。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

27は土師質小皿で、口径6.0cm、底径4.4cm、器高0.8cmである。底部外面ヘラ切り後、板目压痕、内面ヨコナデの後中央付近ナデ。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

28は土師質小皿で、口径7.9cm、器高1.4cmである。色調は橙褐色。

29は土師質小皿で、口径6.3cm、底径4.8cm、器高1.35cmである。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

30は土師質小皿で、口径6.3cm、底径4.8cm、器高1.3cmである。底部外面ヘラ切り後、板目压痕、内面ヨコナデの後中央付近ナデ。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

31は土師質小皿で、口径6.2cm、底径5.4cm、器高1.35cmである。底部外面ヘラ切り後、板状工具による压痕、内面ヨコナデの後中央付近ナデ。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

32は白磁の楕で、内面に細い沈線を施す。

33は土師質杯で、口径15.6cm、底径11.1cm、器高3.1cmである。調整は不明で、色調は橙褐色、胎土は緻密である。

34は土師質杯で、口径13.2cm、底径6.0cm、器高2.6cmである。外面底部ヘラ切り後ナデ、内面はヨコナデである。胎土は緻密で、色調は橙褐色である。

35は土師質の羽釜形土器で、口縁部が欠損している以外はほぼ完形である。外面下半はタテハケ後底部付近はヨコハケ。内面ヨコハケの後、頸部付近は指頭圧痕が認められる。胎土には0.3cm程の砂粒が含まれ、色調は橙灰色である。底部中央には内面から焼成後穿孔している。

36は土師質の羽釜形土器で、外面下半はタテハケ、上半はヨコナデ、内面はナナメハケで、頸部付近ナデである。胎土には微細な砂粒が若干含まれ、色調は淡橙灰色である。外面下半にはススが付着している。底部の中央付近は径6.5cmほど欠損しており、焼成後穿孔をおこなった可能性もある。

#### 〈東側斜面出土遺物〉（図65）

37は備前焼の壺で、口径10.8cmである。口縁端部は小さい玉縁をつくり、肩部に黄灰色のゴマ状自然釉が付着する。色調は光沢のある茶褐色であるが、内面下半は灰色である。

38は備前焼の壺で、底径13.6cmである。胎土には0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

39は備前焼の壺で、底径14.2cm、胴部最大径は20.8cmある。外面は底部付近ヘラケズリ、ほかはヨコナデ、内面はヨコナデ、底部付近はナデ。胎土は1.0cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

40は瀬戸焼の瓶子の底部片である。底径7.5cmである。

41は備前焼の小壺で、底径5.3cmである。外面底部付近はヨコケズリ、ほかはヨコナデ、胎土は0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。

42は備前焼の小壺で、内外面ヨコナデ、肩部付近に緑灰色の自然釉が付着する。胎土は緻密で、色調は灰褐色である。

43は備前焼の小壺で雀口が認められる。口径3.65cm、底径5.3cm、器高7.9cm、胴部最大径は8.05cmである。内外面ヨコナデ、底部には糸切り痕とその上から板目圧痕が認められる。肩部に黄緑色の自然釉がゴマ状に付着する。胎土は緻密で、色調は茶褐色である。

44は備前焼の小壺、もしくは徳利形瓶で、外面下半にはケズリ、ほかはナデ。胎土は0.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は茶褐色である。斜面出土土器のなかでは、最も新しい時期に属する。

45は土師質土器皿で、口径11.6cm、器高0.8cmである。底部外面はヘラケズリの後ナデ。胎土は緻密で、色調は橙褐色である。

46は土師質土器椀で、口径9.2cm、器高3.35cmである。底部外面には、半乾き時に押し出した際についたヒビ痕が認められる。色調は橙灰色で、胎土は緻密である。

47は土師質土器椀で、口径9.8cm、器高3.5cmである。底部外面には、半乾き時に押し出した際についたヒビ痕が認められる。色調は淡橙灰色で、胎土は緻密である。

#### 〈堀切周辺〉（図66・67）

48は備前焼の壺で、完形である。口径10.8cm、底径14.4cm、器高29.9cm、胴部最大径は20.7cmである。内外面ヨコナデ、肩部付近に緑灰色のゴマ状自然釉が付着する。胎土に1.0cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

49は備前焼の壺で、完形である。口径11.6cm、底径14.1cm、器高23.75cm、胴部最大径は22.05cmである。外面タテハケの後ヨコナデである。肩部には4条を単位とする横目文が2条めぐる。胎土は1.5cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。口縁部から肩部にかけて緑灰色のゴマ状自然釉が付着する。底部中央には径1.0cmほどの焼成後穿孔が認められる。

50は備前焼の壺で、口径12.4cmである。肩部付近に4条を単位とする横目文が2条めぐる。胎土には1.0cmほどの砂粒が若干含まれ、色調は茶褐色である。口縁部から肩部にかけて淡緑灰色のゴマ状自然釉が付着する。

51は備前焼の壺で、底径11.4cmである。内外面ヨコナデ、底部内面はナデである。胎土は1.0cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

52は備前焼のすり鉢で、口径27.35cm、底径13.6cm、器高10.9cmである。内面には8条の横目状条線が12単位ある。胎土には0.5cmほどの砂粒が認められ、色調は茶褐色で、口縁端部には緑灰色の自然釉が付着する。底部は径10cmほどの円形に欠損しており、意識的に穿孔した可能性がある。

53は備前焼のすり鉢で、1/4ほどの破片である。口径は26.4cm、胎土には0.7cmほどの砂粒が含まれ、色調は光沢のある茶褐色で、口縁端部と内面には緑灰色のゴマ状自然釉が付着する。内面には5条の横目状条線が5単位以上ある。

54は備前焼のすり鉢で、1/2ほどの破片である。口径は26.7cm、胎土には0.5cmほどの砂粒が若干含

まれ、色調はやや光沢のある茶褐色である。内面には6条の櫛目状条線が7単位以上ある。条線は使用による摩滅が認められる。

55は備前焼のすり鉢で、内面に7条の櫛目状条線があり、胎土には1.0cmほどの砂粒が若干含まれ、色調は光沢のある茶褐色である。

56は土師質土器の楕で、口径9.1cm、器高3.1cmである。外面下半には粘土の接合痕が観察され、円板状の粘土板の一方に切れ込みを入れて成形したことがわかる。底部外面には板目压痕が認められる。胎土は緻密で、色調は橙灰色である。

57は備前焼の壺で、底径12.3cm、胴部最大径24.0cmである。底部付近はヨコケズリ、ほかはヨコナデである。胎土は0.4cmほどの砂粒が若干含まれ、色調は光沢のある茶褐色、内面は灰色である。

58は亀山焼の甕で、口径18.4cmである。外面格子目タタキ、内面はヨコハケである。色調は橙灰褐色で、微細な砂粒が含まれる。

59は亀山焼の甕で、底径15.6cmである。胎土には微細な砂粒が若干入る。外面に格子目タタキ、内面は同心円タタキの後ナデである。色調は橙灰褐色である。

#### 〈鉄製品・銅製品〉(図68・69)

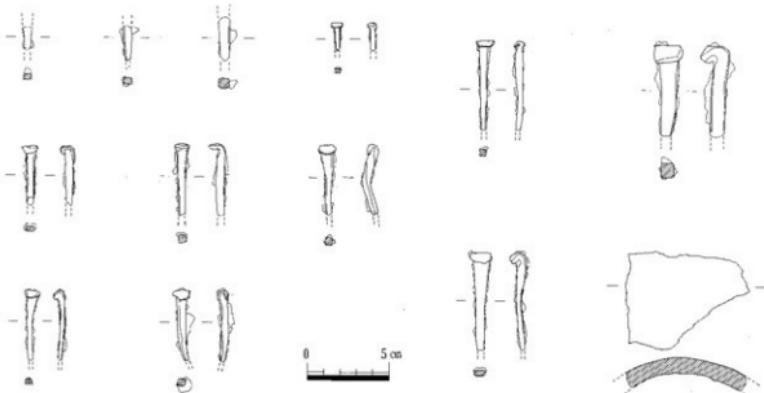


図68 斜面出土鉄製品

鉄釘と鉢状の形状をした鉄製品が出土している。鉄釘はいずれも方形の断面形をしており、長さは現存長で2~6cmのもので、幅は0.4~1.0cmのものである。

銅錢は2枚出土している、1枚は「大觀通宝」で、もう1枚は「紹聖元宝」である。

#### 〈石造物〉(図70・71・72)

すぐも山の山頂付近や斜面から、石造物がいくつか出土している。石造物は組合式の五輪塔と宝篋印塔で、五輪塔の方が多い。出土地点と石材については以下の表にまとめる。ただ、豊島石製としたものについては近世初頭によくみられる同石製の石造物とはやや異なっており、より

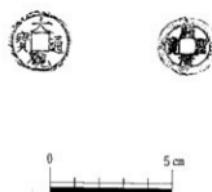


図69 斜面出土銅錢

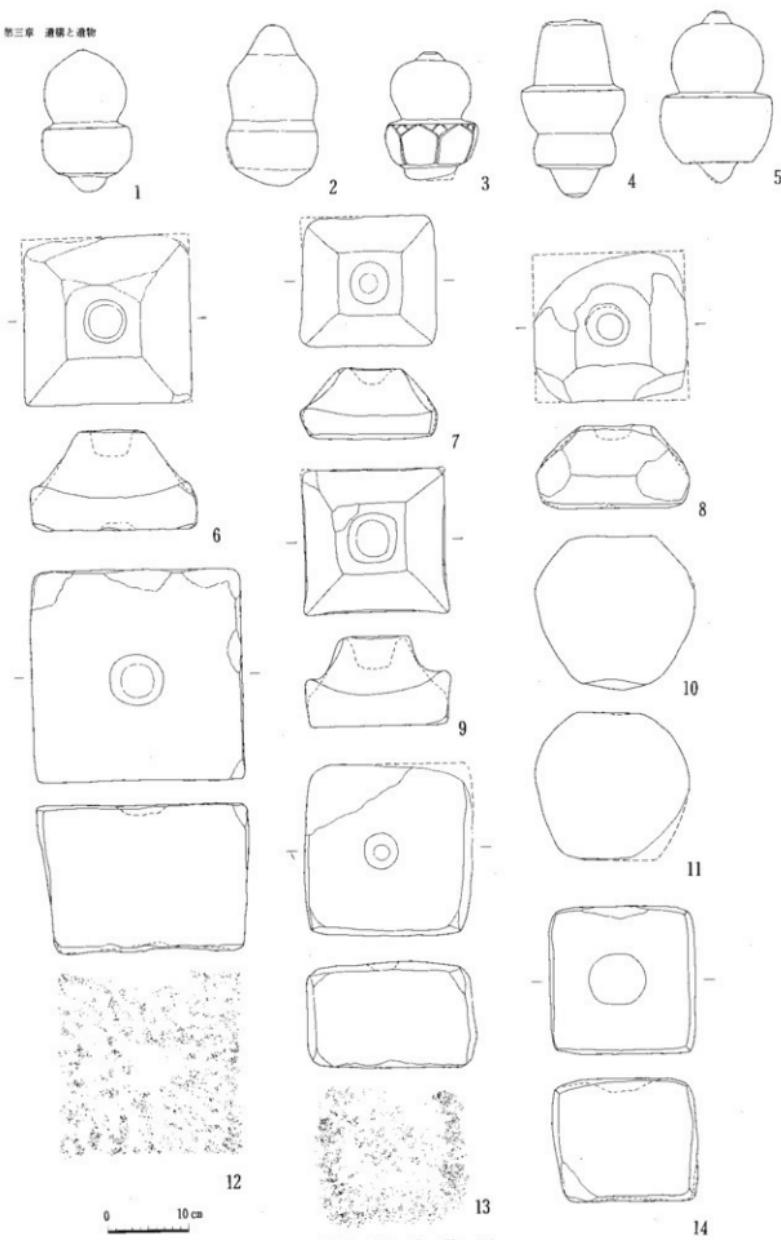


図70 石造物(1)

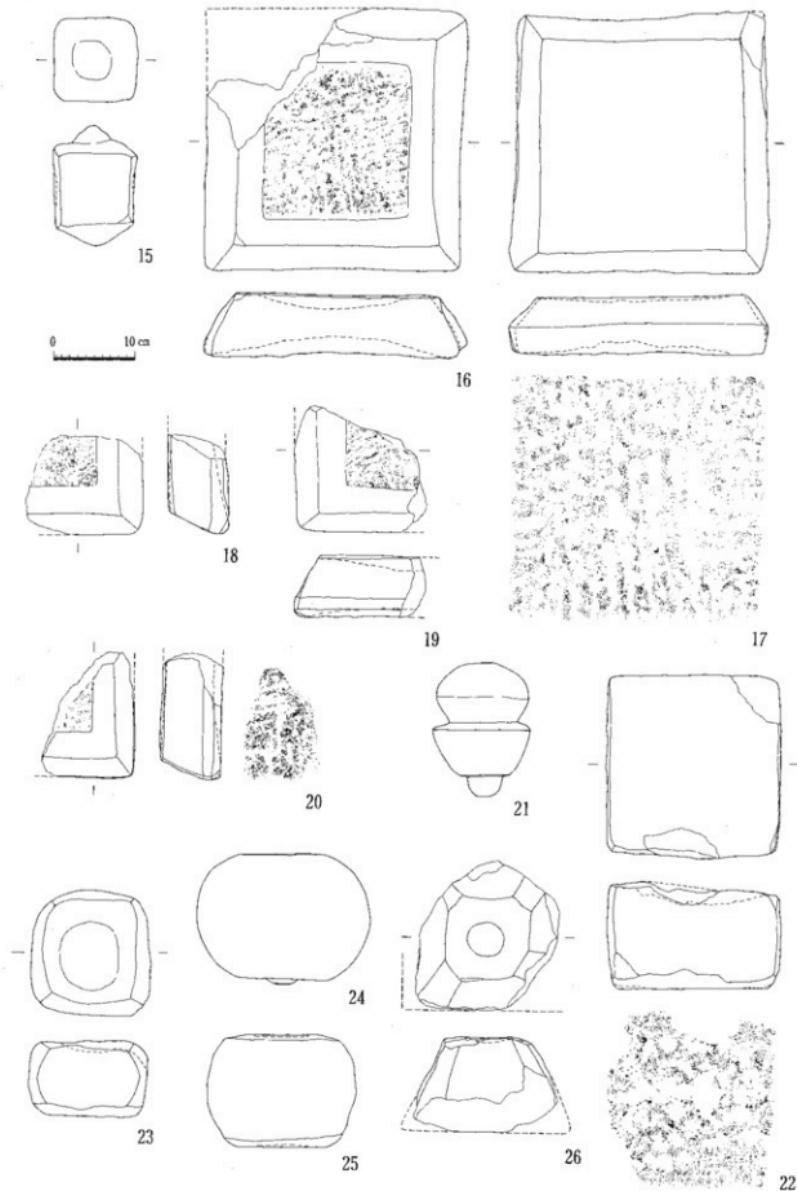


図71 石造物(2)

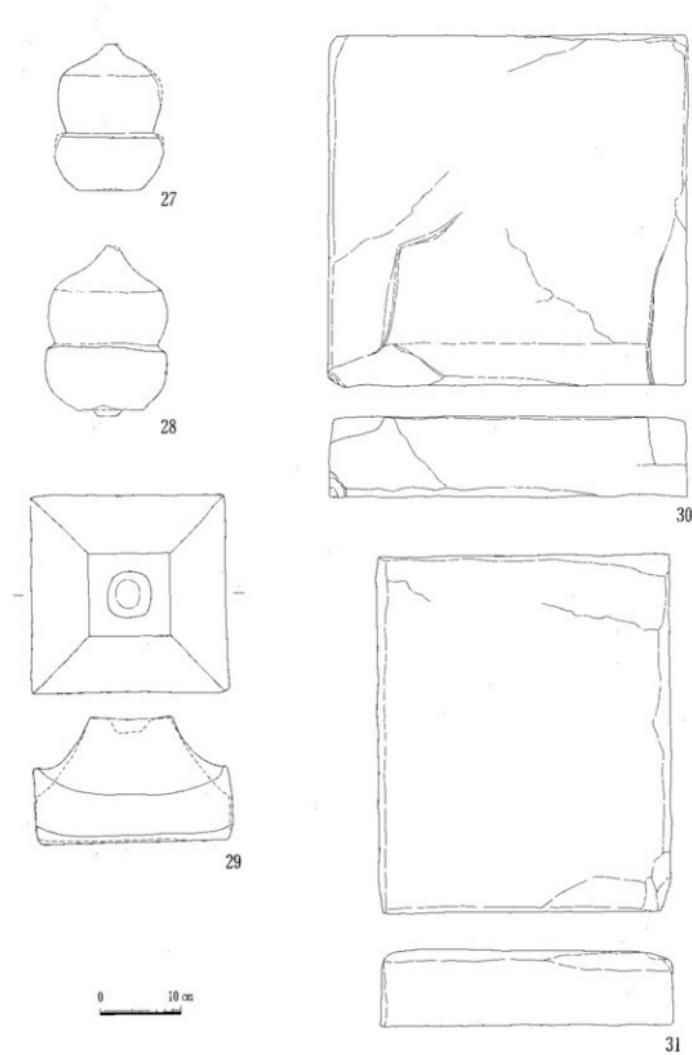


図72 石 造 物 (3)

詳細な検討が必要であるが、凝灰岩であることはまちがいなく、一応ここでは豊島石製としておく。コゴメ石製のものと豊島石製のものには石切ノミによる加工痕が認められる。コゴメ石製のものは中心部から放射状に加工しており、豊島石製のものは一方向から加工している。また、豊島石製のものに残る石切ノミ痕の幅は約2cmであるが、コゴメ石製のものに残る石切ノミ痕の幅は約1.5cmである。石材の違いと、加工の仕方、工具の違いは対応しており、石材の違いはその石造物をつくった人が異なっていたことを反映している可能性が高いように思われる。

番号	部 分	石 材	出 土 地 点
1	五輪塔空風輪	コゴメ石	東側斜面
2	五輪塔空風輪	コゴメ石	東側斜面
3	五輪塔空風輪	コゴメ石	南側斜面
4	宝篋印塔相輪	コゴメ石	北側斜面
5	五輪塔空風輪	コゴメ石	南側斜面
6	五輪塔火輪	コゴメ石	墓 - 2 4
7	五輪塔火輪	コゴメ石	東側斜面
8	五輪塔火輪	コゴメ石	頂上付近
9	五輪塔火輪	コゴメ石	頂上付近
10	五輪塔水輪	コゴメ石	南側斜面
11	五輪塔水輪	コゴメ石	南側斜面
12	五輪塔地輪	コゴメ石	五輪塔
13	五輪塔地輪	コゴメ石	堀切り周辺
14	五輪塔地輪	コゴメ石	東側斜面
15	宝篋印塔塔身	コゴメ石	南側斜面
16	宝篋印塔基壇	コゴメ石	北側斜面
17	宝篋印塔基壇	コゴメ石	北側斜面
18	宝篋印塔基壇	コゴメ石	北側斜面
19	宝篋印塔基壇	コゴメ石	北側斜面
20	宝篋印塔基壇	コゴメ石	北側斜面
21	五輪塔空風輪	豊島石?	南側斜面
22	五輪塔地輪	豊島石?	頂上付近
23	五輪塔地輪	豊島石?	頂上付近
24	五輪塔水輪	コゴメ石	堀切り周辺
25	五輪塔水輪	豊島石?	南側斜面
26	五輪塔火輪	豊島石?	頂上付近
27	五輪塔空風輪	カコウ岩	石積 2
28	五輪塔空風輪	カコウ岩	石積 2
29	五輪塔火輪	カコウ岩	堀切り周辺
30	宝篋印塔基壇	カコウ岩	南側斜面
31	宝篋印塔基壇	カコウ岩	南側斜面

表1 出土石造物

すぐも山で出土した五輪塔のうち最も多い石材はコゴメ石で、全体の60%を占める。次いで豊島石の24%、花崗岩の16%となる。石造物を出土した中世墓の調査例をみてみると、倉敷市の會原遺跡ではコゴメ石（含石灰岩）が66%、花崗岩が28%、豊島石の6%となる<sup>(1)</sup>。同じく倉敷市の鶴石鼻遺跡では花崗岩が63%で最も多く、次いで豊島石の28%、コゴメ石の9%となる<sup>(2)</sup>。賀陽町の大村遺跡では、99.96%がコゴメ石、花崗岩が0.04%である<sup>(3)</sup>。會原遺跡、鶴石鼻遺跡、すぐも山遺跡は備中南部の、大村遺跡は備中北部の様相を示していると思われる。コゴメ石は北部を中心に產出地が存在することから、大村遺跡の様相は產出地との距離が近いことの反映と考えられる。會原遺跡と鶴石鼻遺跡は、同じ児島郡中にあるにもかかわらず、様相が異なっている。すぐも山遺跡にしても両遺跡とは様相が異なっている。備中南部では、遺跡ごとに様相が異なっている可能性が高そうである。石材の差は、石造物を供給した工人の違いを反映していると考えられることから、県南部の村落では複数の工人から石造物を独自に選択していたということになる。これは、生産地と消費地との距離のバランスで生産物が流通していたというだけでなく、生産物を受容する村落それぞれの好みが消費に反映されるほどに県南部の村落の流通構造が発達していたということを示している可能性があると思われる。

#### IV 古墳時代

南側斜面で、土壙墓と箱式石棺墓が検出された。周辺の表土中から、土師器の壺の一部や、5~6世紀の時期に属すると思われる須恵器の小片が出土していることから、それぞれの墓も該期のいずれかに相当するものと思われる。城郭の造成や、中世墓により削平されたものが存在していた可能性はあるものの、周辺から出土する土器はわずかであり、すぐも山上には古墳時代の小規模な墓域が存在していたのだと考えられる。

##### （1）土壙墓1（図75）

調査区中央南側で検出された土壙墓で、南側は崩落して残存していなかった。また、西側は中世墓により上半を削平されている。長さ1.1m以上、幅約1mの長方形の掘り方の中央やや東よりの位置に、長さ0.8m以上、幅約0.3mの箱形木棺の痕跡と推定される墓壙が検出された。北端部には、板石を2個用いた石枕があり、これは箱式石棺にも共通して存在するものである。

副葬品等は全く出土しなかった。

##### （2）箱式石棺（図74）

調査区中央東側で検出された箱式石棺で、南側面は崩落して残存していなかった。長さ約1.4m、幅0.7m以上の長方形の掘り方に、長さ0.2~0.4mの角礫をならべて箱式石棺の壁をつくっている。東端部には、角礫2個を用いた石枕がある。

副葬品等は全く出土しなかった。

##### （3）周辺出土遺物（図76）

土壙墓、箱式石棺の位置する南側斜面で、鉄劍、棒状鉄製品が、東側斜面からは鉄製紡錘車が出土しており、いずれも古墳時代に属する遺物と推定される。

鉄劍の劍身は一部欠損するが、23cmぐらいに復原され、茎部は直角関で現存長3.8cmである。身には鏽がみられる。箱式石棺の南側で出土しており、この石棺にともなうものであった可能性もある。

鉄製紡錘車は、鐵芯の両端を欠損している。鉄製の紡錘車は、後期の住居跡などから出土し、近畿地方では奈良・平安時代の例の方が多い。古墳に副葬される紡錘車は、滑石製のものが多く、鉄製のもの

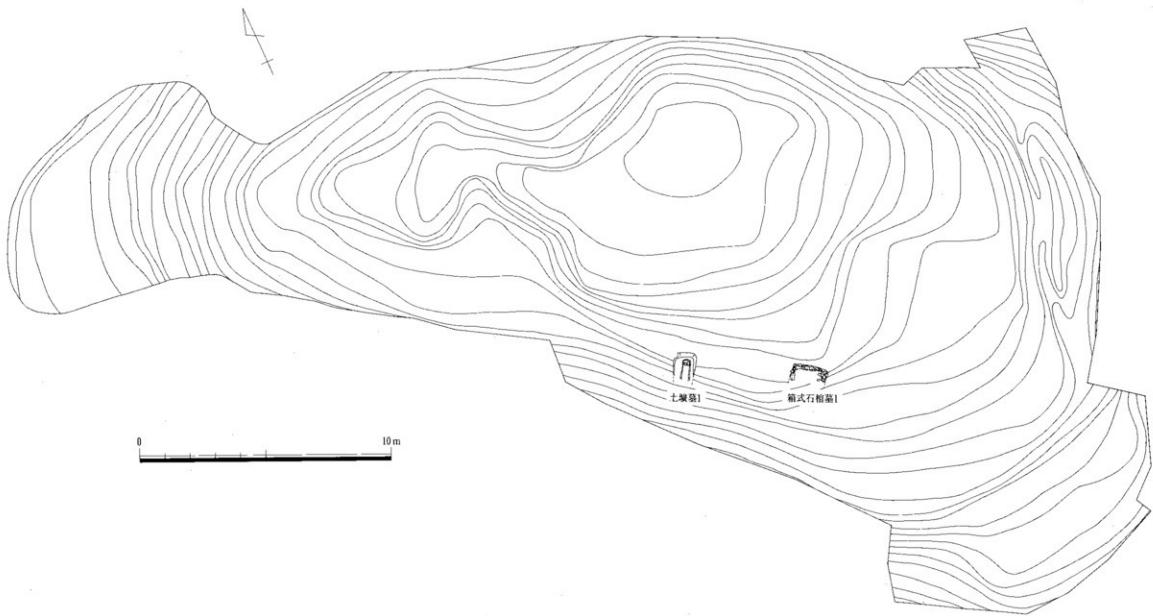


図73 古墳時代遺構配置図

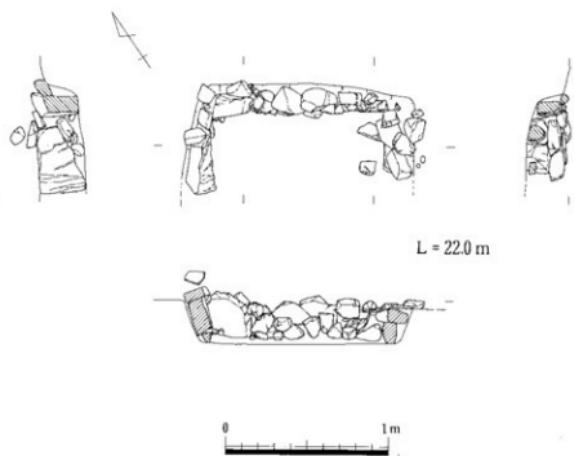


図74 箱式石棺墓実測図

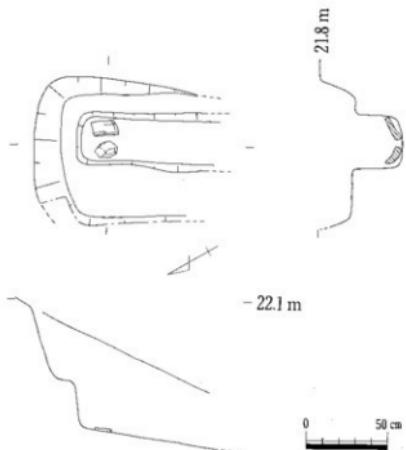


図75 土 墓 1 実 測 図

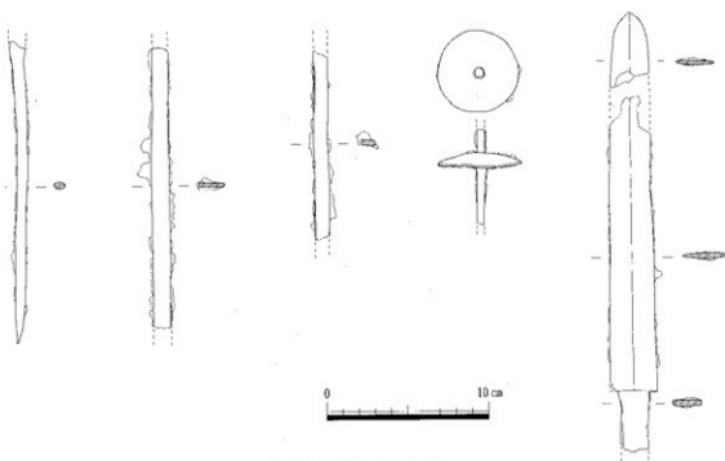


図76 周辺出土物

は奈良県寺口忍海古墳群で出土している6世紀中葉の例が最も古い部類である<sup>(1)</sup>。県内では集落遺跡で出土する例が多く、岡山市津寺遺跡では、6世紀後半の堅穴住居から出土している<sup>(2)</sup>。

棒状鉄製品は3点あるが、両端が欠損している2点は、断面形が長方形であることからヤリガンナの可能性が推定される。下端がとがっているものはヤリガンナ、もしくはヤスの下半と推定される。

鉄製鍊錠車以外の鉄製品は、いずれも前半期古墳の副葬品によくみられるものであり、それらと今回検出された箱式石棺、もしくは土塙墓が組み合わされる可能性がある。すくも山の東側にある丘陵部でも鉄剣、鉄斧、U字形鋸先を副葬した墳丘をほとんど持たない箱式石棺が見つかっている<sup>(3)</sup>。足守地域では、弥生時代後期以来10~20m規模の墳丘を持つ墳丘墓や古墳が多く築かれているが、5世紀後半から後期古墳までの時期の古墳の実態がよくわからない。5世紀中葉ぐらいに墳丘を築けなくなるようない、ある種の規制を受け、この時期の古墳は、今回検出したように埋葬施設のみとなった可能性もあると思われる。

## 注

- (1) 伊藤晃ほか「會原」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」36 1980年
- (2) 福本明「鶴石鼻遺跡」「新修倉敷市史」第一巻 考古 1996年
- (3) 江見正己ほか「大村遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」113 1996年
- (4) 千賀久ほか「寺口忍海古墳群」「新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (5) 亀山行雄ほか「津寺遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997年
- (6) 弘田和司ほか「足守地域の地域史研究」「古代吉備」第12集 1990年

## 第四章 結語

今回の調査では、城郭、中世墓、古墳時代の墓を検出することができ、すくも山には3時期の遺構が複合して存在していることが明らかとなった。とくに、城郭については、これまであまり評価されていなかったことであり、若干その位置づけを検討してみたいと思う。また中世墓については、県南部ではまとまった数の調査例であり、遺物も多く出土していることから、時期的な点を中心に整理してみたいと思う。それとすくも山は、足守庄荘園絵図にも描かれており、絵図中では無名であるが、荘園の中心となる条里水田中に位置しており、その景観を構成する重要な事物である。今回の調査では荘園に関する遺構や遺物は検出されなかつたが、すくも山周辺の現景観と絵図の景観も照合しておきたいと思う。

### すくも山の城郭遺構について

#### 1 すくも山城の構造

今回の調査によって確認された城郭遺構は、頂部の平坦面（郭1）、東側斜面部を削り出して整形した平坦面（郭2）とその東側を圍むための掘切、南東斜面部を削り出して整形した段（郭3）である。郭1は、西側が戦後間もない頃の簡壁によりかなり削平されているが、南北約6.2m、東西16m以上の規模が推定される。北側面と南側面にはすくも山上にある転石を用いた石積が認められるが、いずれも開墾による削平を受けており、遺存状態は良好とはいえない。北側の石積は、地山面に直接角礫を積み、斜面と角礫の間には角礫の小片が充填されており、石垣状の様相を呈している。南側の石積は、検出された石の大きさが小さく不規則であることから、岡山市の伝藤井氏館跡<sup>(1)</sup>や高松城跡<sup>(2)</sup>の発掘調査などで検出された遺構裾部を保護するための捨石状の遺構であるとも考えられるが、北側の石積のように前面に石垣状の石積があり、その内側の栗石であった可能性も推測される。これらの石積からは、近世や現代に属する時期の遺物は出土していない。また、南側山裾部にある畑に伴う石垣と比較すると、石積は転石を加工せずに用いているが、畑の石垣は方形に整形した石材を用いており、なかにはすくも山上にある転石以外の石材も多く認められる。また、石垣は造成した斜面に直接積まれており、裏込めなどは認められないなどの相違点がある。現況の郭1は、頂部最高所から緩やかに傾斜しており、南北の石積付近から傾斜が急になる。郭1を平坦にするには、石積の部分に土止めが必要である。発掘調査によって確認されたものではないが、岡山市の乙子城でも、段造成に伴う土止め状の石列が確認でき、広島県広島市にある銀山城の出城の尾首城<sup>(3)</sup>や、同県豊平町にある「繁ぎの城」に分類される平家ヶ城<sup>(4)</sup>の発掘調査では石垣状の石列が郭に伴う形で検出されている。尾首城と平家ヶ城の例は、本城以外の城にも石積を用いた郭造成がなされていたことを示している。したがって、今回検出された石積は、厳密には時期を決められないものの、畑に伴う石垣とは異なっており、城郭に伴う遺構である可能性も考えられる。

郭2は、東西約6m、南北約8mの規模で、逆L字形の不整形な平面形を呈する。このような平面形になった理由は、南側のやや広い平坦面に整形された部分の基盤土が、削平の比較的容易な花崗岩バイラン土であるものの、北側の狭い部分の基盤土は貫入した岩石で構成されており、岩石部分の掘削は困難であったためと考えられる。しかし、岩石は風化がすんでおり、少し時間をかけければ南側と同じくらいの平坦面を削り出すことは可能であり、この城郭の築造が急造的であったことがうかがわれる。

堀切は、幅が約2mで、最も深いところが郭2の平坦面から約1.2mの深さのところである。断面形は、基本的にV字形であるが、郭2側の斜面の角度は東側と比べ緩やかになっている。この堀切は第三紀末におこった安山岩の貫入部分と重なっており、この貫入部分の安山岩はかなり風化がすんでいるため周囲の地山よりも掘削が容易である。おそらく、この部分は堀切前も周囲より風化がすんで窪み状の地形になっていたことが推測され、そこを堀切に利用したのだと思われる。このようなそれ程大きな堀切でないにもかかわらず地形の特質を利用していることなどからも、この城郭が急造的であったことを示していると思われる。

郭3は南東斜面部を削り出して整形しており、長さ7.2m、幅3.5mの台形の平面形を呈している。郭2からの比高差は2mで、かなり段差がある。郭3の周囲は開墾により削られており、本来はもう少し規模が大きかったのかもしれない。しかし、地形的にみても建物がのるほどの規模ではなかったと思われる。

西側については、頂部周囲が不整形に掘削されており、遺構の遺存状況はよくないが、残存している部分を精査した結果、郭状の遺構や堀切など城郭関連の遺構は存在していないかったと判断される。すぐも山西側の水田地割をみると、現足守川と同じくらいの幅の流路の痕跡が読み取れる（図77）。約800年



図77 すくも山城周囲の景観

前の足守の景観を描いた「足守庄莊園絵図」を見ると、足守川東側の平野部には基盤目状の条里水田が描かれている（図86）。この絵図と現足守の景観とはよく対応していると評価されており、絵図中のすぐも山周辺をみてみると、すぐも山から足守川の間に条里水田が存在している。つまり、すぐも山の西側に認められる旧流路は絵図の描かれた以降に流れていた可能性があり、旧流路の幅からして足守川がある時期この位置に存在していたと思われる。この旧流路が、すぐも山が城郭として利用されていたときに存在していたかどうかについては確証がないが、西側を城郭として整形していなかった理由の1

つとして、天然の堀である足守川がすぐ西側を流れていたということも考えられるのではなかろうか。

とはいって、この城郭の防御機能は東側だけを意識したものであり、それぞれの郭や堀切のありようから、急造的な城郭であったことがうかがわれ、独立した城郭というよりも砦的な城郭であったと考えられる。そして、東側だけを意識していることから、いわゆる天正十年（1582）の「高松城の戦い」前後の対織田勢に対してつくられた城郭であったと推測される。

砦的な城郭の調査が付近で2ヶ所調査されている。1つは忍山城の出城とされる城郭で、もう1つは「高松城の戦い」時の毛利方の陣城である甫崎天神山城である。

忍山城出城<sup>(5)</sup>は、岡山市山上に所在し、県道建設に伴って調査されたもので、最大幅で15mぐらいしかないような狭い尾根上を整形し、全長は約180mである。城郭の両端は堀切により画されており、調査された北側の堀切は断面V字形で、幅が3.42m、深さが4.02mもある。城郭内部には堀切に伴う土壘と地山を削り出した簡単な郭状の段が4段認められる。本城となる忍山城はこの城郭の北側約500mに位置する連郭式山城で、全長450mの規模をもち、多数の郭と堀切によって構成されている。建物基壇の認められる郭もあり、宇喜多直家の臣が城主をつとめていることや、この城をめぐって毛利方と宇喜多方が大規模な戦闘をおこなったことからも、戦略上重要な拠点防衛のための城郭であったことがうかがわれる<sup>(6)</sup>。忍山城出城はこの忍山城の出城と考えられているが、一方で忍山城を攻撃するための陣城という見方<sup>(7)</sup>もある。いずれにせよ、この城郭は砦的な機能を有していた城郭と考えられよう。

甫崎天神山城<sup>(8)</sup>は岡山市津寺に所在し、山陽自動車道建設に伴い発掘調査がおこなわれたものである。標高42mの東西にのびる丘陵尾根上に立地しており、全長300mで、郭が9面形成されている。この城郭は毛利輝元が対織田勢に対して築いたもので、いわゆる「高松城の戦い」に使用された陣城の1つとされる。城郭の存続期間は2年程と考えられている。城郭内部からは掘立柱建物と柵列が検出されており、城郭の東端部には堀切があるものの、城郭の背後となる西側には堀切は認められない。一般的な中世の城郭と比較すると防御機能の低さが指摘できる。

忍山城出城は、城郭の両端を堀切で画するものの、内部の郭については簡単な構造となっている。甫崎天神山城は、郭は明瞭でしっかりしているものの、堀切を用いた防御施設が完全には施されていない。甫崎天神山城には、毛利方の布陣の状況から通常の陣城よりもより多くの兵数が配属されていたと推定されており、郭の数や規模が大きいのもそれに起因したことと思われる。ただ、防御機能の主要素を占める堀切が完全に城郭を画すように施されていないのは、この城郭が出撃するための拠点であったためと考えられる。忍山城出城の様相は甫崎天神山城とは逆で、郭構造が簡単なことは、収容兵数がそれ程でなかったことを示しており、堀切で画されていることは防御することにもある程度比重がおかれていた城郭であったからと考えられる。したがって忍山城出城は、この城郭での戦闘をも意識した防御的機能を備えた出城であり、甫崎天神山城は城郭外での戦闘を中心に想定された陣城として、機能的に両者は分類してとらえることができるよう思われる。

それでは、そもそも山城についてみてみると、全長30mと城郭全体の規模が大変小さいことや、郭の数も少ないとなどは、収容兵数の少なかったことを示している。そして、堀切が郭の背後に存在していないことなどは、防御に対する意識も低かったと思われるが、郭の整形が地形、地質に影響される程脆弱なことは急造の城郭であったことを示しているとも考えられ、堀切にしても防御正面となる東側だけにしかおこなえなかったと考えることもできる。いずれにせよも山城は、忍山城出城と甫崎天神山城で機能に即して省力化された点を合成した極めて簡略化した城郭構造であったことができる。

## 2 すくも山城に関する文献史料について

すくも山城に関すると考えられる文献は、羽柴秀吉の書状と軍記物のなかにいくつか認めることができる。全てを網羅したわけではないが、管見に上がったものを概観しておきたい。

①は秀吉が児島郡の年寄中に宛てた書状で、日付から「高松城攻め」の際に出されたものである。この書状の中に「すくも塚の城」がでてきており、秀吉側の軍勢により同城が落とされたことが記されている。他に宮路山城（かはやの城）や鶴城（かもの城）も落としたことも記している。

②は秀吉が「高松城攻め」前後の戦いの様子を記した書状で、「すくも城」を落としたことに触れている。

③は秀吉が伊予水軍能島村上氏に宛てた書状で、「高松城の戦い」の前に「すくも塚」城を取り囲んだことを記している。

④は織田信長の伝記である『信長公記』の一部で、「高松城攻め」前後の戦いで秀吉により落城された城の1つとして「すくも塚の城」が記されている。

⑤は秀吉の伝記を中心とした軍記物語の『豊臣記』で、秀吉勢が「スクモ塚」城を取り囲み落城させたことを記している。①～④の史料はいずれも「高松城の戦い」の直前におこなわれた戦いのうち、最も激戦となった「冠山城の戦い」の主要な城郭である冠山城については触れられていない。『萩藩閥譜録』の中にある毛利方にに関する史料では、すくも山城に触れたものはほとんど見当たらないが、そのかわりに冠山城のことが記されている。⑤は両城のことが記されている数少ない史料といえる。

『中国兵乱記』（史料⑥）、『備前軍記』、『陰徳太平記』などの当地域の軍記物語についても、冠山城のことが記されており、すくも山城のことについては触れられていない。このことから秀吉の書状に記されている「すくも塚の城」は、冠山城の別名であるとされてきた。江戸時代末から明治時代にかけてかかれた当地域の地誌である『備中誌』（史料⑦）でもこの考えに近く、すくも山（宿面塚）は毛利方の城郭とはせず、むしろ秀吉方の陣跡としている。これは、冠山城から高松城へ落ちのびた在地領主の1人である樋屋七郎兵衛らが、途中の「巣喰山」で秀吉方の荒木平太夫、堀尾茂助らと会戦したこと記す『中国兵乱記』によったものである。「巣喰山」とはすくも山のことをさしていると考えられ、冠山城から高松城に落ちのびる途中に位置することからも矛盾していないと思われる。しかし、『中国兵乱記』の記述からだけでは「巣喰山」がどちらの陣営に属していたのかは判然としない。⑥は⑤とならんで、すくも山（城）が冠山城とは別に存在していたことを示唆する史料と考えておきたい。

以上のように「高松城の戦い」の前におこなわれた「冠山城の戦い」で代表される城郭を、だいたい織田方の史料ではすくも山城とし、毛利方や地元の軍記物語では冠山城にしている傾向がある。このことは、同じ城郭の別名ということを示しているとも考えられるが、若干とはいえ両城がでてくる史料もあることから別々の城郭とも考えられる。一方、足守庄全体の小字名を調べた結果によると<sup>(1)</sup>、冠山城やその周辺には「すくも山」やそれに類する小字名はなく、現すくも山とその周辺にのみ存在していることが確認されている。これと、今回の発掘調査によりすくも山が城郭として利用されていたことが明らかとなつたことから、各文献上にみられる「すくも塚の城」、「すくも城」などは、冠山城ではなく、すくも山上の城郭を示している可能性の方が高いと思われる。ただ、すくも山城は冠山城と比べて規模的にも小さく、位置的にも冠山城の南の出城であったと考えることが妥当であり、おそらく「冠山城の戦い」の際に冠山城と同時に落城したと思われる。

すくも山城関係史料(一)

① 羽柴秀吉書簡

先度屬之事申達候早速馳走候て相越今祝着候、此若儀すくも塙の城乗崩、一人

も不残討果候、再かはやの城、水之手迄賣詰昨日落居候、同昨日からの城端城乘破悉く放火候、然る上は何の城共、可取姿候はば、總之事今式百束馳走にて相

越候は可為祝着候為念申達候草々

秀吉 花押

五月三日  
兒島之内郡牛哥中

尚以てなはの事今式百束の分早々に馳走可為祝着候已上

(岡山市の文化財) 第1集

② 羽柴秀吉披露状写 浅野家文書

(添表書)  
「信孝様信雄様江俊秀吉様披露状之写」

去八日之御書、今日十八日午刻謹而

(拝見仕候祝カ)

(中略)

(光秀)

一 明智め構逆心、上様京都二御座候を、夜対同前二いたし、御版をめされ候、我等在京をいたし於在之ハ、小者一人にて成共、御座所へ走り入、腹十文字ニ切申候は、本意之上にて御座候、其更編中同へ罷立、かわや城、すくも城賄崩、悉剣首候て、重而高松と申城ハ名城にて、三方ふけを抱、其上権ひろく、たけたち不申付而、力貢成不申、可致水資と筑前見及、右高松取巻、堤をつかせ、水はや土居半分二あかり、城送甚仕候ニ付て、西國悉催毛利一類後巻ニ罷出、五万計にて、筑前二三万にて取巻候

③ 羽柴秀吉書簡

尚以、被對公儀可有御忠節之由、被相定候上著、私之意趣不入事候、其方次第

誓固船守之儀可申付候、先度彼相越候使者此方へ可給候、内證之儀可申入候、以上

其方御覺悟、此比相遠之義、御同夢次郎被申越付而承届候、内證之趣、國分寺具被相達候、尤無余儀候、菟角御忠節之事者、兩鴨各別ニ可在之候条、私之意趣更不入儀候間、最由之運、於此方聊不可有相違候、國分寺如被見及趣、此表敵城之中へわり入、かわやか城、すくも塙兩城取巻、其上小早川幸山候得共、毎口此方足輕申付、十町十五町之内迄難令放火候、一人も不罷出候条、落臣不可有程候、委無國分寺可被申入候、恐、謹言

委無國分寺可被申入候、恐、謹言

卯月十九日

羽 筑

村上藩部頭殿 御宿所

秀吉 御判

(萩藩開闢録) 卷三ノ2

④ 「信長公記」

中國像中へ羽柴筑前守相働き、すくも塙の城あら( )と取寄り、攻落し、數多討捕り、並あつたが城へ又取懸け候處、降参申し罷退き、高松の城へ一所に捕籠るなり。

(山崎)

岡本次郎右衛門尉殿

斎藤玄蕃助殿

(大日本古文書)

## すくも山城関係史料(二)

### ⑤ 「豐臣記」

天正十年三月十五日。秀吉卿發兵。爲毛利輝元退治出張備中國。廿一日勦軍勢刻冠山ノ要害不慮失火。諸兵延付取之。城主ハ清水長左衛門。一味林三郎左衛門。島越左兵衛。松田左衛門。星八往生傳中半國守護。室々シテ加之。以此競圖スクモ塙多城。怖秀吉威風忽ニ降參ス。然シテ從四月十二日押寄高松難謀之。

(『続群書類』第二十輯上)

### ⑥ 「中國兵乱記」

秀吉卿傳中冠山城攻策屋七郎兵衛の事

同年三月十七日、織田御三丸は龍土山へ構ニ障城入城、羽柴秀吉は四坂門前妙現山の峰々に構ニ陣城、金床山に家々の旗を立並べ冠山城を遠巻仕、信長卿より爲ニ兩使、杉原七郎左衛門、仙石權兵衛を被レ遣、口上を、神主堀家揚部城内へ被レ著越一候。城主福屋七郎兵衛事、武勇達人と被レ及ニ聞召一たり。

今度屬・信長・次丸秀吉と申談、西國の先鋒御頼被レ成由被レ仰下一候。七郎兵衛御請に、信長卿任・御意・度集なれども、數年間・毛利家・信長卿と御境目

に在城仕、輝元・隆景貌意不、後度に、今度背・毛利家・御身方仕候へば、失

忠義・侯爵・毛利家に鄙有遂・防戦、其上にて切腹可レ仕由御返答申上候へば、三月二十日寅の刻未猶懸の不、引に、三井谷南のうね日指山の峰に榮ニ陣城一、北の平・扇子谷山の峰、一國山の峰、朱福寺山へ人數を備ヘ、寺坂口、反山筒坂口へ押寄、三方より責撃り、三方の棚に付、乾燥へ入り、導橋を引被らんとす。城内も待向ふ敵なれば少もレ疾、將軍義昭公御旗隊元卿の赤旗城中に押立、矢倉狭間より鐵炮を打懸る事如ニ雨降、上方勢あぐみ漂ふ間に、死亡手負數を不レ知。朱福寺口は、秀吉卿御旗本杉原七郎左衛門先手にて、御敷賛給ふ。城兵

も手賦り能く、福屋與七郎・同孫市郎・佐野和泉・庄九郎・守屋新之丞遂一防戰一、籠城堅固に相抱處に、三月二十四日夜、伊賀忍者城中へ火を付ければ、鐵炮の薬蔵に火移り騒動なし、寺口の堀を飛越、秀吉卿軍勢城内へ亂入る、伊賀門。島越左兵衛・松田左衛門・星八往生傳中半國守護。室々シテ加之。以此競圖スク

虎之助は城兵武井路監と相戦ひ、將監を討捕、杉原七郎左衛門・内山九藏・美濃部與義次・城秋山新四郎と追合、秋山を討捕り、上勢城内へ入亂る。伊賀甲賀の者所々に火を付候時、福屋七郎兵衛申は、敵以ニ數萬騎、口々を相押候へば、不レ過時到來也。名某と不レ離一手に退船はゞ、秀吉卿の旗本へ切入、敵の大將不レ討捕一は我々可ニ枕並一と堅約し、奥噴山迄切退ける。此所に荒木平太夫・堀尾茂助有・備、城兵を取説んとす。福屋七郎兵衛・松田左衛門・三村孫太郎大勢切て入相戦ふ。城大將福屋七郎兵衛父子・同孫市郎・島越左兵衛・林三郎左衛門・岩田内膳・奥噴山に局の内に劍豪の亦旗押立て、身方を待居ける。

首二つ三つ不持參一はなし。福屋父子其外も五ヶ所七ヶ所手負ひ、備自由不レ成に付、福屋孫市郎を御本陣へ遣し、御注進申上候。

(『吉備群書集成』)

### ⑦ 「備中誌」

#### 宿直塚

下足守の七の罪と云所に昔より何人と云事知れず天平勝實以前の人かともいふ說われ共其證なれば盛成事を知らず今土人呼でても山と云され共其地畑方帳二ハ宿直塚と載たり天正十年秀吉公冠山城攻の時堀尾茂助・荒木平太夫等此頂に陣すといふ今に頂に壇あり

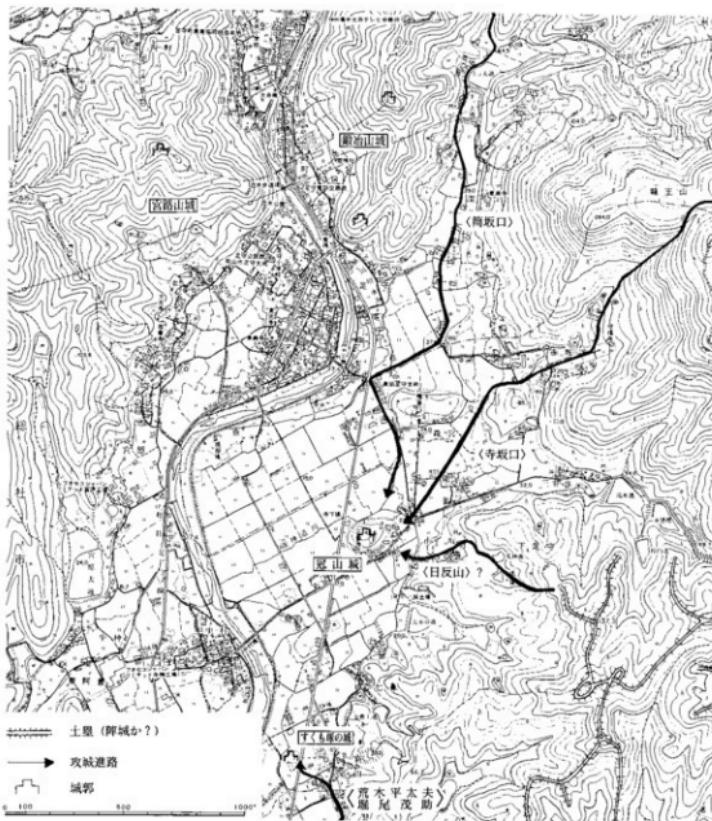


図78 『中国兵乱記』による冠山城攻城ルート略図

それではなぜ本城である冠山城ではなく、出城であるすくも山城が織田方の史料にはでてくるのだろうか。史料が少ないため明確なことは分からぬが、戦闘の様子を詳しく描いている『中国兵乱記』などの軍記物語の内容を参考にすると、冠山城の攻撃は主に宇喜多勢によっておこなわれている（図78）。冠山城の攻城軍のうち、秀吉勢のみで構成されているのは、南から攻める荒木平太夫、堀尾茂助の軍勢である。荒木平太夫は荒木重堅のこと、のちに因幡国若桜城主で二万石を領し、堀尾茂助は堀尾吉晴のこと、のちに松江藩二十四万石の初代藩主となった。いずれも当時秀吉の側近の立場である。これらの軍勢が、冠山城の南の出城であるすくも山城を落としたと推測され、『中国兵乱記』にでている「巣喰山」周辺の戦いは、このことを反映していると考えられる。つまり、すくも山城は秀吉の側近が落と

したたため、実際は小さな城郭であるにもかかわらず、「冠山城の戦い」に代表される敵方の城郭として秀吉は意識していた可能性が推測される。

### 3まとめ

今回の調査により、すくも山には城郭が築かれていたことが明らかとなった。ただし、全長60mほどの小さな独立丘陵であるため郭も3つしかなく、堀切も幅が約2mのものがあるだけで、かなり小規模な城郭であった。しかも丘陵全体を城郭として利用するのではなく、西半部についてはほとんど手を加えていなかった。現況の水田地割やレベル差などから、すくも山の西側に接して足守川の旧流路が流れている痕跡が認められる。この流路が城郭の西側を防御する天然の堀の役割をはたしていた可能性はあるものの、郭が西側に全くないことなどは、この城郭が東側からの攻撃のみを想定していたためと思われる。

つまり、極めて簡単な郭構成や造成のありようは、対織田勢のために急造的に築かれた城郭であり、城郭の規模や位置関係から約1km北にある冠山城の南の出城であったと考えられる。

ただし、各文献にでている「すくも塹の城」、「すくも城」は、このすくも山城を指していると考えられる。しかし、それらの文献の示している戦いは実質的には「冠山城の戦い」であり、この戦いの中で秀吉の側近が落とした城郭がすくも山城であったため秀吉側の記録にはこの城郭名が残ったのだと思う。

このような本城と出城を混同するような状況は、当地域が織田、毛利の大名勢力間に挟まれた「境目」という地域的特質に起因していた可能性があるように思われる。山本浩樹氏が指摘するように<sup>(10)</sup>、この地域における天正十年（1582）



図79 日畠城略測図

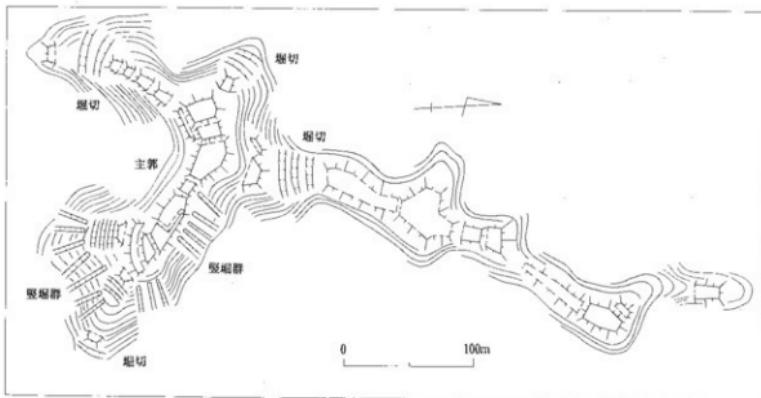


図80 宮路山城略測図

の「高松城の戦い」前後の戦いは、それまでの各小地域間の領有権を争うような地域紛争でなく、「大名相互の生き残りを賭けた最終決戦」に連なる戦いの1つに位置付けられる。したがって、高松城を中心とした対織田勢に対するための「境目」の城とは、毛利、織田の大名主力の激突に備えてのものであり、それぞれの城郭は各小地域のための防衛拠点としての性格のものから織田主力の勢力を少しでも削るために捨て駒的、もしくは出撃を主目的とした陣城的な性格に変貌させられたものと考えられる。

例えば「境目」の城の1つとされる倉敷市の日幡城は(図79)、足守川が全面にあるとはいえ、基本的には全長80mほどの独立丘陵を3~4段の段造成によって城郭化しているもので、頂部と付近の水田との比高差は8~9mほどしかない。西側の舌状にのびる丘陵部までも城郭に含めるかどうかにもよるが、現況で認められる城郭の規模は東西70m、南北50mとかなり小規模なものである。西側背後の用水路が本来は堀切であったかもしれないが、水田面からの比高差からみてもそれほど防御機能が備わっているともみられず、構造的には出城、もしくは陣城に類する城郭であると思われる。

一方、冠山城落城に相前後して落城した「境目」の城である宮路山城は、標高162.5mの丘陵上にあり、連郭式の山城で、城域も南北約500mもある(図80)。主郭に至る尾根筋には2ないし3重の堀切があり、南から東にかけての斜面には堅掘が幾つも掘られ、畝状堅掘群の様相を呈している。付近の城郭で堅掘が認められるのは、冠山城のほかに鐵治山城がある<sup>(1)</sup>。鐵治山城は、「冠山城の戦い」では織田方の城となっているが、「中國兵乱記」によると、宇喜多直家が織田方につく天正8年(1580年)以前は毛利方の境目の城の1つとして記されている。また、毛利元就が尼子氏の拠点である月山富田城を攻めたときの本陣である勝山城には、壮大な畝状堅掘群が認められる。県南部の宇喜多氏に関する城郭には、ほとんど堅掘が認められないことから、これら3城に認められる堅掘は、天正8年以前に毛利方によっておこなわれた改修の結果である可能性がある。ともあれ宮路山城は、規模的にみても、在地領主層の地域支配のための拠点的な城郭に相当する内容を具备している。

この2城を比較してもわかるように、本来は本城と出城といった関係で重層的に存在していた城郭をそれぞれ個別に抽出し、織田主力に対する最前線の砦として再構成したのが「境目」の城の本質であったのである。したがって、すくも山城は「境目」という特殊な地域の状況のために、小規模な出城であるにもかかわらず文献上に名を残したのだと考えられる。

このように、すくも山城は、戦国期における「境目」地域の特質と矛盾を解明する重要な遺跡であるといえる。

### 注

- (1) 根本修「西大寺一宮育苗公園遺跡」「日本考古学年報」30 1974年
- (2) 出宮徳尚ほか『備中高松城跡公園発掘調査概報』岡山市教育委員会 1976年
- (3) 青山透ほか『尾首城発掘調査報告』広島県教育委員会 1984年
- (4) 久下実ほか『平家ヶ城跡発掘調査報告』『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』 1997年
- (5) 井上弘「忍山城出城跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」72 1989年
- (6) 出宮徳尚「戦国城郭の構成試論」「小室栄一教授古希記念論文集」 1983年
- (7) 池田誠「美作国における中世城郭の一考察」「中世城郭研究」第8号 1994年
- (8) 宇垣匡雅ほか「甫崎天神山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」89 1994年
- (9) 草原孝典「足守庄(足守幼稚園)関連遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会 1994年
- (10) 山本浩樹「戦国大名領国「境目」地域における合戦と民衆」「年報中世史研究」第19号 1994年
- (11) 岡山市教育委員会「築造400年記念 宇喜多直家城征り跡の探訪マップ」1997年

## すくも山の中世墓について

今回の調査で、すくも山の頂上付近や、斜面部で33基もの中世墓が検出された。すくも山は城郭の構築や、煙の造成などによりかなり削平を受けていると考えられ、斜面部や堀切の埋土からは備前焼の破片などが多数出土している。なかには火葬骨の入ったままの状態の骨蔵器もあった。おそらく、本来は今回出土した数量よりもかなり多くの骨蔵器が存在していたと思われる。また、頂上東側は西側よりも比高差が2m近くもあり、中世墓もその部分にはほとんど認められないことから、頂上付近の墓もほとんど削平されたものと考えられる。したがってすくも山上には、比較的まとまった数の中世墓が存在していたと推測される。ここでは、この中世墓群を少しでも理解するために、出土した遺物から時期幅を検討し、墓の切り合い関係や、構造等の違いを比較して、墓群の構成ができる限り整理してみたいと思う。

### 1 すくも山出土の中世墓関連の遺物

今回出土した遺物は土器が大半で、漆製品も3点ある。そのうち土器は、備前焼、亀山焼、瀬戸、土師器、瓦質土器である。備前焼は壺、甕、すり鉢で、亀山焼は甕で、瀬戸は1点だけであるが瓶子の破片で、土師器は羽釜形、小皿、椀である。小皿、椀以外の器種は骨蔵器として用いられたと考えられる。

備前焼のうちで最も古いものは墓4の骨蔵器で、口縁端部が円形の玉環状になり還元炎焼成であることから、間壁編年<sup>(1)</sup>のⅢ期に相当する。他の備前焼については、大体間壁編年のⅣ期の範疇に含まれ若干V期のものも認められる。土師器で最も古いものは、墓12埋土から出土したもので、非常に退化した高台の付く椀である。この椀の時期には無高台の椀が出現しており、土塼墓に副葬されていた無高台の椀と時期的には平行関係にあると思われる。

### 2 中世後半の土器編年との比較

次に、県下における中世後半の土器の変遷を概観し、すくも山中世墓群の時期幅を確認しておきたい。すくも山中世墓群では、高台付き椀消失直前の時期のものが最も古いことから上限を14世紀前半とし、下限については備前焼から17世紀と大まかに設定しておく。この時期幅におさまり、一定の時期幅を示していると考えられる土器群を抽出し並べてみると、I～VII期の7期にわけてとらえることができそうである（図81）。

I期は、高台部分が非常に退化した土師質土器の椀と、無高台の椀が組み合わされることに特徴付けられ、植木遺跡No.67土塼<sup>(2)</sup>や古開遺跡土塼4<sup>(3)</sup>などが指標になる。無高台の椀については、中央付近が窪むものとそうでないものがある。そしてこの椀については、備中国側の遺跡ではよく出土しているが、備前国側では該期の遺跡の調査例が少ないと見られるが、明確な出土例はあまりない。この期の年代は、高台付椀の存在から14世紀前半と考えられる。

II期は、高台付の土師質土器椀のなくなる時期で、小皿も口径の大小により2群に分かれる傾向が看取される。植木遺跡No.6鍛冶炉<sup>(4)</sup>や津寺遺跡土器溝5<sup>(5)</sup>などが指標となる。備前焼については、一般的な集落遺跡からの出土例は多くないものの、共伴した例から間壁編年<sup>(6)</sup>のⅢ期に平行すると思われる。

III期は、土師質土器椀の様相については資料的な制約からよくわからないが、羽釜形態や滑石製の鍋を模した形態の土師質土器が認められるようになる。津寺遺跡の溝9、11、12、14の土器群<sup>(7)</sup>が指標

I期	備前焼	亀山焼		備人品 (瓦質土器、陶磁器)
II期				
III期 15c				  
IV期	  	 	 	 
V期 16c	  	 	 	 
VI期	  	 	 	 
VII期	  	 	 	 
VIII期 17c	  	 	 	 

図81 中世後半土器・陶磁器分類

となる。出土する備前焼は間壁編年<sup>(8)</sup>のIV期前半に平行し、この期以降一般的な集落でも備前焼は普遍的に出土するようになる。

IV期は、土師質土器の小皿に幾つかのバリエーションが認められるようになる。まず形態的には、平底形態のものと丸底形態のものがあり、後者については底部外面に切り離し痕がないものが多い。前者については、ヘラ切りのものと糸切りのものがある。県南部の土師質土器小皿は、古代末以降底部外面はヘラ切りしているものが主体であったが、この期ぐらいから糸切りをおこなう小皿がある程度認められるようになる。椀についての資料が少ないため明確ではないが、椀が遅くまで認められる備中と、そうでない備前とでは様相が異なっているようである<sup>(9)</sup>。この他土師質土器鍋には内耳をもつものも認められる。また南都産の瓦質土器も一定量搬入されている。百間川米田遺跡井戸134、141<sup>(10)</sup>などが指標となり、同遺跡の溝123、124、125<sup>(11)</sup>などでも該期の土器が多く出土している。出土する備前焼は間壁編年<sup>(12)</sup>のIV期後半に該当する。

V期は、土師質土器椀の口径が大きくなり、形態的には皿との区別がつかない。そして、土師質土器の煮沸具については、様々な形態のものが認められるようになり、なかには近世の焙烙につながる形態のものも認められる。羽釜形態のものは、III期と比べ口縁端部が肥厚するようになる。園井土井遺跡No.24溝、No.29不整形土壙出土の土器が指標となり、同遺跡No.66、67、68、69建物付近から出土した土器群<sup>(13)</sup>のなかにも該期に属する土器が多く認められる。出土する備前焼は間壁編年<sup>(14)</sup>のIV期後半に平行するが、すり鉢の口縁端部の上方への拡張度合いなどはより顕著となっている。

VI期は、間壁編年<sup>(15)</sup>のIV期からV期の備前焼が伴う。百間川米田（当麻）遺跡井戸2の土器群が指標となる。この期に属すると思われる西脇橋本遺跡の土師質土器小皿の法量の傾向をみると、大きさは大小の2群に分けられるが、両群の中

間的な法量のものもある程度かたまる傾向が認められ<sup>(16)</sup>、小皿の法量分化が進展してきている。

VII期は、間壁編年<sup>(17)</sup>のV期の備前焼が伴う。小皿にはヘラ切りと糸切りの2者があり、法量についてもかなり分化する傾向がある。この期は、備前周匝茶臼山城大型竪穴遺構の土器群<sup>(18)</sup>が指標となる。

14世紀前半から15世紀前半にかけて存在する無高台の土師質土器碗について

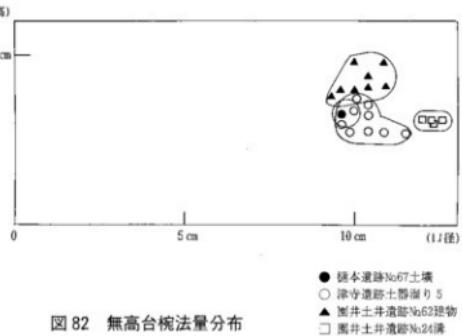


図82 無高台椀法量分布

では、もう少し詳しく時期的な変遷をみてみる。この椀については、高台付椀と共に伴する土器群としない土器群がある。高台付椀と共に伴する土器群は鰐本遺跡No.67土壙出土の土器群<sup>(19)</sup>と古開遺跡土壙4<sup>(20)</sup>で、前者の無高台の椀の法量は口径9.6cm、器高3.3cmで、後者は器高が3.7~4.0cmでやや高い（1段階）。これらの資料は、今のところ無高台の椀の最も古い様相を示す土器群といえる。これに続く土器群は、高台付椀の伴わなくなるものである。津寺遺跡の土器窯跡5や、同遺跡の土壙47、48出土の土器群<sup>(21)</sup>で、法量は、口径9.6~11.6cm、器高2.7~3.9cmの中におさまる（2段階）。高台付椀が伴う椀の資料が少ないため大まかな比較となるが、器高が3.0cm以下のものが加わることが2段階の椀の特徴

といえそうである（図82）。

1、2段階とした椀の他に、やや器高の高い椀の一群が、園井土井遺跡No.62建物<sup>(2)</sup>や本谷遺跡祭祀状遺構<sup>(3)</sup>などで出土しており、法量は口径9~11cm、器高3.6~5.0cmの中におさまる（図82）。器高の低い1、2段階の土器群と、これらの土器群との関係は、共伴関係を示す良好な土器群がないため不明な点が多いが、1、2段階の椀の形態と比べると、口縁部が内湾気味で外端部に稜が認められる

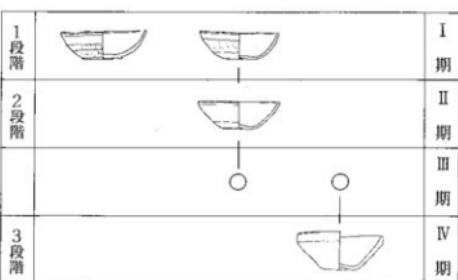


図83 檢査遷図

という特徴が看取される。これは15世紀後半の皿に認められる特徴と共通することから、この椀は1、2段階より後出する段階（3段階）と考えられる。ただし、1段階から2段階の変化が漸移的であるのと比べ、2段階と3段階は断続的であり、その間には器高の低い椀と高い椀が共存する段階が存在することが予想される（図83）。

この時期の土器編年がすんでいる草戸千軒遺跡の成果<sup>(4)</sup>と比較すると、1、2段階の無高台の椀は草戸千軒遺跡の椀Aに相当し、この時期は草戸II期に平行するものと思われる。3段階の椀は草戸千軒遺跡の椀Cに相当すると思われるが、草戸千軒遺跡の場合、草戸II期後半には椀Cが伴っている。当地域では良好な土器群がないが、おそらく、II段階とIII段階の間に予想される段階が草戸II期後半の時期に平行するものと思われる。

つまり無高台の椀は、法量の縮小傾向と形態などから、4段階に分けることができ、I段階はI期、2段階はII期、2段階と3段階の間の段階はIII期、3段階はIV期に対応させることができる（図83）。3段階以降の椀は、園井土井遺跡No.24溝出土土器群で示されるように、口径が大きくなり、形態的には皿となる。これらの椀の実年代については、高台付椀や深い椀の伴わない2段階の土器群と同じ土器群が、尾道市淨土寺阿弥陀堂の龜腹から出土しており、これは阿弥陀堂の造営された貞和元年（1345）の時期の土器群とされている<sup>(5)</sup>。このことから、2段階、すなわちII期は14世紀の中葉前後の年代が与えられる。

さて、以上の年代観からすくも山遺跡の中世墓群の時期的な変遷をみてみる。すくも山遺跡の中世墓のうち、墓12では無高台の土師質土器椀が出土しており、その法量や埋土中で高台付椀が出土していることから、I期に属すると考えられる。最も古い骨蔵器は墓4のもので、これは土壤墓を切っている。他の土器はIII期からV期に属し、IV期以降のものは墓23の骨蔵器と斜面から出土した備前焼が数点だけである。つまり、すくも山中世墓群は14世紀前半ぐらいから造墓活動が開始され、当初は土壤墓が主な埋葬形態であったが、14世紀末ぐらいからは骨蔵器が多く認められるようになり、15世紀に最も多くの墓が形成され、16世紀には造墓活動が終焉していき、近世墓へとは続かないようである。すくも山城が先に推測したように、天正10年（1582）前後の戦いに用いられた城砦であるとすると、規模的にも長く用いられたような城とは考えられず、その構築も天正10年頃と考えられる。そうすると、城の構築以前に造墓活動は縮小、もしくは終焉していたことになる。県下の中世墓地では16世紀から17世紀にかけて

造墓活動に断続がある例や、埋葬形態が変化する例<sup>(26)</sup>があることから、すくも山中世墓群の造墓活動の終焉の背景も、造墓者の事情や城の構築というような個別的な理由ではなく、それまでの墓制に変化が生じたことに起因している可能性があるものと推測される。

### 3 すくも山中世墓群の構成

すくも山中世墓群で検出された墓には、土壙墓、土器棺墓、骨蔵器とがある。それぞれの墓について特徴を整理し、この墓地の性格を簡単にまとめてみたい。

#### (1) 土壙墓

土壙墓は、長方形、長楕円形、円形、隅丸方形の掘り方をしているものがある。墓32と墓33以外の土壙墓はだいたい長さ1m、幅1mの中におさまる。これらの平面形と断面形を重ねると(図84)、長さと幅が同じで、深さが0.5m以上のものと、長さと幅が異なり、深さが0.5mより浅くなるという2つのタイプに分けられる。前者については土器棺を用いた座棺である墓6と重なることから、座葬である可能性がある。つまり、土壙墓には伸展葬あるいは仰臥、横臥屈葬のものと、座葬のものがあり、当墓群中では前者の数の方が多い。また、墓8と墓27の関係のように座葬が切っている例があり、両者に時期差があることも推測される。大村遺跡の土壙墓でも座葬と推定される深いタイプの土壙墓が、後出することが指摘されている<sup>(27)</sup>。大村遺跡の場合、座葬への変化は17世紀前後とされているが、当遺跡では座葬と思われる土壙墓から遺物を出土したものがな

いたため明確な時期はわからない。しかし当遺跡の場合、近世の遺物がほとんど出土していないことと、他の中世墓と混在していることから、一応この中世墓群の中の埋葬形態の1つであったと考えられる。

また、土壙墓には埋土中に角礫を幾つか含むものと、含まないものがある。この角礫は本来は墓壙上面に並べていたものと思われ、遺骸が腐朽していく過程で墓壙内に落ち込んだものと推定される。このような角礫の有無が当初からの違いであったのか、残存度の違いであるのかは不明であるが、今回検出された土壙墓は、ほとんどが城郭構築の際に削平を免れた斜面部に位置しており、結果として角礫が残存していた可能性も高いようにも思われる。それと、墓5、7、8のように、部分的に切り合っているながらも軸方向を合わせたものがある。このことは、後に掘られた墓が前に掘られた墓の軸方向を意識しているということであり、土壙墓上に何らかの標示物が存在していたことを示している。また、土壙墓が切り合うほど近接してつくられた背景には、墓地の中にさらに小単位を区画するような墓域が存在していたことも推測される。

土壙墓には副葬品が出土しないものが大半で、墓8、21から漆製品、墓12、20から土師質土器椀、墓21で土師質土器小皿が出土しているだけである。

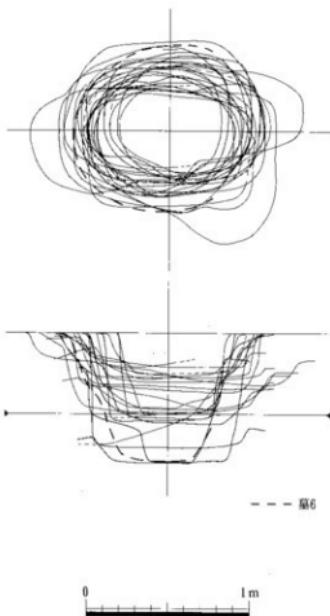


図84 土壙墓平面、断面比較

土壙墓と骨蔵器の切り合い関係については、墓7や、墓23のように骨蔵器に切られている土壙墓がいくつもある。逆に骨蔵器を削平した土壙墓というのは認められない。これらのこととは、土壙墓の方が古く、骨蔵器の方が新しいという傾向を示している。このことは、当墓地の土壙墓は、14世紀前半ぐらいからつくられ、14世紀末以降は火葬骨を入れた骨蔵器に埋葬形態の主体が変化していったと考えられる。ただし、座葬の土器棺である墓6が存在していることから、座葬と推定される土壙墓は、藏骨器と並行して用いられた可能性がある。

### (2) 骨蔵器・土器棺墓

骨蔵器については、伝世していたものである可能性はあるが、14世紀初頭のものが1点認められる。備前焼の壺を用いた墓4である。この壺の中には、少なくとも3体分の人骨が認められる。墓4以降の骨蔵器は容量も小さく、基本的に1体分と考えられ、墓4のような複数個体の納骨は14世紀末以降の埋葬に用いられる骨蔵器の過渡的様相であろうか。

骨蔵器の種類は備前焼の壺が最も多く、ほかに土師質や瓦質の羽釜形土器、亀山焼の壺などがある。遺構として明確にはとらえられなかつたが、火葬骨が塊状にまとまる箇所があり、曾原遺跡<sup>(30)</sup>で推定された木箱などの腐朽しやすい材料でできた骨蔵器も存在していたと思われる。骨蔵器のなかには底部中央付近に焼成後穿孔したものもある。穿孔しているものとしていないものとの比率は備前焼で1:4ぐらいである。底部付近を穿孔している藏骨器は曾原遺跡や大村遺跡などでも出土している。曾原遺跡では備前焼で1:5<sup>(30)</sup>、大村遺跡では備前焼で1:5、亀山焼で1:7<sup>(30)</sup>である。いずれも穿孔していないものが穿孔しているものよりもかなり多い傾向にある。一方で、五輪塔2基と備前焼、亀山焼、土師質土器の骨蔵器が6個体出土している玉野市梶ヶ原遺跡では、5個体にまで焼成後の穿孔が認められる<sup>(31)</sup>。これらのことから藏骨器における穿孔の有無の比率は、1:1とはならずかなり偏った比率になる。ただ、それぞれの骨蔵器には穿孔の有無以外の、例えば骨蔵器の大きさなどの差はとくに認められない。そうすると、穿孔の有無の違いは、性別や年齢などの差を反映している可能性は低そうで、死因であるとか、出自などの違いに関係する可能性が推測される。同じく墓6のように火葬にされないで大きな壺に埋葬されたものも、遺存している人骨が女性であり、しかも病理痕の可能性が認められる(附章2参照)ことから、出自や死因に起因する理由により他と埋葬形態が異なっていたことも推測される。

土壙墓や骨蔵器、土器棺墓以外にも斜面堆積状に薄く火葬骨の分布している箇所があり、散骨のような埋葬形態も存在していたと思われる。南側斜面で検出した五輪塔の基部は、方形の基壇状の段を盛土で築き、その上に火葬骨を置き、さらにその上に板石を一枚置いた上に立てられていた。このような埋葬形態、あるいは供養の形態が一般的であったかどうかはわからない。しかし、組み合わせ式の五輪塔や宝篋印塔の破片が頂部や斜面部から多く出土しており、それらは骨蔵器の上にたてられただけではなく、散骨された後、その上に供養のために造立されたものもあった可能性も推定される<sup>(32)</sup>。

### (3) 墓地のなかの単位構成(図85)

現在のすくも山は、城郭や果樹園の造成により、かなり旧状が改変されている。そのため、今回検出された中世墓についても、残存状態に偏りがあることが予想され、そこから当時の墓群の分布を完全に復元することは困難である。しかし、検出された中世墓は、ある程度まとまって分布する傾向が看取さ

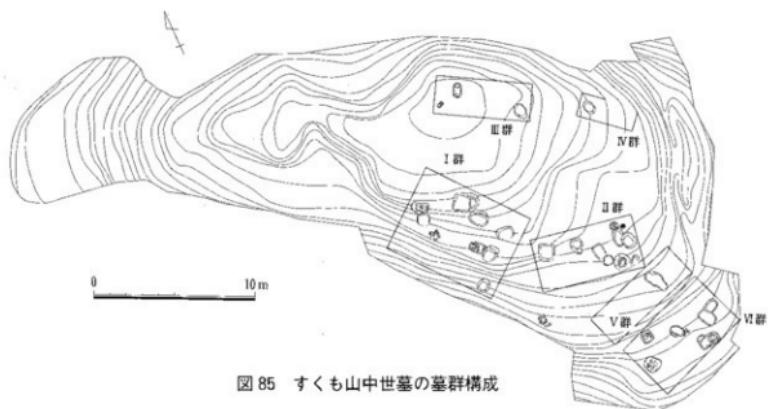


図 85 すくも山中世墓の墓群構成

れた。そこで、一応その傾向を整理してみたいと思う。

中世墓の分布は、I～VIの6群に大別できそうである。I群は墓10、12、13、14、15、16、18、19、25、32である。II群は墓3、4、5、6、7、8、9、26、27、33である。III群は墓2、11、31である。IV群は墓1である。V群は墓17である。VI群は墓21、22、23、24、28、29、30である。北側斜面のIII群とIV群は、山の傾斜が急なことと、城郭の郭を造成する際に墓の大半が削平されたために、残存している墓の数は少なくなっている。V群はII群にくつめてもよいが、墓17の南側で土器が多く認められたことや、東側を堀切によって削平されていることを考慮して、1つの群と考えた。

このうち、墓の残りがいいI群、II群、VI群の墓群の内容を比較する。まず、土壙墓については、これらの3群にはいずれも存在しており、しかも座棺と推定したものも存在する。骨蔵器についてもI群で2基、II群で2基、VI群で1基存在する。土器棺については、II群とVI群でそれ一基ずつ存在する。土器棺の有無に違いがあるものの、この3群の墓群は、だいたい同じような構成をしている。北側斜面で出土した土器の中には、墓6の土器棺と同じ大きさの備前焼の甕の破片や、骨蔵器に用いたと思われる備前焼、土師器片が出土しており、III群、IV群の墓群も本来は同じ内容を具備していたと推測される。南側斜面からも多く備前焼や土師器の破片が出土しており、より多くの墓群、もしくは、それぞれの墓群内には、今回出土した数よりも多くの骨蔵器が存在していたと考えられる。

つまり、すくも山上に形成された中世墓地には、その内部にいくつかの小単位の墓域が設定されており、それぞれの墓域間には顕著な格差は認められない。また、各墓群周辺で出土している石造物についても、大差のない大きさをしており、突出したものは認められない。そして、それぞれの墓域内では切り合い関係にあるものや、出土した土器の時期幅などから継続的な墓域であったことがうかがわれる。このようなすくも山遺跡の中世墓の様相は、当時の共同墓地の一般的な構造を示している事例といえようである。<sup>(3)</sup>

#### (4) すくも山遺跡の中世墓地の性格

以上から、すくも山中世墓群の変遷を復元してみると、まず14世紀前半から墓がつくられるようになるが、埋葬形式は土壙墓が主体である。卓越した埋葬施設や副葬品をもつものが存在せず、しかもある程度の数が存在していたようであり、当初から共同墓地であったと考えられる。そして14世紀末から藏骨器が多くなり、15世紀になると骨蔵器の数は増大し、墓地の形成もこの時期が最も活発におこなわれたと考えられる。しかし、16世紀になると造墓活動は急速に縮小していく。

すくも山遺跡で検出された14世紀前半の土壙墓については、12~13世紀の沖積地の集落周辺で検出される土壙墓と形態的によく似ている。すくも山の北側に位置する延寿寺跡で検出された12世紀末の土壙墓は上面に石組が存在し、土師質土器の碗と小皿を副葬している<sup>(31)</sup>。石組が簡素化されているものの形状や副葬品のようすは、すくも山遺跡の土壙墓とよく似ている。すくも山の4.5km南に位置する中世の大規模な集落遺跡である岡山市の津寺遺跡でも多くの土壙墓が検出されており、なかには上面に石積みや、副葬品に土師質土器をもつものがある<sup>(32)</sup>。12世紀から13世紀にかけての集落では、すくも山遺跡で検出された土壙墓と似た形状の土壙墓が普遍的につくられていたと考えられる。そして、土壙墓からその時期を示す遺物が出土することは多いとはいえないため厳密ではないが、中世集落を面的に広く調査した津寺遺跡土筆山調査区、丸田調査区の調査<sup>(33)</sup>をみると、14世紀中葉以降と考えられる土壙墓はほとんど認められない。しかしながら、集落は14世紀以降も存続しており、溝で区画された屋敷地も形成されているなど、集落の規模は拡大しているといえる。広範囲な中世集落の調査例である百間川米田遺跡の様相をみてみると、12世紀後半から集落の形成が認められ、15世紀の後半まで多くの遺構が形成される<sup>(34)</sup>。そして、建物配置の分析から複数の屋敷地が形成されていたと考えられている。津寺遺跡や百間川米田遺跡のように、沖積地に存在している集落の中には、すくも山遺跡の中世墓地のような集落外にある共同墓地が形成される時期も引き続き集落が営まれ、さらに規模を拡大している傾向にあるものも存在しているといえる。

一方、14世紀中葉ぐらいから廃絶する集落もある。津寺遺跡の北側約1.5kmの位置にある三手遺跡は、岡山県教育委員会の山陽自動車道建設に伴う発掘調査<sup>(35)</sup>と、岡山市教育委員会の不燃ごみの最終処分場建設に伴う発掘調査<sup>(36)</sup>により中世集落の形成された微高地全体の様相が明らかとなった。それらの成果によると、三手遺跡は12世紀後半から13世紀末まで存続しており、櫛立柱建物、土壙、土壙墓などが多数検出されている。ところが、14世紀以降は微高地上に遺構は形成されなくなる。また、津寺遺跡の南側約0.5kmの位置にある津寺（加茂小）遺跡では、12世紀から13世紀にかけての柱穴や土壙墓が比較的多数検出されるものの、14世紀以降の遺構は微高地上に認められず、15世紀には微高地上も水田化されている。つまり、津寺遺跡が拡大していく一方で、周辺の集落には廃絶しているものがあるということである。もう少し周辺遺跡の調査がすまないと明確なことはいえないものの、これは14世紀以降津寺遺跡への集村化がすんだということを示している可能性がある。

集村化した集落の内部には、幾つかの屋敷地が形成されている。津寺遺跡や百間川米田遺跡を見る限り、屋敷地間には若干の差は認められるものの、卓越した屋敷地といったものは認められないし、求心的な配列で屋敷地が存在しているというわけでもなさそうである。このような集落の景観は、すくも山中世墓地のような14世紀から15世紀に形成された共同墓地の景観とも対応してくれる。

中世の集落内部につくられた土壙墓については、それが共同墓地のように群集した形態で検出されないことから、屋敷地維持のための精神的支柱となる人物の墓である「屋敷墓」と考えられている<sup>(40)</sup>。

当地域において「屋敷墓」がいつ頃から出現するのかは、まだよくわからないが、沖積地へ集落が活発に形成される12、13世紀の集落には確實に存在している。沖積地の集落遺跡の増加は、沖積地の開発が細かな集落単位で盛んにおこなわれたことを示しており、その開発は屋敷地を中心とした土地の占有化の方向を促進したと思われる。それが「屋敷墓」が盛んにつくられるようになった契機と考えられる<sup>(1)</sup>。そして14世紀以降幾つかの屋敷地を内包した大規模な集落が成立してくるのは、そういった自立化した集落が結合したことを示しており、より集落自身の自立化の度合いが増大したのだと思われる。それとともに、津寺遺跡にみられるように、集落内部では「屋敷墓」が顯著でなくなってくる<sup>(2)</sup>。それは、「屋敷墓」の存在により土地を占有する理由を表す必要がなくなったことを示しており、集落の自立化がある程度まで達成された結果と評価される。こうした経緯で出現した集落や墓地は、畿内やその周辺で出現する農民の自治的な共同体である惣村やその村の共同墓地である惣墓とよく似ている。

したがって、そもそも山遺跡・曾原遺跡・槌ヶ原遺跡、などの14,15世紀に出現する共同墓地の分布は、それに対応する惣村的な集落が広く成立していたことを示している可能性が推測される。

#### 注

- (1) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼ノート」1『倉敷考古館研究集報』1 1966年  
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼ノート」2『倉敷考古館研究集報』2 1966年  
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼ノート」3『倉敷考古館研究集報』5 1968年
- (2) 高橋知功ほか「桶本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 1987年
- (3) 高橋進一・武田恭彰「古聞遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』6 1996年
- (4) 注2
- (5) 正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
- (6) 注1
- (7) 注5
- (8) 注1
- (9) 綱本善光「中世土器について」『本谷遺跡』笠岡市教育委員会 1987年
- (10) 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年
- (11) 注10
- (12) 注1
- (13) 間田博ほか「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 1988年
- (14) 注1
- (15) 注1
- (16) 扇崎由「西祖橋本遺跡」岡山市教育委員会 1994年
- (17) 注1
- (18) 松本和男「備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書」吉井町教育委員会 1990年
- (19) 注2
- (20) 注3
- (21) 注9
- (22) 注13

- (23) 注9
- (24) 鈴木康之「土師質土器の編年と年代」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』I 広島県草戸千軒町  
遺跡発掘調査研究所編 1993年
- (25) 篠原芳秀「尾道市淨土寺所蔵の土師質土器」『草戸千軒』No.114草戸千軒町遺跡発掘調査研究所  
1982年
- (26) 草原孝典、河田健司「吉野口遺跡」岡山市教育委員会 1997年
- (27) 江見正己ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113 1996年
- (28) 伊藤晃ほか「曾原」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』36 1980年
- (29) 注28
- (30) 注27
- (31) 藤田憲司「岡山県玉野市樋ヶ原出土の中世骨蔵器」『倉敷考古館研究集報』9 1974年
- (32) 土井卓治『石塔の民俗』岩崎美術社 1972年
- 水藤真「中世の葬送、墓制一石塔を造立することー」吉川弘文館 1991年
- (33) 野谷山人・横井野人『清水前谷史蹟調査報告』横井郷土史研究會 1937年
- 間壁忠彦・間壁茂子「奈良時代以降の遺跡」『新修倉敷市史』第1卷考古 1996年
- (34) 出宮徳尚ほか「足守庄莊園遺構緊急調査延寿寺跡第二次発掘調査概報」岡山市教育委員会  
1979年
- (35) 注5
- (36) 注5
- (37) 注10
- (38) 注5
- (39) 草原孝典、河田健司「三手（処分場）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平成7）  
年度 1997年
- (40) 原口正三「大阪府高槻市宮田遺跡再論」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社  
1982年
- (41) 横田正徳「屋敷墓試論」『中世土器の基礎研究』III 1991年
- (42) 同様に14世紀以降、屋敷墓が認められず、均質な屋敷地が形成されている遺跡として、山陽町の  
馬屋遺跡の調査例がある。14世紀において屋敷墓が形成されなくなるということは、県南部の中  
世集落の1つの類型となる可能性が推測される。
- 横山定ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 1995年

#### 参考文献

- 永原慶二「下剋上の時代」「日本の歴史」10中央公論社 1965年
- 根木修・出宮徳尚「中世・近世」「岡山県の考古学」吉川弘文館 1987年

## すくも山遺跡周辺の景観と「備中国足守庄絵図」の景観

「備中国足守庄絵図」（以下絵図と記す）

は、裏書によると、嘉応元年（1169）に案主散位賀陽氏・下司散位藤原氏・国使田所橘氏・案主散位弓削氏・院の御使左辨官史生紀氏らが立会い作成されている。そして、同庄一円が後白河法皇から神護寺へ元暦元年（1184）に寄進されたことから同図も神護寺へ移管されたものと考えられている。絵図は淡彩で、南から同庄を鳥瞰した景観が描かれており（図86）、その構図と現在の地形、事物は非常によく対応する。絵図の景観の現地比定については、多くの考察がなされている<sup>(1)</sup>。ここではそれらを参考にしながら、すくも山の位置する莊城南半から西側にかけての景観と絵図に描かれた景観とを照合してみたい（図87）。

まず、庄域内を南北に貫く足守川（絵図では大井川と記載）の流路について検討してみる。足守川が庄域内へ流れ込んで東へ方向を変える地点は、絵図では北西部の山稜部の裾付近を流れているように描かれている。現在の足守川は、足守藩の陣屋町がこの地点に形成されていることから、絵図とは異なり東へ大きく蛇行している。この地点における現景観と絵図の景観との相違は江戸時代における陣屋町の造成に起因していると推定される。陣屋町を過ぎて東へ蛇行している地点（図87-A）は、水田畦畔の形状からさらに西よりに旧流路が存在していた。絵図において足守川が東へ方向を変える地点（図86-a）をみると、北西部の山稜部と接する位置に描かれている。絵図の構図から、絵図作成時の足守川は現在の流路位置よりも西よりに認められる旧流路であった可能性が推測される。

絵図のa地点の南には条里地割を表していると思われる平行線が描かれている（図86-b地点）。現景観でもこの地点（図87-B地点）には、条里地割が認められる。北側の山稜部には扇状地の地形に沿って水田畦畔が放射状になっているものの、足守川両岸に分布する条里地割の方向と同じ地割が認められる。したがって絵図に描かれたb地点の地割は、現景観のB地点の条里地割に対応させることができる。

b地点の南側には、足守川が東へ蛇行しており、その西岸には条里地割の描かれていない空白部（図86-c地点）と、庄城西端を南北に通る道が描かれている。現景観でも足守川が東へ蛇行する部分の西



図86 足守庄園絵図（トレース）

岸は、条里地割が認められない。そして、水田畦畔の形状から幾つかの流路の痕跡を識別することができる。現足守川の流路を含めると、西から流路Ⅰ～Ⅴの5本認めることができる。流路Ⅰは、あまり蛇行していない流路で、全体の形が最もよく残っている。流路Ⅱは、西岸のみが認められるが、形状から、現足守川の僅かな流路変更に相当するものと思われる。流路Ⅲは現足守川である。流路Ⅳ、Ⅴは東岸のみが認められるが、流路Ⅱと同様に現足守川の僅かな流路変更に相当するものと思われる。ただ、流路Ⅳ、Ⅴは「すくも山」に接しており、絵図においてその部分をみると、足守川と「すくも山」の間には条里地割が描かれている。この絵図の構図を見る限り、流路Ⅲ、Ⅳは絵図作成時以降の流路である可能性が推定される。流路Ⅰ、Ⅱは絵図の空白部（図86-c 地点）に相当する。絵図においてこの部分に水田地割が描かれていないことは、絵図作成時には、まだ氾濫原であったため水田化されずにいたのだと思われる。

絵図の西端には道が描かれており、その道は庄城南西端部から北へ僅かに条理地割と方向を違えながら北上し、足守川を渡り（図86-d 地点）、c 地点を通ってやや東へ曲りながらもう一度足守川を渡る（図86-e 地点）ている。流路Ⅰは、この道の方向性や、現足守川と重なる地点（図87-D, E 地点）とがよく整合する。流路Ⅰの両岸は部分的に現在の道路にも利用されており、さらに東岸の一部は旧村境でもある。陣屋町周辺については旧地形の改変が著しいため、流路Ⅰの追及は難しいが、絵図との照合から、流路Ⅰのどちらかの岸が、絵図に描かれた道であった可能性は高いように思われる。とくにこの流路の東岸は、現在でも畦道として利用されている。

絵図において、庄城の南西部の境を画する事物は、条里水田中に黒点で描かれた四至榜示の1つである「生石御庄堀堤田一条六丁作人永宗坪 未申榜示」（図86-f 地点）で示されている。おそらく水田中に描かれた黒点の位置に榜示が設定されていたものと思われる。この地点は、絵図に示された位置あたりの水田中に「庄境」の字名が認められる地点（図87-F 地点）に比定されている。この水田の位置は、足守川两岸に分布する条里地割の里境にも相当しており、庄城を画する位置にふさわしい水田と考えてもよいように思われる。では、「庄境」の字名をもつ水田のライン、すなわち里境の南北ラインを庄城と仮定して絵図の景観と比較してみたい。足守庄の西限についてば、一般的には旧村境ラインが比定されている。このラインは北からB 地点の条里地割の東側を通って、足守川の中心部を通り、流路Ⅰの東岸と一部交わっているが、「庄境」の水田上は通らない。つまり、旧村境のラインでは絵図に描かれている b 地点の条里水田と足守川の一部が含まれなくなり、比定された「生石御庄堀堤田一条六丁作人永宗坪 未申榜示」の水田の位置とも重ならない。ところが、条里の里境ラインを庄城西限としてみると、b 地点の条里水田が里境より東側になり庄城に含まれることになる。また、庄城の西側を南北に通る道に比定した流路Ⅰが里境より西側に出ることと、この道が絵図の範囲から出ることとは構図的にも矛盾なく対応しており、足守川にしても絵図の構図と非常に近い範囲が含まれることになる。そして、絵図において描かれた北西部と南西部の榜示を結んだライン、すなわち庄城の西限を示すラインが、基盤目状の線で表現された条里地割と平行しているのも、平野部における庄城西限が条里地割であったことを示していると考えることもできよう。また、足守庄の西側にある阿曾郷に隣接する服部郷については、田畠面積と所有者名が書き込まれた郷図の写しが現存している。それによると、郷域は流路と条里地割で画されている。足守庄から服部郷にかけては同じ方向の条里地割が分布しており、それぞれの境は条里地割を介して接しているということになる。したがって、足守庄と阿曾郷の境も条里地割であった可能性は十分あると思われる。以上のことから、絵図に描かれた時点の庄城西限は、少なくとも条里地割



図87 足守庄南半の景観

の分布する平野部においては、条里の里境ラインであった可能性が高いと思われる。そして、旧村境が現在のように移動した理由についてはよくわからないが、足守川は、あれば川として有名であり、この足守川の流路が頻繁に変更したことによる起因する可能性が考えられる。

この他、絵図には庄域の東側の山稜部の据を地形に即して蛇行しながら南北に通る道が描かれている（図86-g 地点）。この道は現在でも使われている道（図87-G 地点）に比定される。地形の細かな形態は絵図においてはかなりデフォルメされてはいるが、山部と谷部の起伏の数については現景観の道と絵図の道とはよく対応している。この道は現在では地元の生活道路の一部となっているが、現在の庄域中心部を南北に貫く国道429号線ができる以前は、この道が庄域内の南北を繋ぐメイン道路であった。

さて以上のように、「すくも山」周辺の絵図に描かれた事物と、現在の景観とを対応させてみると、非常によく一致することがわかる。莊園当時の景観が極めて良好に保存されているといえる。そして、「すくも山」はこの絵図の構図を考察する上で、重要な位置にあるといえる。

#### 注

（1）永山卯三郎『吉備郡史』吉備郡教育会 1937年

岡山大学教育学部社会科研究室編『陣屋町の研究』 1960年

出宮徳尚「備中足守莊園遺構の発掘調査」「中世の考古学－遺跡発掘の新資料」名著出版  
1983年

青山宏夫・山陰加春夫「足守庄絵図現地調査報告」「莊園絵図の資料学および解説に関する総合的研究」文部省科学研究費研究成果報告書 滋賀大学教育学部 1985年

鈴木景二「足守庄絵図および関係史料」「足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告」  
岡山市教育委員会 1994年

#### 参考文献

久野修義「岡山の莊園絵図」「図説岡山県の歴史」河出書房新社 1990年

## 附章1　すくも山遺跡出土人骨

Human Skeletal Remains from the Sukumoyama Site

岡山大学 文学部  
Mark HUDSON

すくも山遺跡では、14世紀の前半から16世紀まで利用された中世の共同墓地が1997年に発掘された。33基の墓が発見され、そのうち17基に人骨が残っていた。墓6以外の人骨は全て破片のみ。又、土壤のせいと思われるが、ヒトの歯は殆ど残っていなかった。

The Sukumoyama site is a medieval cemetery in Okayama City used from the early 14th until the 16th centuries. During excavation in 1997, a total of 33 burials were identified of which 17 contained skeletal material. There were four burial types (1) direct pit inhumations; (2) cremations placed in ceramic urns; (3) cremations without urns; and (4) jar burials where the corpse was not cremated. The oldest graves in the cemetery are all direct inhumations, ceramic urns not appearing until the end of the 14th century. Only one jar burial was found (Burial 6), but the site produced a number of burial jar sherds suggesting that there were originally other examples of this type of grave.

In or slightly before 1582, a fort was built on the site destroying parts of the earlier cemetery and, with the exception of Burial 6, the inhumations were all fragmentary. Burials were oriented with the head to the north, leaving the lower body especially vulnerable to disturbance on the southern slope of the site. Perhaps because of soil conditions, preserved teeth are extremely rare.

墓1 (Burial 1) : 成人の左脛骨の破片が1点。

Pit inhumation containing one fragment of the proximal end of an adult left tibia (Fig.14).

墓2 (Burial 2) : 2つの骨蔵器から 火葬された体肢骨と頭蓋骨の破片が少数。

Two ceramic urn burials (2A&2B) produced a few, small cremated cranial and postcranial fragments (Figs.15-16). Postcranial elements are mostly from the upper body.

墓4 (Burial 4) : 少数の火葬と不火葬骨の破片が骨蔵器から出土。部位からみると、火葬骨は体肢と頭蓋骨、不火葬骨は頭蓋骨のみ。この墓から出土された18本の歯は、全てが乳歯及び不完全永久歯である。歯の形成段階からみて、これらは2人以上の子供のものである。7才位の子供が1人と12才位の子供が1人という可能性が高いが、他の組み合わせも考えられる。

Mixed cremated and noncremated bones from a ceramic urn (Fig.17). Cremated bones comprise postcranial and a few cranial elements, but the noncremated bones are only cranial. This burial produced 18 teeth: left M<sup>1</sup>, M<sup>2</sup> and M<sup>3</sup>, left upper canine, right M<sup>1</sup>, right upper first and second deciduous molars, 2 upper premolars, an upper molar fragment, a lower right canine, right M<sub>1</sub> and M<sub>2</sub>, left M<sub>1</sub> and M<sub>2</sub>, a lower left first or second premolar, a deciduous lower left molar, and a cremated premolar. None of the permanent teeth are fully formed and all can be assigned to a subadult dentition. When compared with dental development standards, however, these teeth are not consistent with the dentition of a

single individual. While various combinations are possible—and theoretically there could be more than 2 individuals present—the presence of one child of around 7 years and another of around 12 years is the most parsimonious way to account for the teeth.

墓5 (Burial 5) : 成人の体肢骨と頭蓋骨の破片が少數。火葬された骨も少しまじっている。

Pit inhumation consisting of a few adult cranial and postcranial fragments (Fig.20). Some cremated bones are mixed in with this burial.

墓6 (Burial 6) : 川中論文参考。

Jar burial of an adult female (Figs.21-23). The well preserved skeleton from this burial is described in detail in a separate chapter in this report.

墓7 (Burial 7) : 右と左大腿骨の中央部分、およびその他の体肢骨の小さい破片。8本の歯から11才—15才ぐらいの年齢を推定できる。

Pit inhumation (Fig.26). Mid-shaft sections of right and left femora and other very small post-cranial fragments. Eight teeth were found in the burial: left and right P<sub>1</sub>, right P<sup>1</sup> and P<sup>2</sup>, left M<sub>1</sub>, right M<sup>1</sup> and M<sup>2</sup>, and an unerupted right M<sup>3</sup> crown. The teeth are extremely brittle and all erupted teeth are damaged post-mortem making precise ageing difficult, but this individual was probably aged between approximately 11 and 15 years. The right M<sup>1</sup> has a carious cavity on the mesial interproximal surface.

墓8 (Burial 8) : 成人の頭蓋・体幹・体肢骨の破片が少數。女性の可能性が高い。

Cranial and postcranial fragments from a pit inhumation (Fig.27). Postcranial elements include the head of a left femur joined with the acetabulum socket from the left innominate.

The acetabulum is fused indicating an adult. Though cranial elements number only about 10 small fragments, they include the left mastoid process and the external occipital protuberance, both of which suggest the individual is female.

墓10 (Burial 10) : 火葬された骨片が多数。

Many small cremated fragments from a ceramic urn (Figs.29-30). The left M<sup>1</sup> is preserved in a fragment of the maxilla.

墓13 (Burial 13) : 頭蓋骨の破片が少數。

Pit inhumation with a few cranial fragments (Fig.34).

墓14 (Burial 14) : 火葬された骨片が多数。骨の大きさから成人の埋葬である。

Many small cremated fragments from a ceramic urn (Figs.35-36). From the general size of the bones, the burial appears to be of an adult.

墓15 (Burial 15) : 上腕骨(?)の小さい破片が1点。

Pit inhumation containing one small, long bone fragment, probably from a humerus (Fig.37).

墓16 (Burial 16) : 頭蓋骨の破片と右大腿骨の頭部。

Pit inhumation with a few cranial fragments, the head of a right femur and part of the acetabulum socket from the right innominate (Fig.38).

墓18 (Burial 18) : 幼児の頭蓋骨の小さい破片が少数。

Pit inhumation containing a few small fragments of an infant cranium (Fig.40).

墓19 (Burial 19) : 火葬と不火葬の骨片が10点程。

Pit burial with approximately 10 cremated and non-cremated fragments (Fig.41).

墓20 (Burial 20) : 頭蓋の左側頭・頭頂骨および後頭と右頭頂骨の部分。体幹・体肢骨は上半身の数破片のみ。頭蓋骨は女性の可能性が高い。この頭蓋骨に古病理学的所見が見られ、特に右頭頂骨に直径2センチ位のクレーター状の陥凹が残っている。同じ様な陥凹は幾つか他に部分的に見られるが、その多くは殆ど残っていない頭蓋骨の右側にあったと思われる。この様な部分的な資料から骨病変を診断するのは非常に難しい。

Pit inhumation (Figs.42-43). Fragmentary cranium includes the left temporal and parietal bones and sections of the occipital and right parietal. Postcranial elements comprise only small fragments of the right scapula, left clavicle, a radius and a humerus. From the nuchal crest and left mastoid process, the skull is probably female. A crater depression, approximately 2 cm in diameter, is present on the right parietal. The depression is ringed by slight scarring of the bone surface. Small sections of several other similar lesions are present but these are all fragmentary and it is difficult to estimate the extent of the pathology. Diagnosis is also difficult, but a treponemal infection would seem to be ruled out by the early 14th century date of the burial which is some two centuries before the accepted arrival of venereal syphilis in Japan in the early 16th century (cf. Suzuki 1984: 3-4). According to Suzuki (1984: 3) there is no evidence of endemic tropical treponemal infections such as yaws in Japan.

墓21 (Burial 21) : 火葬された骨変が少数。

Pit burial with a few small cremated fragments (Fig.44).

墓24 (Burial 24) : 骨蔵器から最大7cmの火葬された小骨片が44点。

Ceramic urn containing 44 small fragments of cremated bone no larger than 7 cm long (Fig.47).

#### Reference :

Suzuki, Takao 1984. *Palaeopathological and Palaeoepidemiological Study of Osseous Syphilis in Skulls of the Edo Period*. Tokyo University Museum Bulletin 23.

## 附章 2 すくも山遺跡墓 6 出土中世女性人骨

岡山理科大学 総合情報学部

川 中 健 二

岡山市足守に所在するすくも山遺跡は、岡山市教育委員会によって、1997年5月から8月にかけて発掘調査が実施された。この遺跡の中世（15世紀後半）のものと判断される層から、備前焼の大甕に納められた人骨1体分が発見された。人骨の出土状況から見て、遺体は大甕の中に蹲るような形で納められたものと考えられる。保存状態は比較的よく、多くの骨が残存しているが、甕に直接触れていた部分は欠損している。

計測の結果、この人骨が「長頭、低顎、扁平な鼻根部、反歯」といった中世人に特徴的な形質の組み合わせをそなえていることが明らかになった。

### 保存状態

**頭蓋骨：**頭蓋骨は、下顎骨も含め、非常によく保存されている。欠損しているのは、左上顎骨の上顎体後縁部、左眼窓の内側壁と下壁の内側よりの部分、左右の茎状突起および左下顎角のゴニオンを含む部分だけである。その他、眉間の正中より左の部分に $8\text{ mm} \times 6\text{ mm}$ 程度の長円形の穴が開口している。この穴が形成された原因は不明である。

上顎の歯の中でよく保存されているのは、左の第1切歯、第1・2小白歯、第1・3大臼歯、右の大歯、第1～3大臼歯である。左の大歯、第2大臼歯、右の第1・2切歯、および第1・2小白歯は、歯冠部が失われ、歯根部だけが保存されている。また、左第2切歯は欠落し、その歯槽の閉鎖はまだ始まっていない。

下顎の歯の中でよく保存されているのは左右の第1・2切歯、左右の大歯、および右の第1・2小白歯だけである。左の第1小白歯は歯冠部が失われ歯根部だけが残っている。下顎で欠損している歯の歯槽の多くは完全に閉鎖しており、左に不完全に閉鎖している歯槽が1個認められる。

歯冠部まで残されている歯のうち、左右の上顎第2・3大臼歯では、咬耗の程度は非常に弱い。これらの歯は、生前には下顎の歯と咬合することなく、したがって機能していなかったものと考えることができる。しかし、それ以外の歯の咬耗はかなりの程度にまで進行している。その中で、左の第1切歯の歯冠部では、舌側面の全域にわたって象牙質が露出するほどに咬耗が進行していることが認められる。下顎の残存している歯の咬合面では、いずれの歯でも、象牙質が露出している。

上顎の左第1大臼歯の歯冠部の後半は失われており、それは虫歯によるものであろう。左上顎第2大臼歯の歯冠部の欠失も、虫歯によるのかもしれない。右上顎第2大臼歯では歯頸部に虫歯が認められ、歯根の部分にかけて大きく抉られるように欠損している。また、右上顎骨の歯槽突起には、第2切歯と第2小白歯の歯槽部に直径約1cmの穴が開口し、この歯の歯根が見えるようになっている。とくに、第2切歯の部分では、この穴が歯槽突起を貫通している。

上記の上顎の歯のうちの歯根部だけが残存し歯冠部が失われている歯について、それぞれの歯冠部が失われた時期や原因を特定することは、必ずしも容易ではない。しかし、これらの歯と対応していた下

頸の歯の咬耗がかなりの程度に進行していることから、生前には多くの歯の歯冠部が存在し、機能していたものと思われる。つまり、歯冠部の欠損は、死後の埋葬中に何らかの原因で欠損したものと判断してよいだろう。

**胸骨**：椎骨では、頸椎7、胸椎12、腰椎5の全部が残存しており、全体によく保存されているが、その一部は椎体だけあるいは一部の突起だけになっている。仙骨は上端の一部だけが残っている。肋骨は、左右とも12本が残っており、やはり保存状態はよいが、その一部は折れている。胸骨は、柄、体とともに、完全に保存されている。

多くの椎骨の椎体前縁には、上下ともに、骨増殖が認められる。第3～7頸椎と第2～3腰椎の椎体では、縁嘴を形成しているといってよい程度に増殖している。とくに下位の頸椎では、椎体の上下面が変形しており、この変形は骨増殖にともなうものと思われる。

**上肢骨**：肩甲骨は、左右とも、関節窩、鳥口突起、肩峰を含む上外側部が残されているが、下方の半分は欠損している。鎖骨も、左右ともよく保存されており、左鎖骨の胸骨端に近い上面の一部に欠損が認められるだけである。自由上肢骨の保存状態も全体によい。欠損している部分は次の通りである：左上肢骨の大結節、外側上顆とその下方に続く上腕骨小頭の外側部、右上腕骨の骨頭の後面の一部、内側上顆とその下方に続く上腕骨滑車の内側面、左右の橈骨の関節環状面の一部、左橈骨の遠位端に近い骨体の一部、右橈骨の遠位端、左右の尺骨遠位端、右尺骨の肘頭と滑車切痕を含む近位端。

**下肢骨**：左右の寛骨はともに一部が欠損しているが、恥骨結合部を含む恥骨はよく保存されており、この人骨の性の判別を可能にしている。寛骨の欠損部は次の通りである：左寛骨の腸骨翼の後端と坐骨結節の大部分、右寛骨の腸骨翼の上半、坐骨結節の一部、寛骨臼の後ろの腸骨体の一部。

左右の大腿骨は、いずれも骨体は非常によく保存されているが、遠近両端の一部が欠損している。大腿骨の欠損部は次の通りである：左大腿骨の骨頭の上方約1/3、大転子、内外両側顎の表面、右大腿骨の大転子から小転子にかけての部分、内外両側顎と膝窩面を含む遠位端の前面。このように、大腿骨は左右とも両端の一部を欠いているが、最大長や自然長の計測は可能である。

膝蓋骨は、左右とも、ほぼ完全に保存されている。脛骨では、左右とも、近位端から骨体にかけての部分はよく保存されているが、遠位端はともに欠損している。左腓骨はほぼ全長にわたって保存されているが、右腓骨は近位端と、骨体の下方約1/5が欠損している。足骨のうち、距骨と蹠骨は左右とも一部を欠くだけで、よく保存されている。

### 性・年齢の判定

寛骨の形状から、本人骨が女性のものであることは明らかである。歯の中で歯冠の咬合面が保存されているものの咬耗は、かなりの程度に進行している。しかし、頭骨の三主要縫合は、いずれも全長にわたって、癒着開始の兆候を見せていない。したがって、死亡時の年齢は、壮年前半であったと推定してよいだろう。

### 計測的・非計測的特徴

**脳頭蓋**：長幅示数（71.0）は超長頭型に近い長頭型、長高示数（72.7）は中頭型、幅高示数（102.3）は狭頭型に属する。長耳ブレグマ高示数（64.5）は高頭型に、幅耳ブレグマ高示数（90.8）は狭頭型に属する。特記すべき非計測的特徴はない。

**顔面頭蓋**：顔面頭蓋の計測値では、顎高や上顎高が相対的に小さいことが目立っている。コルマン顎面示数（79.6）は著しく小さく低顎型（過広顎型）に、コルマン上顎面示数（47.4）は低上顎型（広上顎型）に属する。ウイルヒヨウ顎面示数（102.8）は過低顎型に、ウイルヒヨウ上顎面示数（61.3）も過低顎型に属する。眼窩示数は、左（83.3）は中眼窩型に、右（85.4）は高眼窩型に属する。鼻示数（57.1）は過広鼻型に近い広鼻形に属する。鼻根弯曲示数（90.5）は大きく、鼻根部が著しく扁平であることを示している。全側面角（85）と鼻側面角（87）は正顎型に属しているが、歯槽側面角（70）は比較的小さく、突顎型に属している。

頬骨は左右とも二分頬骨になっている。ただし、右頬骨では縫合の中央部の約1/3が癒合している。

**下顎骨と歯**：下顎骨の大きさは中程度である。上述のように、欠損している歯が多く、残存している歯の咬耗はかなりの程度に進行している。左上顎第1・2大臼歯と右上顎第2大臼歯にムシ歯がある。咬合は鉗状咬合である。

**四肢骨**：大腿骨上骨体断面示数（左右とも84.6）は中型に近い広型である。脛示数（左：80.8、右：74.1）は、ともに広脛に属する。推定身長は、左大腿骨最大長からピアソン式を用いて算出すると148.1cm（右大腿骨最大長を用いると148.7cm）になる。

本人骨を調査する機会を与えて頂いた岡山市教育委員会、とくに発掘担当者の草原孝典氏に感謝の意を表わしたい。

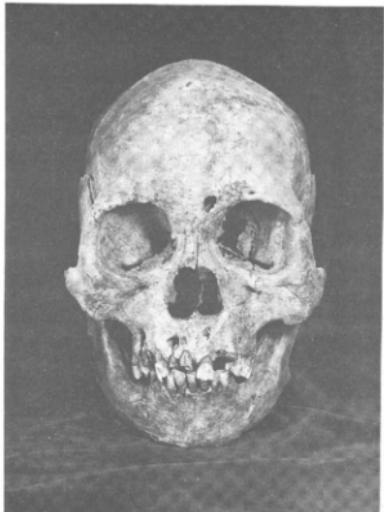
## 糖山遺跡出土中世女性人骨計測値および示数

## 1. 頭蓋骨

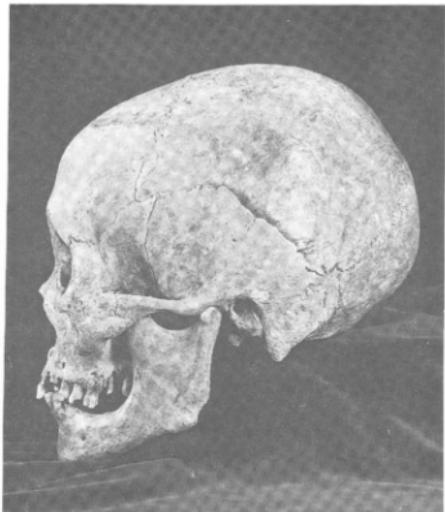
1	頭骨最大長	183	40	顎長	99
2 a	ナジオン・イニオン長	170	42	下顎長	109
3	グラベロ・ラムダ長	178	43	上顎幅	109
5	頭骨低長	101	44	両眼窩幅	100
7	大後頭孔長	37	45	頬骨弓幅	137
8	頭骨最大幅	130	46	中顎幅	106
9	最小前頭幅	92	47	顎高	109
10	最大前頭幅	111	48	上顎高	65
11	両耳幅	125	50	前眼窩間幅	19
12	最大後頭幅	110	F	鼻骨横弧長	21
13	基底幅	100	51	眼窩幅	左 42 右 41
17	バジオン・ブレグマ高	133	52	眼窩高	左 35 右 35
20	耳ブレグマ高	118			
22	ナジオン・イニオン線上穹頂高	112			
23	頭骨水平周	512	54	鼻幅	28
24	横弧長	304	55	鼻高	49
25	正中矢状弧長	362	57	鼻骨最小幅	11
26	正中矢状前頭弧長	125	61	上顎歯槽幅	62
27	正中矢状頭頂弧長	130	62	口蓋長	48
28	正中矢状後頭弧長	109	63	口蓋幅	36
28 (1)	正中矢状上鱗弧長	78	64	口蓋高	11
29	正中矢状前頭弦長	110	65	関節突起幅	130
30	正中矢状頭頂弦長	114	66	下顎角幅	99
31	正中矢状後頭弦長	93	68	下顎骨長	78
31 (1)	正中矢状上鱗弦長	71	69	顎高	29
32 (1)	前頭傾斜角	61	70	下顎枝高	左 57 右 57
32 (5)	前頭彎曲角	128			
33 (1)	ラムダ・イニオン角	103	71	下顎枝幅	左 36 右 36
33 (4)	後頭彎曲角	130			
34	大後頭孔傾斜角	2	72	全側面過度	85
8 / 1	頭骨長幅示数	71.0	73	鼻側面角	87
17 / 1	頭骨長高示数	72.7	74	歯槽側面角	70
17 / 8	頭骨幅高示数	102.3	79	下顎枝角	121
20 / 1	長耳ブレグマ高示数	64.5	47 / 45	コルマン顎面示数	79.6
20 / 8	幅耳ブレグマ高示数	90.8	47 / 46	ウイルヒヨー顎面示数	102.8
22 / 2a	穹頂示数	65.9	48 / 45	コルマン上顎面示数	47.4
9 / 10	横前頭示数	82.9	48 / 46	ウイルヒヨー上顎面示数	61.3
9 / 8	横前頭頭頂示数	70.8	52 / 51	眼窩示数	左 83.3 右 83.3
27 / 26	矢状前頭頭頂示数	104.0			
28 / 26	矢状前頭後頭示数	87.2	50 / 44	前眼窩間示数	18.0
28 / 27	矢状頭頂後頭示数	83.7	50 / F	鼻根彎曲示数	90.5
29 / 26	矢状前頭示数	88.0	54 / 55	鼻示数	57.1
30 / 27	矢状頭頂示数	87.7	63 / 62	口蓋示数	75.0
31 / 28	矢状後頭示数	85.3	66 / 65	下顎骨幅示数	76.2
31(1) / 28(1)	矢状上葉示数	91.0	71 / 70	下顎枝示数	左 63.2 右 63.2
Vertex Rad.(VRR)	122	45 / 8	横前頭示数	105.4	
Nasion Rad.(NAR)	97	9 / 43	前頭両眼窩示数	84.4	
Subsp.Rad.(SSR)	97	9 / 45	頬前頭示数	67.2	
Prosth.Rad.(PRR)	104	66 / 45	頬下顎示数	72.3	

## 2. 四肢骨

	左	右		左	右		
<b>鎖 骨</b>							
1 最大長	134	(125)	1 最大長	387	390		
6 中央周	33	32	2 自然長	382	384		
6／1 長厚示数	24.6	(25.6)	6 中央矢状径	22	23		
			7 中央横径	21	23		
<b>肩甲骨</b>							
12 関節窩長	33	33	8 中央周	72	73		
13 関節窩幅	25	27	9 骨体上横径	26	26		
13／12 関節窩長幅示数	75.8	81.8	10 骨体上矢状径	22	22		
			13 上幅(上端長)	85	83		
			14 前頸および頭長	70	71		
<b>上腕骨</b>							
1 最大長	271	278	15 頸垂直徑(高)	27	29		
2 生理長	268	273	16 頸矢状径(幅、深)	23	23		
3 上端幅	41	47	17 頸周	84	88		
5 中央最大幅	18	19	19 頸横乃至矢状径	40	—		
6 中央最小幅	14	16	21 上頸幅	70	(69)		
7 骨体最小周	55	58	8／1	18.6	18.7		
7 a 中央周	56	59	8／2 長厚示数	18.8	19.0		
8 頭周	122	(126)	6／7 中央断面示数	104.8	100.0		
9 頭最大横径	36	—	6+7／2 頑丈示数	11.3	12.0		
10 頭最大矢状径	38	40	10／9 上骨体断面示数	84.6	84.6		
6／5 骨体断面示数	77.8	84.2	7／21 上頸骨体幅示数	85.2	79.3		
7／1 長厚示数	20.3	20.9	16／15 頸断面示数	85.2	79.3		
7a／1	20.7	21.2					
9／10 頭断面示数	94.7	—	<b>膝蓋骨</b>				
			1 最大高	37	41		
<b>橈 骨</b>							
1 最大長	198	—	2 最大幅	37	37		
2 生理長	186	—	3 最大厚	17	18		
3 最小周	36	36	1／2 高幅示数	100.0	110.8		
<b>脛 骨</b>							
4 骨体横径	15	15	3 最大上端長	67	65		
4 a 中央横径	14	14	4 a 上内関節面深	(34)	—		
5 骨体矢状径	9	9	4 b 上外関節面深	32	—		
5 a 中央矢状径	9	9	8 a 营養孔部最大径	26	27		
5 (5) 中央周	39	39	9 a 营養孔部横径	21	20		
5 (6) 下端幅	28	—	10b 最小周	61	62		
3／2 長厚示数	19.4	—	9a／8a 膜示数	80.8	74.1		
5(5)／1	19.7	—					
5／4 骨体断面示数	60.0	60.0	<b>腓 骨</b>				
			1 最大長	279	—		
<b>尺 骨</b>							
3 最小周	33	34	2 中央最大径	13	14		
5 (1) 上関節面高	34	—	3 中央最小径	9	9		
6 (1) 上幅	19	17	4 中央周	37	37		
11 前後径	10	10	4 (1) 上端幅	26	—		
12 橫径	15	14	3／2 中央断面示数	69.2	64.3		
13 上横径	16	16	4／1	13.3	—		
14 上前後径	25	23					
11／12 骨体断面示数	66.7	71.4					
13／14 偏平示数	64.0	69.6					



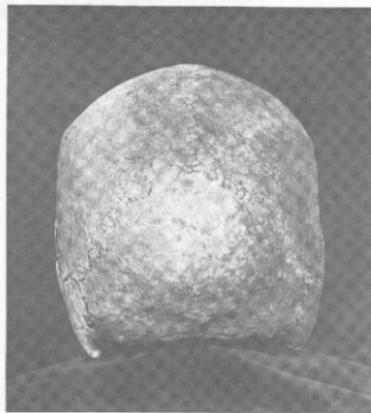
前面觀



側面觀



上面觀



後面觀

すくも山遺跡出土中世女性人骨頭蓋骨



すくも山南から（背後は冠山城、鍛冶山城）



すくも山東から

図版第2



堀切断面



郭1・郭2（南から）



石積1（東から）



石積2（南から）



南側斜面中世墓

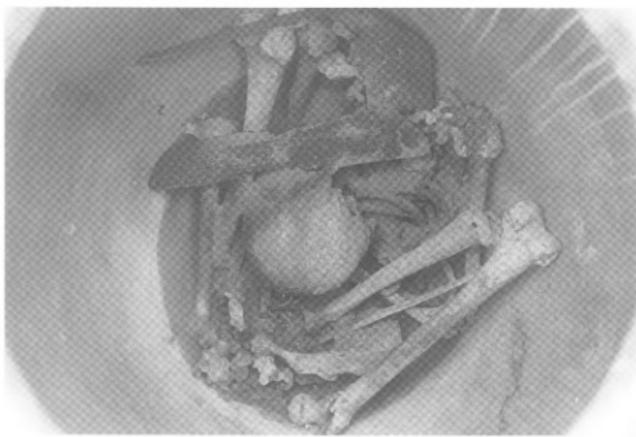


墓3・4・5・6・7・8・9

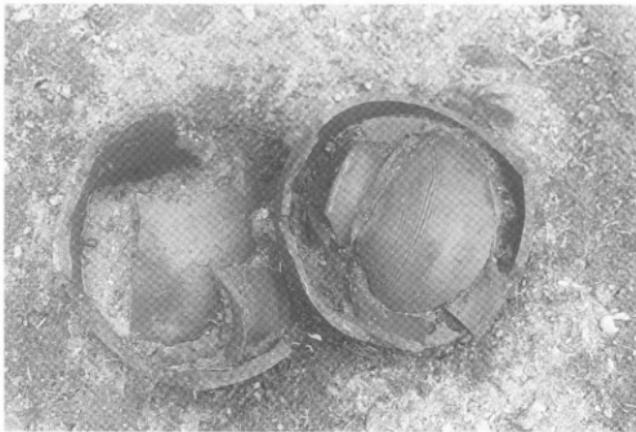
図版第4



墓6 出土状況



墓6 人骨出土状況



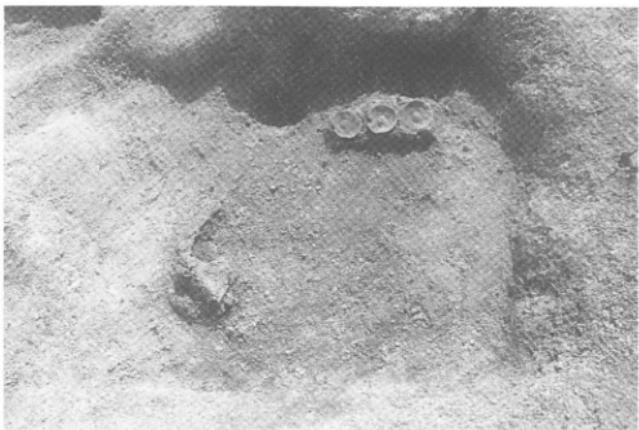
墓2 出土状況



墓 4 出土状況



墓 21 角碟出土状況



墓 21 土師質土器小皿・人骨出土状況

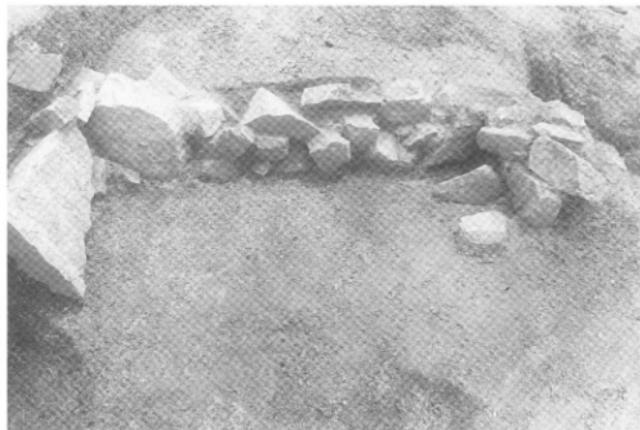
図版第 6



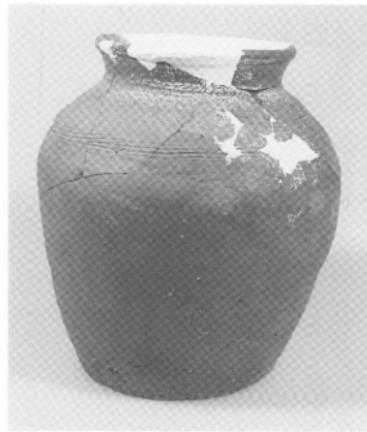
墓 7 人骨出土状況



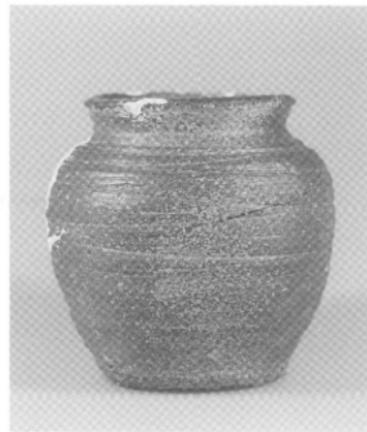
南側 斜面五輪塔



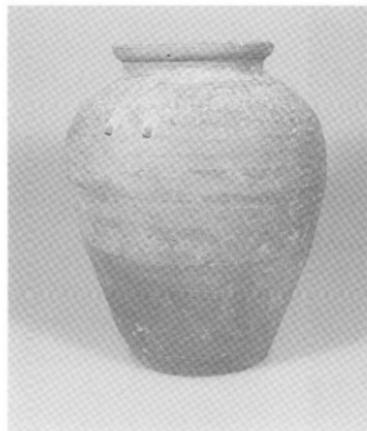
箱式石棺墓



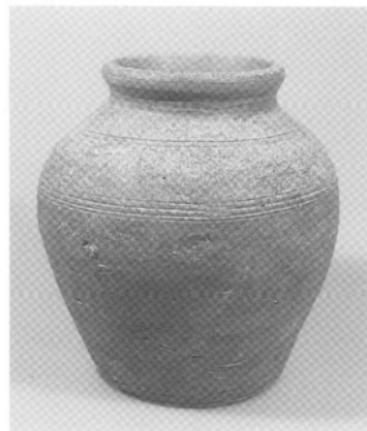
墓 2



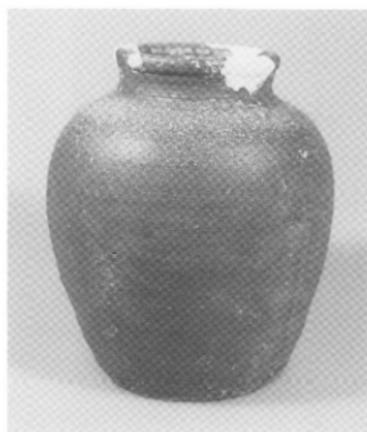
墓 24



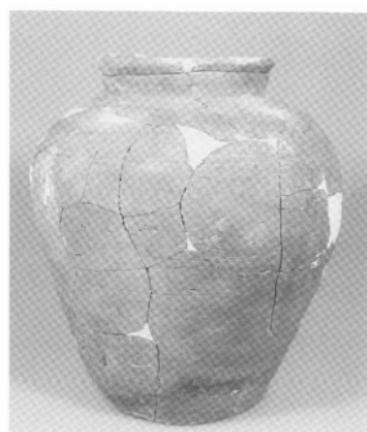
墓 14



49



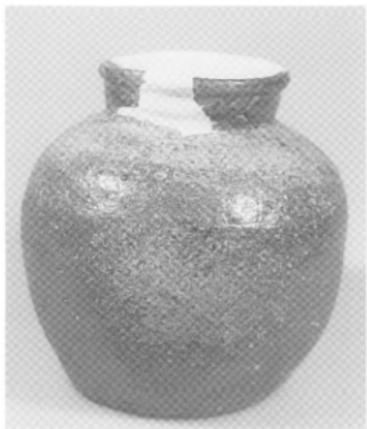
48



墓 10



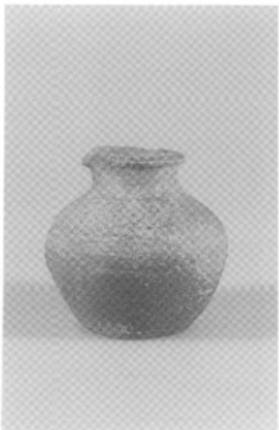
20



21



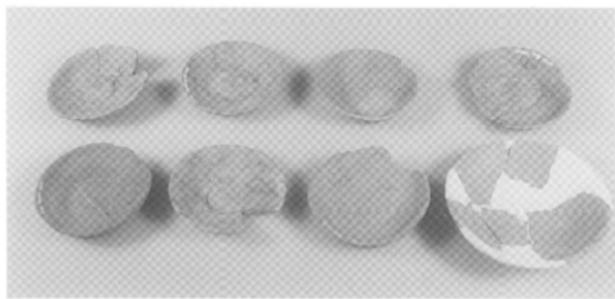
6



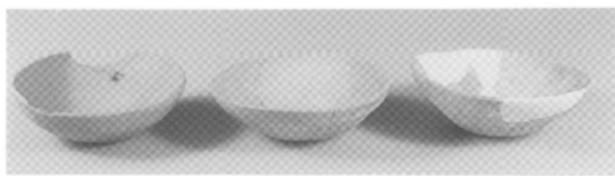
43



52



土師質土器小皿



土師質土器椀



22



鉄器

## 報告書抄録

ふりがな	すくもやまいせき							
書名	すくも山遺跡							
副書名	城郭、中世墓、古墳の発掘調査							
編著者名	草原孝典							
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化課							
所在地	〒700-0913 岡山市大供1-1-1 TEL 086-225-4211							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
すくも山遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 あじらき 足守	33201		34度 42分 30秒	133度 48分 22秒	1997 05 27 ~ 1997 08 06	600	農地改良に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
すくも山遺跡	城郭址 墓 古墳	古墳 中世	郭 墓 古墳	堀切	各時期の土器 石造物 鉄器		多数の中世墓が遺存していた	

## あ　と　が　き

現在、私たちの生活しております地面の下には歴史の豊かさを示す多くの文化遺産が存在しており、これらは埋蔵文化財と呼ばれる市民共有の先人達の遺産であり、子孫へ確かに伝えていかなければならぬ財産であります。

ところが丘陵そのものを削り取ったり、地下数メートルの地盤の掘削をも伴う最近の開発の激しさは、自然環境の破壊や公害問題はもとより、文化遺産に対しても極めて危険な状況を招来させています。岡山市教育委員会の文化課も文化遺産の保護と調査に努めていますが、土地と一体となっています埋蔵文化財の保護行政は開発か文化財の現存かのまさに二者択一の修羅場であります。こうした状況の内で、両者の整合を少しでも図るべく記録保存の発掘調査を実施していますが、その社会的要求は天井知らずの恐れさえ覚えさせられます。私は、各種の発掘現場に立つ都度にその奥行きの深さと掛け替えの無さを痛感せられ、文化財保護行政の責務の重要性を改めて肝に銘じるところです。

此度の発掘調査は、農地改良の土木工事に起因したものです。調査は対策委員の先生方のご指導と、多くの関係者の皆様方のご尽力とご協力により無事終了し、ようやくここに報告書の刊行にまで漕ぎ着けました。極暑下での作業を思い出しながら、各位にここに感謝申し上げます。

発掘調査の成果はこの報告書にまとめましたが、今後の埋蔵文化財の保護保存と調査に、さらに私達の共有財産である郷土の文化財に対する理解と認識を深める一助となることを願うものです。

最後に、此度の発掘調査並びに報告書の作成に厳しい状況の下で精力的な取組みを遂行させた文化課の関係職員の労を多とします。

平成10年3月31日

岡山市教育委員会社会教育部

文化課長 富岡 博司

すくも山遺跡発掘調査報告

平成10年3月31日発行

発行・編集 岡山市教育委員会文化課

発 行 岡 山 市 教 育 委 員 会

岡山市大供1-1-1

印 刷 有 限 会 社 ダイニ 印 刷